0035179000

0035179-000

363.028-Ka776s

社会思想家評伝

河合栄治郎・著

日本評論社

1940　10版

AGC

この印章は本郷新彫刻主任考古学研究室主任 故能勢寅造氏の遺品にあたるものである。（1957年12月）

ハエ2N-60

河合榮治郎著

社會思想家評傳

日本評論社

363.028
Ka776k

447541

序

私は昭和九年の暮に、日本評論社から依頼を受けて、雜誌「經濟往來」(後に改題して「日本評論」)の爲に毎月學者又は思想家の評傳を書くこととなつた。此の依頼を受けた時に、直に思ひ起したのは、ジョン・マッカーンの「六人の急進思想家」(John MacCunn: Six Radical Thinkers, 1910.)であつた。ベンサム、ミル、コブデン、カーライル、マヂニー、グリーンの六人を擧げて、極めて卓拔な評論を試みた同書は、十數年前私が讀んで少からず感嘆したのであつた。私も亦ベンサム、ミル、グリーン、ラッサール、マルクス、レーニンの六人を選擇して、各人の爲に二箇月を當てることとした。所が此の評傳と竝んで、同誌に私が評論文を掲載することが二回に及んだのと、私の都合でミル、グリーンの各々に三ケ月を割いたので、遂にマルクス、レーニンを全く拋棄するの止むなきに至り、本年一月號のラッサールの終篇を以て、辛うじて前四人の評傳を完結しえたのであつた。本書は此の評傳に多少の增訂を加へて、一卷に纒めたものである。

私が經濟學者を選ばずに社會思想家を採つたのには、多少の理由がないではない。私に依れば、經濟學とは單にある現象と他の現象との原因結果の關係を追窮する一經驗科學であつて、此の因果關係からは價値判斷は決して導き出されはしない。而して現存社會秩序に對する批判は、當然に價値判斷の性質を有するもので、之こそ經

濟學とは全く異る社會思想の領域に屬するのである。然るに往々にして經濟學よりして價値判斷が導き出されるが如く誤解して、經濟學あるを知つて社會思想を看過するものがある。私は經濟學の經驗科學としての重要性を否定するものではない、だが經驗科學たる經濟學とは全く別個の社會思想を看過するものは、經驗科學と價値判斷とが性質を異にするを知らざるものか、或は何らかの意味の必然論を前提とするものでなければならない。目下の日本に於て最も必要なることは、現存社會秩序に對する明確なる批判である。然るに之を社會思想に求めることを知らずして、經濟學に之を求めて右往左往するもの、吾々の周圍の青年學徒の中に尠くない。かくて經濟學とは區別せられた社會思想の存在を高調する爲に、私は敢て「經濟學」を採らずして「社會思想」を採り、「經濟學者でなしに社會思想家を選んだのである。グリーンはいかなる點に於ても經濟學者ではない、だが彼は社會思想家であつた。ベンサム、ミル、ラッサールは夫々經濟學者の一面を持つてゐたが、私は彼等を經濟學者として見ないで、社會思想家として窺ふこととした。若し私の筆がマルクス、レーニンにも及んだならば、私は彼等の經濟學と竝んで存在し而も經濟學とは全く異る社會思想を前面に持ち來し、それと經濟學との聯關、その相互の矛盾を描出する意圖であつた。

社會思想は當面の社會秩序に對する批判と、次に來るべき社會の指示とから成る。而して此の批判と指示とは當然に理想社會の概念を前提とし、之こそ社會哲學の領域に屬するが故に、社會思想は必然に哲學に接續する。私は四人の社會思想家を評論するに當つて、彼等の社會思想を哲學の深さにまで掘り下げ、その哲學と社會思想とが、矛盾なき有機的聯關を保持するか否かを、檢討することに重點を置いた。之れ渾然たる思想體系を構成することが、刻下の思想界の急務であると信ずるが故である。唯ラッサールの場合にその思想體系を全く省略したのは、雜誌の頁數の關係で制限されたのと、今度單行本とするに當つても、それを加へえなかつたのは、私の身邊の事情が許さなかつたからで、近く「ラッサールの思想體系」に就て一文を起草して、本書を補足したいと思ふ。

社會學徒の中には、單に思想にのみ興味を持つものと、その思想を產んだ人そのものに興味を持つものとがある。私の如きは後者の部類に屬する。私が本書に於て單に社會思想を語らずして、社會思想家を語つたのは、此の故である。人に關心を持たない人の多くは、自己の課題を始めより特定して、その課題に對する解答を諸々の人より探らんとする。然しいかなる課題を持つべきかを最先の課題とするものは、人に關心を持たざるをえない。蓋し先人の抱いた課題を探ることは、自己が何を課題とすべきかに貴重なる示唆を與へるからである。私は多くの人が始めより自己の課題を特定してゐるのを見て、尠からず不安を感ぜざるをえない、何故なればその課題は自己の主觀的な偶然性により與へられたか、或は自己ならざる周圍より流行的に與へられたに過ぎないものが多いからである。私は過去十數年社會思想家の門を敲いて、先づその人々の課題を探ることに努めた、本書はかかる思想家巡禮の一產物である。

私は本書に於て社會思想家の思想を語るに當つて、社會的狀勢と思想界の狀勢とに、尠からざる紙數を割い

た。然し此のことは存在が意識を決定すると云ふ命題に基づくのではない。存在が意識を決定すると云ふ命題は若し存在が原因にして、意識はその結果として必然的に持ち來されるものと解すれば、私は此の命題を承服しえない。若し存在は單に一つの條件であり、他の條件と併せて意識を持ち來すと云ふ意味に解すれば、私は此の命題に反對するものではない、而して之は私の如き理想主義の歴史哲學を信ずるものにとつて、啻に矛盾する所なきのみならず、理想主義の云はんとする所も亦、畢竟之に外ならないのである。社會的狀勢と思想界の狀勢とは、それ自身のみで特定の社會思想を結果しうるものではないが、先天的なる意識を觸發することにより、超時代的な又超場所的な意識よりして、その時その所に適應せる社會思想を構成せしめる。私が社會的狀勢と思想界の狀勢とを語つたのは、かかる觸發の契機となつたものが何であつたかを示さんが爲であり、之によつてその社會思想の、更に遡つてはその哲學の、特殊性を明かにすることが出來ると思つたからである。

ベンサムとミルとに就ては、私は大正十三年の舊著「社會思想史研究」第一卷の中に、かなり詳細に書いたことがある。私の根本思想に至つては今日と當時との間に何等の變化はないけれども、十數年の時の經過は、之等二人の思想家に對する觀點に於て、多分の相違を生ぜしめた、かくて本書は前著の改訂とも云ふべきものである。グリーンに就ては前著「トーマス・ヒル・グリーンの思想體系」上下兩卷と、殆ど異る所がないが、ラッサールやマルクスを視野の中に包括した今日、尙多少の變化がないではない。讀者が本書と比較する意味で、前二著を併せ讀まれんことを望む。私の研究が英國から獨逸に移つたのが最近であるだけ、ラッサールに就ては未だ曾て筆を執つたことがない。ラッサールの研究は近頃の私を裨益したことの一つで、彼をその一節とする獨逸社會運動史に就ては、一二年の後「獨逸社會民主黨史論」を公にする積りである。

卷末に附けた參考文獻は、所謂圖書館の圖書目錄式のものを意圖したのではなく、少くとも私の手にし私の通讀したもののみを擧げたので、決して網羅的ではないが、多少の註釋を加へたので、本書より更に一歩を進めて、之等の社會思想家を探らうとするものに、何等かの參考となるかも知れないと思ふ。

昭和十一年五月三日

著者

目次

第一篇　ジェレミー・ベンサム……一
(一)　はしがき……一
(二)　社會的狀勢……六
(三)　思想界の狀勢……一四
(四)　生涯……一九
(五)　哲學體系……二八
(1)　はしがき……二八
(2)　認識論と存在論……三一
(3)　人間觀……三三
(4)　道德哲學……三五
(5)　社會哲學……三八
(六)　社會思想……四一

(七) 影響……四八
(八) 批判……五六

第二篇　ジョン・スチュアート・ミル……六一

(一) はしがき……六一
(二) 社會的狀勢……六四
(三) 思想界の狀勢……七五
(四) 生立……八四
(五) 哲學……一一三
(六) 社會思想……一二三
(七) 批判……一三三

第三篇　トーマス・ヒル・グリーン……一三九

(一) はしがき……一三九
(二) 時代の要求……一四七
(三) 思想界の狀勢……一五二
(四) 生立……一五九
(五) 着眼と構想……一七〇
(六) 思想體系……一八三
(1) 哲學……一九一
(2) 社會思想……一九七
(七) 批判……二〇五

第四篇　フェルヂナンド・ラッサール……二〇五

(一) はしがき……二〇九
(二) 獨逸に於ける自由主義……二三四
(三) 獨逸に於ける社會主義……二五五
(四) 生立……二八〇
(五) 運動……二九五
(六) 批判……

附研究文獻

（一）ベンサムの文獻……三〇一
（二）ミルの文獻……三〇一
（三）グリーンの文獻……三〇七
（四）ラッサールの文獻……三一四

寫眞目次

一、ジェレミー・ベンサム……二―三
二、ジョン・スチュアート・ミル……六―三
三、テーラー夫人とミルの筆蹟……一〇〇―一
四、トーマス・ヒル・グリーン……一四〇―一
五、エドワード・ケヤード……一四二―三
六、晩年のグリーン未亡人……一六六―七
七、フェルヂナンド・ラッサール……二〇六―七
八、ステファン・ボルン……二四六―七

第一篇　ジェレミー・ベンサム

（一）はしがき

曾てアンリー・ベルグソンが云つたことがある。「蒸汽機關が發明されてから一世紀が經過した。而してそれが吾々に與へた衝擊の深刻さを、今漸く吾々は感じつゝある。然しそれが產業に於て成就した革命は、人と人との關係を根本的に顚覆せしめた。今や新思想は擡頭しつゝあり、新しき感情は綻びようとしつゝある。幾千年か經過した後遠く隔てて、現代の唯幅太き外輪だけが展望される時が來たならば、吾々時代の戰爭や革命は物の數とも映じない。だが蒸汽機關とそれに伴ふ一聯の發明だけは、吾々が原始時代の鐵器や銅器を云々するが如くに、人間の話題に上るだらう。それは確かに一時期を劃するに足るだらう」と。若し身を二百年前の歐羅巴に置いて、今日のそれと比較するならば、誠に人間生活の激變に打たれずには居られまい。此の激變は何れより來たのであらうか。假りに思想と云ふものの力も及ばない本能的の自然力が人を驅つてこゝにまで齎らしたとしても、尙その力を意識せしめ、且つはその力の發動に滑かな路を開いた所には、依然として思想の威力が數へられねばなら

ない。所謂封建的社會から確然として現代を區劃せしめた思想家は、何人に歸すべきであらうか。

人は直に云ふかも知れない、それこそアダム・スミスやダヴィッド・リカアド等の經濟學者だと。然し此のことを云ふ時に、人は科學と思想とを混同してゐる。科學は甲と云ふ現象と乙といふ現象との原因結果の關係を迚るに過ぎない、此の關係からはいかなる原因を善しとし、いかなる結果を惡しとするかと云ふ是非選擇は導き出されない。そして今吾々が問題としてゐる現代社會の構成者とは、正に現代社會を仰望し選擇したものでなければならないから、その構成者を科學者とすることは當らない。況んや科學も人間社會を對象とする社會科學である時には、人間とはいかなるものであるかと云ふ人間觀を當然の前提として、それから出立せねばならない。スミスの場合には人が利己心により動くものと假定すると云つて、人間觀に就て明白な斷定を下してゐない。リカアドの場合には人は必然に利己心に依つてのみ動くと斷定し、明白な前提を置いてゐる。スミスの場合に稍曖昧であつた人間觀を確立し、リカアドの場合に明白となつた人間觀を提供したものは誰か。その人は經濟科學者以外の人に求められねばならぬ。

然し又彼等經濟學者は單に科學者たるに止まらずして、又經濟政策の學者であつた。彼等が經濟政策として採用した自由主義こそ、現代社會を構成したのだと云ふならば、更に改めて聞かう、政策として何々主義を採る以上は、その主義が是認され肯定される根據がなければならない、その終局の根據は理想社會の概念に求むべきであるが、之等の政策學者は理想社會の概念を何れより援用したのであるか。スミスの場合には此の概念が明白性

ジェレミー・ベンサム

を缺いてゐる、リカアドの場合には明白に「最大多數の最大幸福」の社會が理想の社會なることを前提としてゐる。スミスに於て明白性に乏しきものを前景に持ち來し、リカアドに於て明白な前提となつた理想社會の概念を提供したものは誰か、之も亦經濟政策學者の外になければならない。一は經濟科學の前提たる人間觀を與へ、一は經濟政策に理想社會の概念を授けたもの、之こそ經濟學者と並んで否それ以上に、現代社會の構成者たる榮譽を荷はねばならない、然らば彼は何人か、それがジェレミー・ベンサム（Jeremy Bentham）である。

だがたとへベンサムを擧げようと、スミス、リカアドを擧げようとも、要するに問題は所謂經濟的自由主義の構成者如何と云ふ點に限局される。然し經濟的自由主義のみが、舊時の封建的社會と現代社會とを區別せしめるものであらうか。信仰の自由、思想言論の自由、民衆代表議會の設立、職業の自由、教育の自由、結婚離婚の自由、地方自治、國際平和等の項目を擧げ來る時、之等舊社會と現代社會とを區別させる特殊相は、經濟的自由主義の何れよりも導き出されはしない。之が總括されて自由主義の名に於て實現されたのであつて、經濟的自由主義なるものは自由主義中の單なる一種相に過ぎない。經濟的自由主義を以て自由主義の全部と速斷するのは「經濟的」なるもののみに重點を置くマルクス主義者の妄斷か、或は「經濟」よりも他に智識を持たざる彼の偏狹な經濟學者の無學に過ぎない。固より英國に於ては一六四八年のクロンウェルの革命により、又一六八九年の光榮ある革命により、以上の自由は徐々として實現されて來たのではあるが、之等一切の自由の項目を打つて一丸とし、之を綜合し組織して、自由主義なる一社會思想を構成することが、十八世紀の後半に殘された課題であつた。經

濟的自由主義をも包含して、渾然たる自由主義の體系を構成したこと、その輝かしい功績は吾がジェレミー・ベンサムに歸せねばならない。

こゝに人あつて云ふかも知れない、かゝる自由主義の淵源は、彼の佛蘭西大革命にこそ求むべきであると。だがこゝにも世上一般に流布する混亂と誤謬とが窺はれる。佛蘭西大革命の思想の中には經驗主義の哲學より來るものと自然法の哲學より來るものとの二つが混合してゐた。此の二つの哲學は相互に反撥し矛盾する對立物であつた、然るに之を漫然として一つの體系に包藏した所に、大革命思想の未だ整理されざる弱點が潜んでゐた。若し大革命により爆發した自由主義的要求を基礎付けるべく、矛盾なき哲學を求めんとするならば、二つの方向が考へられたであらう。一は主として大陸に於て發展した行き方で、ルッソーよりカント、フィヒテに傳はる理想主義的基礎付であつた。一は英國に於て爲された行き方で、經驗主義の一元を以て貫徹した哲學を供與することであつた。之を果したのがベンサムの偉業であつた。自由主義を理想主義哲學を以て基礎付けすることは必要ではあるが、ベンサムの後やがて英國でも之が遂に企てられた。吾々は後に之に就て語るであらう。だが初期の自由主義を裏付けるに理想主義を以てすることは、産業革命のまだ萠芽さへ現はれてゐない獨逸に於てのみ可能であつた。見よ獨逸自由主義が産業革命を迎へた時に、ベンサムの自由主義的基礎付けを輸入せねばならなかつたことを、又ベンサムとカント、フィヒテとを夫々整理し得なかつた爲に、いかに自由主義の混亂を持ち來したかを。獨逸自由主義の微力にはその原因は多々あらう、だがその一つに哲學的基礎付が統一整理を缺いたことが數へられねばならない。要するに等しく自由主義でありながら、佛蘭西大革命の底流と英國自由主義との間には、以上の如き顯著な差別がある。ベンサムと大革命思想家とは、大きな種別に於ては一致するが、小さな種別に於ては對立する。此のことを念頭に置かずしては、大陸と英國とのその後の思想發展を正當に把握することは出來まい。

ベンサムは經驗主義の哲學を採つて、之を以て一元的に統一された哲學の體系を構成しようとした。彼れの科學者的正確性は、互に相矛盾し反撥する二傾向を同時に雜居せしめることを許さなかつたからである。そしてその基礎構造の上に、總括された自由主義を置いて、こゝに下は哲學から上は社會思想に至るまで、全部を網羅せる大規模の思想體系が建設された。その着想の雄渾なる、その規模の壯大なる、誠に思想界稀に見られる偉觀である。彼れの體系にも尙矛盾がないとは云はれない。だが吾々の前にジェレミー・ベンサムの體系は巨然として亭立してゐる。その體系は多かれ少かれ資本主義の中に躍動してゐる。それを好むと好まざるとを問はず、その存在を無視することは許されない。後代の思想家の課題は、いかにして彼を克服するかに在つた。ミル、グリーン、マルクスに於て次々に、吾々はその克服の足跡を辿るであらう。

然らば彼は今は後方遙に影を薄めつゝある思想家に過ぎないであらうか。なるほど彼によつて構成された自由主義は、資本主義社會を組成したことの故に、憎惡と呪詛の的になりつゝある。だがそれは經濟的自由主義の負ふべき責任ではあらうとも、全部の自由主義の關はることではない。思想言論の自由、結社團結の自由、政治上

の自由等は、今や資本主義を打壞する手段として活用されつゝあるではないか。況んや經濟的自由主義すらも、曾てはブルジョアーたるとプロレタリアたるとを問はず、凡そあらゆる民衆を解放させる勇ましき戰ひの雄叫びであつた。それが一部特權階級の爲のみに利用されたのは、彼が自由主義の基礎哲學として與へた「最大多數の最大幸福」の理想を看過し歪曲したからである。たとへ一時の偶然により自由主義は岐路に別れようとも、「最大多數」の爲と唱へて、國家主義や官僚主義の妖雲を排して、民衆の幸福を前面に押し出したのは、自由主義の功績に歸せねばならない。見よ自由主義の聖戰なかりし國に於て、今日も尙國家と能率との名に於て民衆の幸福は背後に隱されてゐるではないか。自由主義華やかなりし所、そこに社會主義も亦健實な歩みを續けてゐるではないか。かくて彼は社會思想の隆替を超越して、依然として現代の底流を爲しつゝある。

（二）社會的狀勢

ベンサムの思想史上の意義を捉へるが爲には、彼れの現はれた十八世紀の英國社會狀勢に、一瞥を投じる必要がある。十八世紀の英國こそ、誠に腐敗沈滯の典型であつた。十七世紀にはクロンウェルの革命があり、その後に王政復古があつたが、再び光榮ある革命が起つて、動亂に伴ふ潑剌たる活氣が漲つてゐた。だがそれに續いた十八世紀には、疲勞困憊して暫らく平安を求めようとする念が强かつた。その上に國外を見ると、何れも全く君主專制の下に在り、立憲政治の如き影さへ見えない、殊に海峽の彼方の佛蘭西に於て甚しい。英國ではともかく權利宣言や寬容法が宣布されて、民衆の自由は保證され、二百年に亙る宗教の爭ひは解決された。英國人は他國に比して特權を享有してゐることを滿足して、現狀維持を謳歌してゐることが出來た。今一つの理由を求めるならば、十八世紀は國內に於てこそ多事ではなかつたが、海外への發展は素晴らしいものであつた。シーレー教授が「英國膨脹論」(J. R. Seeley: Expansion of England, 1883.) で書いた英國の膨脹は、實に此の世紀に於て果されたのである。和蘭、佛蘭西を破つて海外の覇權を握つた英國は、一七〇七年には蘇蘭を併合し（一八〇〇年には愛蘭をも併合し）て本國の領土が擴められた。驕れるものは進むことに吝かである。かくて十八世紀の英國を驅つて、唯保守退嬰へと赴かしめたのである。

單に保守退嬰だけならばまだよい、だが困るのは腐敗と無能とが社會を支配してゐたことである。都市の行政は少數の商人の手に握られてゐた。彼等は町費を私し賄賂を收め、腐敗の極に達してゐた。警察制度の如きは全然不完全で、風紀紊亂し盜賊橫行し、殆ど無政府的の狀態に在つた。倫敦は一八〇一年に人口六十四萬一千であつたが、その內一萬は浮浪人であり、五千の飲食店があり、五萬の淫賣婦があつたと云ふ。貴族と僧侶は階級的の特權を擁して、犯罪を爲すも罰を免れることが出來、公職は朋黨の關係を以て與へられた。彼等の私生活がいかに淫靡を極めてゐたかは、デッフォー、スウキフト、フィールヂング、スモーレット等の小說家に描かれてゐる。夏目漱石氏の「文學評論」は此の消息を語つてゐる。殊にベンサムとの關係で觸れて置く必要のあるのは、

當時の法律の不合理だつたことである。地主は狩りする爲の獸を愛護する爲には、鐵砲や人穽を使用して人を殺すことが許されてゐた。重罪犯人の疑を受けたものは、全然辯護することを許されない、之が爲に無實の汚名を帶びて死刑に遭つた者が尠くない。訴訟の當事者は互に證據を提出することを認められなかつた。之等のことは當時の法曹界では少しも怪しまれなかつたのである。殊に法律上の擬制に至つては滑稽に類するものがあつた。民事の原告は必ず國王に對する債務者と看做され、此の債務が被告の不法行爲又は債務不履行の爲に、履行するをえずといふ擬制が用ひられたのである。又原告が或る土地の返還請求の訴訟を爲せば、原告 John Doe はその土地に於て、被告 Richard Roe より受けたる不法行爲に對する訴を爲すものとの擬制を用ひたのである。かゝる無用迂遠な擬制の使用は、法律と云ふものを特殊の法律專門家の獨占的所有物たらしめたのみならず、實際的な日常生活と矛盾し、到底敏活な取引に適應しなかつたのである。

なるほど大陸諸國には存在しない議會制度はあつた。だが併し愛蘭併合前の下院議員五百四十八名の內で、最大部分は南部西部から選出され、新に勃興したバーミングハムやマンチェスター等の都市からは一名の代議士も出されない。オールド・サルムといふ土地から幾名かの議員が出たが、抑々その土地なるものが人口一人も存在しなかつたのであつた。ガットンと云ふ土地では、七人の選擧民が二名の代議士を選擧することが出來た。下院議員の三分の二は、貴族や大地主が指名するのであつて、一人の公爵は十一名を、他の公爵は九名の議員を指名することが出來た。選擧費用は莫大であり、賄賂は公然と行はれ、公然として地盤賣買の廣告さへ現はれた。投票期間は十餘日に亙つて、その間の百鬼夜行は筆紙に盡し難いものであつたと云ふ。之を要するに、十八世紀英國の社會制度は、あらゆる意味に於て最大多數の最大幸福に背馳してゐたのである。

かゝる社會狀勢に直面して、當時の支配階級とその代辯者とは、いかなる見解を抱いたであらうか。ノース卿は云ふ、英國憲法は無限の才智の作物にして、開闢以來嘗て存在したる最も美しきものなりと。法學界の重鎭サー・ウィリアム・ブラックストーンが、一七六五年から九年に亙つて公刊した「英法註釋」(Commentary on the Law of England) は、全卷を擧げて英法を讃美したものに外ならない。ウィリアム・ベーレーの如き冷靜な學者も亦、口を極めて現存選擧制度を讃美し、更にオリバー・ゴールドスミスのやうな小說家が時代を謳歌してゐたのは、一層よく一般人の輿論を物語るものと見てよからう。要するに此の時代は英人の安價な自己滿足の時代であつて、ダイシー教授が之を稱して、ブラックストーン的樂觀主義 (Blackstonian optimism) の時代と云つたのは誠に肯綮に當つてゐた。

保守と沈滯、腐敗と無能、之に對する呑氣な自己滿足、若し之が通常平凡の時代であつたなら、まだ之でも濟んだかも知れない。だが表面にこそ波が立たざれ、底流は恐ろしく渦卷いてゐたのである。それこそ產業革命と云はれて、一七六〇年頃から始まり徐々として進行した大變化であつた。之を記述することは近時經濟史家の好んで企てることであるから、こゝでは詳述を避けよう。だがそれを要約するならば　第一は產業の中心が移動したことである。即ち今まで主要な產業であつた農業から、中心的地位が商工業に移動し、農民は續々として新商

工業地に移住し、所謂農民離地の傾向が現はれて來た。第二に英國工業の中心地が東部又は南部の森林地方から、北部又は西北部の炭坑地方に移動し、そこに幾多の大都會を現出し、之が富の源泉地となり、新思想の勃興地となり、新運動の發生地となつた。第三に獨立工業から家内工業へと工業組織が變化した。家内工業の時に於てすら既に獨立性を失つてゐた工業主は、更にマヌファクチュア工場組織となるや、一層從屬性に拍車が加へられ、彼等は名實一片の賃銀勞働者に沒落した。曾ては封建的の主從關係があつた爲に、まだ雇主の溫情に浴することが出來た。然るに今や主從の關係は消滅し、而も高價な機械を使用する工業が現はれた今、到底雇主の地位に昇る希望は無に歸し、こゝに永久沈淪の外なきプロレタリア階級が形成された。尙彼等にとつて不幸なことは、中世以來の移住を禁止する法律や、最長勞働時間を强制する法律や、最高賃銀を規定する法律が存在してゐたことである。中世的の主從關係は解消して、而も中世的の勞働壓制の法律は依然として殘存する。彼等の苦境は正に察すべきものがあつた。第四に然し最も顯著なことは、ブルジョアーが愈々その勢力を强めたことである。彼等の多くは商人階級から出たが、或は農村の鄕士より出で、或は手工業者より出た。彼等こそスマイルスの「自助論」的の立志傳中の人物であつた。社會秩序の變化した時に於て、徒手空拳を以て巨萬の富を贏ち得た彼等は、成功の原因を個人の努力に置かんとする。自己の實力によつて運命を開拓した彼等は、獨立自助を主張せんとする。他人の援助を借らずして立身出世した彼等は、自由放任主義を求めんとする。彼等はその富に於て手腕に於て、當時の貴族や地主に毫も劣らないのみならず、彼等の多くは智識慾が旺盛で、好んで團體を作り、新思想を研究し、新學問を討論した。バーミングハムに於けるルナール協會、リバプールに於けるワーリントン學會、マンチェスターに於ける文學及哲學協會、ノルウィッチやブリストルやクリフトンに於ける類似の團體を擧げ來れば、その遑がない。それらの研究會に出入して指導の役を演じたものは、哲學者プリーストレー、科學者エラスムス・ダアウィン、詩人コールリッヂ、サウシー等がある。ブルジョアーはその智識に於ても上流社會に劣らない自信を持つてゐた、そして彼等は現狀打破の哲學と政策とを求めて止まなかつたのである。

以上のやうな狀勢を顧みれば、そこには改革の必要が存在した、否改革が待望されてゐた。若し人あつて改革の爲に起つたならば、敢て項羽劉邦たりえずとも、陳勝吳廣にはなりえたであらう。之がベンサム世に出でた時に、彼れの眼前に展開した社會狀勢だつた。だが運命がベンサムの前に置いた役割は、改革先驅者としての陳吳のそれではなかつた。彼れの役割は改革が待望されてゐた時に、最先に躍り出すことではなかつた。今少し複雜な迂餘曲折を辿つて、徐々として現はれて改革の總括を果すことであつた。彼れの前にあちこちに改革の機運が動き始めた、吾々は之等の運動に眼光を轉じる必要がある。先づ始めに擧げられねばならないのは、宗教界に現はれたメソヂスト運動（Methodist Movement）である。十八世紀の英國教會の腐敗は、ルーテル現はれた時の羅馬教會に類似してゐた。こゝにヂョン・ウェスレー、チャールス・ウェスレー兄弟から始まつて、教會の廓清が唱へられた。彼等は從來の教會の空虛な形式に囚はれず、各個人の胸奥の生きたる信仰を重んじた、此の意味に於てやがて來るべき個人主義は、先づ宗教界に第一聲を揚げたのである。次で彼等は信仰を思索瞑想の域に止

めずして、弱き者苦しめる者に對する同情を、信仰よりの必然の命令だと解した。慈善慰問は勿論のこと、純潔なる社會改革が彼等から刺戟を受けたことは尠くない。殊に彼等は好んで鑛山地方の勞働者に說教したが、勞働者は彼等よりして聖書を讀まんが爲に文字を敎へられ、彼等から人格の權威を說かれた。英國後年の勞働運動は彼等の說敎から始まつたと云はれてゐる、こゝに英國の勞働運動と大陸のそれとの差異のあることを、吾々は看過してはならない。

メソヂスト運動によつて投ぜられた波紋は、やがて擴まつて廣く人道主義の運動（Humanitarian Movement）となり、精神及び肉體に與へる苦痛を出來る限り輕減しようとし、それが或は現はれて殘酷な刑罰の廢止となり、或は死刑の減少となり、或は動物虐待の取締となり、更に監獄の改良となり、最も特筆すべき奴隷廢止運動となつた。而してその流れは又一八〇二年の「徒弟の健康風紀に關する條例」（Health and Morals of the Apprentice Act）の制定となり、實に世界最初の工場法をさへ現出することになつたのである。改革の機運は遂に議會制度を不問に附するを許さなかつた。選擧法改正の先驅を爲したのは、ジョン・ウィルクスであつた。彼は忌憚なく國王の政策を批判し、官憲の壓迫を受けると共に、民衆の熱狂的な人氣を負うてゐた。「ウィルクスと自由との爲」（for Wilkes and Liberty）と云ふ當時の流行語は、彼と自由とが同一視されたことを示すであらう。一七七〇年には遂に老ピットをして、選擧法改正案を支持せしめ、一八七二年には小ピットをして改正を提案せしめた。ホイッグ黨の首領フォックスは公開の席上に於て、議會改革の必要を叫び、（一）選擧權を一切の成年男子に與へること、（二）議員の數を地方の人口に正比例させること、（三）被選擧權の財產資格を撤すること、（四）議員に歲費を給すること、（五）毎年議會を開くこと、（六）秘密投票を行ふこと、等を要求した。之れ全く後年のチャーチスト運動の要求そのものである。そして一七八五年には首相ピットが廟堂に立つて自ら改正を企てるまでに立ち至つた。

以上の改革機運は、ベンサムを迎へるに恰當の地盤であつた。若しかゝる時代精神が動いてゐなかつたら、彼は荒野に於ける孤客に終はつたかも知れない。だが彼れの前に現はれた改革は、そちこちに輝いた閃光に過ぎなかつた。斷片的であり孤立的であつた。それでは之を綜合して一社會思想に組織化することが、彼れの任務であつたのか。確かにそれもあつた、だが唯それだけではない。恰も改革機運の動きかけた時に、佛蘭西大革命が突如として勃發した。英國のそれよりも保守と沈滯と腐敗と墮落との甚しかりし佛國では、それに比例して改革は極端であつた。此の時に海の彼方を見守つてゐた英國民の心理こそ、誠に微妙複雜であつた。改革と云ふことに於て共鳴し歡喜し、その極端なる事に於て顰蹙し面を背けた。遂に大革命が愈々極端化して、無政府的混亂に陷つた時、英國には極端な反動が擡頭した。若しベンサムにして改革なりしことの故に徒に大革命に共鳴し歡喜してゐたならば、彼も亦反動の津波に沒したであらう。だが彼は改革の上に立ちながら、判然と大革命の思想と自己を區別した。その故に彼は反動に生き永らへて、英國をして健實な改革へ向はしめることが出來た。吾がベンサムの足跡の興味あるは實に此の點にある。だが、此の點を語るが爲には、私は移つて當時の思想界を展望せねばならない。

（三）思想界の狀勢

ベンサムの思想構成の背景を知る爲には、當時の哲學界に二つの潮流があつたことを考慮に置く必要がある。此の二潮流は啻に當時併存してゐたのみでなく、凡そ哲學のあつた所到る所に存在してゐた。その二つとは理想主義と經驗主義（又は自然主義）である。こゝに理想主義（Idealism）とは、人間に經驗又は自然から結果したのでない、即ち先天的なる（a priori）能力の存することを認める思想であり、之に反して人間も亦自然の一部であり、人間のすべてが經驗又は自然から說明されるとするのが、經驗主義又は自然主義（Empiricism or Naturalism）である。古代希臘に於てソクラテース、プラトー、アリストートルは理想主義を代表し、デモクリトス、詭辯學派は經驗主義を代表した。理想主義が希臘より羅馬を經て中世から近世に傳はつたのに反して、デモクリトスの經驗主義は民族大移動の波浪に浚はれて姿を失つたが、やがて近世當初に至つて復活し、自然科學が勃興して、花々しい業績を擧げるや、自然科學者が自ら意識せずして、自然界の研究に當つて使用した研究方法を研究して之に一の體系を與へ、弘く人間及び社會に就ても、之と同一の研究方法を使用せんとしたのが、フランシス・ベーコンであるが、彼と同一の傾向の上に立ち、別に自然科學者ガリレーにより直接の影響を受けたのが、トーマス・ホッブスであつた。彼は物質、人間及び國家の三者に就て、同一の方法によつて法則を見出さんと欲し、物理學に於ける法則に似たものを、社會學に就ても發見せんとした。後エルヴェシアスは云つた「自然界が運動の法則に支配されるならば、之と等しく道德界は利益の法則に支配される」と。又以ていかに當時の人々が、人間及び社會を對象として、自然科學を建設せんと焦慮したかが分るであらう。

彼等は人間と社會とに就ても、自然科學と同樣の因果の法則を發見することが出來ると信じた。若し理想主義の立場に立つならば、嚴密な意味に於て原因と云ひ結果と云ふは、唯自然界にのみ求めらるべきものであるが、その原因結果を人間と社會とに就ても發見せんとする時に、その出立の前提に於て人は自然と同一視され、自然と異る特殊のものではなかつた、そして人間も亦自然と同じく因果必然の關係に在るものとして說明された。かくて經驗主義の認識論が成立し、經驗主義の人間觀と道德哲學と社會哲學とが成立しかかつた。此の經驗主義の系統に屬するものに、ベーコン、ホッブスの後にジョン・ロック、ダヴィッド・ヒュームがある。彼等こそ英國を支配した主要な哲學の代表者であつた。然し之に對抗する理想主義がないでもなかつた。ホッブスに反抗して起つたケムブリッヂ・プラトーニストを始めとし、シャフツベリー、ハチソン、バトラー等があり、遙にトーマス・リードやサー・ウィリアム・ハミルトン等の蘇國哲學者の一群が之に接續する。固より之等の理想主義者は、後年カントによつて大成された理想主義に比較すれば、多分の夾雜物を包含してゐた、その限りに於て、經驗主義からの影響を免れてはゐなかつた。アダム・スミスの如きは中間型の顯著なものである、彼れの不鮮明性はこゝに由來する。要するに理想主義も亦微力ながら命脈を保持して經驗主義に對立して、凡そ哲學するものに

取捨選擇を迫つたのは、恰も現代に於てマルクスの唯物辯證法と理想主義とが對立するが如くである。ベンサムにして若し一法律家で終はるならば問題はなかつたらう、然し彼にして若し苟くも哲學に思を潜めるならば、經驗主義と理想主義とに去就を決定せねばならなかつた。

だがベンサムの前に去就を迫つたのは、之のみではなかつた。英國から去つて大陸を見ると、そこでは哲學は稍異る行途を辿つてゐた。即ち英國では經驗主義が支配的であるのに反して、大陸ではデカルト、スピノーザ、ライブニッツ以來理想主義が主要潮流であつた。固よりホッブス、ロック、ヒュームの經驗主義の影響を受けたけれども、その混合の比率は英國に於けるそれとは正に逆であつた。社會哲學の領域に於ても、同樣の傾向が觀取される。大革命を惹起した革命思想家の中には、經驗主義を包含してゐると共に、希臘のストイックの哲學から由來した自然法の哲學といふ理想主義があり、又その昔英國のピュリタン教徒によつて作られた米國獨立宣言の影響を受けただけ、一抹の宗教的色彩も窺へないではない。革命思想の中に育成した重農學派の經濟學者ケネーと、後のリカアドとを比較する時に、此の差異が明白に把握されるだらう。人若し大革命思想の夾雜物を整理して、その理想主義に徹底するならば、カント、フィヒテの路となる。その經驗主義を極端化するならば、ドルバッハ、ラメートリーの唯物論となる。だがまだ別に一つの路が留保されてゐる、それをベンサムが踏んだかどうか、それは後の問題として殘されねばならない。要するに大革命思想の分析は後述に讓ることとするが、大革命が異常の出來事であつただけ、ベンサムは革命思想と自己とを、いかなる關係に置くかを決定せねばならなかつた。恰も現代に於て露西亞革命後の共產主義哲學を、一度は檢討の俎上に置く必要あるが如くである。

哲學界を去つて社會思想界に轉じると、十七世紀英國に自由主義的革命はあつたが、未だ系統ある思想にまで組織化されてはゐなかつた。十八世紀の末に再び自由主義的運動は擡頭したが、それは思想的背景を持たないものであつた。僅に此の時注目すべきものを擧げれば、經濟的自由主義の擡頭であらう。經濟界に自由放任を以て臨まうと云ふ思想はノース、ダヴナン、チャイルド、バーボン等のトーリー黨の人達から唱へられた。人之を稱してトーリー自由貿易論者（Tory Free Traders）と云ふ。自由放任を保守主義の手から奪つて、自由主義に連絡せしめたのは、ハチソン、ヒューム、スミス等の功績である。彼等によつて經濟學と云ふ科學が成立し、經濟政策として自由主義が說かれた。之を全自由主義の體系にまで打つて一丸とすることは、十八世紀末に略々成熟の機運に向つたのであるが、その時突如として勃發したのが、佛蘭西大革命であり、之によつて自由主義の運命は暫らく逆睹すべからざるに至つた。

佛蘭西大革命は正に自由主義の革命である。その故に自由黨の首領フォックスは、議會の壇上に於て大革命禮讚の演說をした。然し革命は極端から極端に走つて、何處の果に停止するかを知らざる趣があつた。だが依然として革命を讚美するプライス、プリーストレー、ペーン等の思想家の一群があり、殊に青年學徒は之が爲に熱狂させられた。例へば後年の詩人ワーヅウァースは此の時代に生きてあること何ぞそれ幸福なるやと感激して自ら佛蘭西に旅行したほどであつた。同じ自由主義者でありながら、英國の自由主義者は暴動一揆を好まない。既に萠

芽の形に於てであるが、議會主義と暴力革命主義とは、此の時その對立を現はしてゐたのである。大革命の暴力革命主義だけで既に不安を募らせるに餘りあつたが、更に大革命を恐怖せしめたのは、無政府共產主義がそれから導き出される危險であつた。大革命は自由平等博愛を旗印としたが、その自由は或は一切の强制排除に、その平等は富の平等にまで轉化する可能性があつた。事實に於て此の方向にまで發展させたのが、ウィリアム・ゴドウィンの一七九三年の「政治的正義」であり、翌年のコンドルセーの「人心の進歩に關する歷史的觀察の概略」であつた。ゴドウィンの書は元來は無政府主義を說くに止まるのであるが、當時は共產主義までも說くものと解され、その書一度現はれるや洛陽の紙價を高からしめ「彼れの名聲は天空に旭日の如くに輝いた。何人も彼れの如く語られ、彼れの如く仰ぎ見られ、彼れの如く求められたものはない。自由眞理正義が話題たる所、卽ち彼れの語られざるはなかつた」と。殊に學窓に在つて理想に憧れた靑年を動かしたことは非常なもので、ワーヅウァース、コールリッヂ、サウシーの如きは、何れも著者に感謝の詩を送り、人類の正義と平等の來るべき曉を祝福した。殊にコールリッヂとサウシーとは、自ら米大陸に共產村卽ちパンチソクラシー（Pantisocracy）を建設せんとさへ企てた。

こゝに至つて反動は遂に來らざるを得ない、反動の代表思想家はエドモンド・バークであつた。彼は一七九〇年「佛蘭西革命の考察」を書いて、革命の殘忍暴虐を詰責し、理性萬能の革命思想に對して歷史と傳統との神聖性を主張した。之に動かされて反動の波浪は、遂に全英國を浚つて、極端な壓迫彈壓の時代が始まつた。一七九九年と一八〇〇年の「結社禁止法」(Anti-Combination Law) と、一八一九年の「六法律」(Six Acts) とは、その最も著しい表徵である。左に暴力革命主義と無政府共產主義とを抑制し、右にバークの歷史主義、國粹主義、保守主義とに對抗して、巧みに急激と反動との波を潛るものなかりせば、英國も亦大陸諸國の如くに、改革が數十年延期されたであらう。だが大陸の轍を踏まざりしことに於て、英國は幸福であつた。その功績を荷ふものはジェレミー・ベンサムであつた。

私はこゝで社會的狀勢と思想的狀勢とに筆を止めて、此の雰圍氣の中に育つたベンサムその人の生立を辿ることとしよう。

（四）生　涯

ベンサムは一七四八年二月十五日倫敦に生れた。父は相當富裕な辯護士であつた。子供の健康は極端に不良であつて、脣弱蒲柳の質は彼れの生涯に付き纏つてゐた。然し恐ろしく早熟で三歲にして既に羅典語を學び、七歲の時フェネロンが書いたテレマックスの物語を讀み、主人公の公共心に痛く感激し、彼れ自身後年當時を想起して云つてゐる。「私自身の想像の世界で、そして六七歲の幼時に、私は自分を物語の主人公と同一視した。その主人公こそ完全な道德の典型のやうに思はれた。そして私の生涯の行徑が何であらうとも、屢々私は自問自答した。自分はテレマックスであつてはいけないのか」と。彼が後年有名な「最大多數の最大幸福」と云ふモットー

を揭げるに至つたのは、その淵源は遠くテレマックスの人となりにあつたと云ふことである。

一七六〇年歳十二にしてオックスフォード大學に入學したが、曾てアダム・スミスやギボンを失望せしめた此の大學は――當時唯懶惰と奢侈とに滿ちた社交倶樂部に過ぎなかつた――又ベンサムを失望せしめた。然し十五の時に兎も角卒業し、法律の研究に從事することになつてから、時々母校に歸つて法律學の大家ブラックストーンの講義を聽いた。英國法律學の歴史の中に輝かしい頁を占める此の碩學の講筵に列しながら、周圍の學生が筆記をするに忙がしい時に、當時十六歳の少年ベンサムは、筆を執らずに唯端然として聽いてゐた。同學のものが之を問うた時、彼は答へて曰はく、自分はブラックストーンの學說の是非を檢討するに急にして、到底筆記をするの遑なしと。赫々たる權威を前にして、此の意氣があつた。蛇は三寸にして人を呑むと云ふ。此の少年こそやがてブラックストーンの法律學を根柢より崩壞せしめたのであつた。一七六六年十八歳にしてマスター・オブ・アーツの學位をえた。父が子供に求めることは、英法の研究者たることにあつた。ブラックストーンには到底及びもないが、せめて彼に次ぐ法律學者になることを切望したが、此の時分から既存の法律の解釋學に興味を失つたベンサムは、好んでロックやヒューム等の經驗主義の哲學の研究に沒頭し、法律の如きは暫らく捨てて顧みなかつた。父は息子の此の生活を見て、既に一子を失へりと嗟嘆したと云ふことである。然し彼にして若し徒に法律の解釋に浮身を窶してゐたならば、遂に市井法律家の亞流として終つたであらう。だが彼が法律から去つて哲學に沈潛した爲に、英國は時代を劃する哲人を持つことが出來た。のみならず更に法律哲學にさへ革命を惹き起して、結果はブラックストーン以上の足跡を英法學の上に刻することが出來たのであつた。それと同時に此の將來の革命兒にとつて幸福だつたことは、彼が始めよりして哲學の研究に沒頭しなかつたことであつた。彼は始めに父の鼓舞激勵を受けて法律を勉强した。而してその後に始めて哲學に針路を更へた。若し彼にして始めより哲學者であつたなら、彼は哲學の體系を殘したであらうが、その哲學を社會科學と密接せしめ、以て社會の改革にまでその哲學を浸透せしめえなかつたであらう。又彼が法律の解說者として出立を開始したことも、彼にとつて幸福であつた。何故なれば後に立法者として、法律制度を改革するものにとつて、改革さるべき對象を充分に把握してゐることは、何よりも必要な條件だからである。改革者としての彼れの筆鋒が、一々弊害の急所を突いたのは、彼が舊制度のエキスパートであつたからである。彼をして抽象迂愚の改革論者たらしめなかつたのは、彼れの生涯の發途の如何に係る所が多い。

一七六八年プリーストレーの著「政府論」(Essay on Government) が出版された。彼は三年の後此の書を讀んで、その中に「最大多數の最大幸福」(the Greatest Happiness of the (greatest Number) なる句を見出したのである。彼曰はく「公私の道德に關する私の主義が確立したのは、此の小冊子の此の句からであつた。私がその句卽ちその言葉とその意味とが、かくも弘く文明國到る所に普及するに至つたその句を引き出したのは、その小冊子のその頁からであつた。之を見出した時は、私はアルキメデスが比重の根本原理を發見した時のやうに、忘我の境にあつて聲を揚げて叫んだ。數年の後更に熟慮を經て、之に幾多の改訂を爲すの必要を見出したるに拘はら

ず、當時に於ては改訂の如きは殆ど思ひもよらなかつた」と。

後將來いかなる仕事に身を任せようと考へあぐんだ時に、二つの問題が彼れの前に置かれた、その第一は此の世の仕事の中で何が最も重要であるかと云ふことであつた。「立法こそ」と云ふ答へは、彼に代つて既にエルヴェシアスの與へたものであつた。だが第二の問題はしかく平易ではなかつた。曰く「汝は果して立法に天才を有するや否や」と云ふのであつた。彼は幾度か此の問を繰返し、自分の性格中に見出しうべきあらゆる傾向を捉へて、檢討に又檢討を重ねた。而して最後に遂に、怖れながら又慄へながら、彼れの與へた答へは「然り」と云ふのであつた。人は彼が「立法」を天職としたと聞く時に、彼は依然として法律家の域を脱してゐないと思ふかも知れない。立法（レジスレーション）とはベンサムの當時にはまだ、單に既存の法律を改正することに限られてゐたかも知れない、然し彼にとつて法律とは吾々が考へるのとは異つてゐた。凡そあらゆる社會の改革は窮局する所法律に歸するとは、彼が考へてゐた學説であつた。又所謂法律事項に限らず、議會を通過して決定されるあらゆる事項は、法と云ふ形式で民衆に公布されることを必要とすると云ふのが、彼れの後年の見解であつた。そして彼以後彼によつて立法の範圍は擴大され、政府の支出する經費までさへ、法律を以て定められる今日、彼れの提出した「立法」と云ふ答へは、常識を以て考へるよりも、遙に含蓄ある重要さをその内容に包藏してゐるのである。

此の頃までの彼れの生涯は、一言にして云へば法律書生として出發し、やがて哲學に針路を更へたのである。之を現代的に換言すれば、彼は法律學と云ふ經驗科學より出立し、既存の法律の解釋に滿足しえずして、法律制度の改革者となり、立法の終局の理想を何處に求むべきかを腐心して、遂に社會哲學へ又道德哲學へと思索を深め、やがて人とは何であるかと云ふ人間觀にまで到達した。而して身を當時の哲學界に置いて、周圍を眺める時に、一方にシャフツベリー、ハチソン、バットラー等の理想主義を唱へるものがある。だがその力微弱なるに引き換へて、ホッブス、ロック、ヒューム等の經驗主義の上に立つ一群の哲學者があつた。彼等は花々しい業績を擧げて來た自然科學の研究方法を、人間及び社會にも適用せんと企てて、新思想として時代を支配してゐた。ベンサムが哲學界に身を入れた時、右の二つの何れの潮流に己を投ずべきかは、一度は思案を促したことだつたに違ひない、然し彼は容赦もなく經驗主義に加擔した。元來彼は幼少の頃から自然科學に興味を抱いてゐた。後年當時を顧みて云ふに、その時分は化學の誕生の時であつた。そして最近に發明された燐寸はすつかり私を魅惑した。私はそれに就て詩を作つたほどであると。彼れの書齋には佛蘭西語の化學教科書の飜譯があつた。かくして彼がロック、ヒュームの經驗主義の哲學に惹かれたのは、彼れの生れながらの傾向の然らしめる所であつた。既に經驗主義の哲學の渦中に投ずるならば、彼れの自ら云ふが如く、自然科學に對して既に發明された實驗的方法を社會科學にまで擴張適用することが、彼れの念願でなければならない。かくして經驗主義を以て貫徹したベンサムの人間觀、道德哲學、社會哲學は徐々として建設されたのである。

彼れの哲學體系が略々成立するや、完備の形に於てではないが、先づ素描の形に於て、一七七六年匿名を以て出版された。題して「政府斷片論」(Fragment on Government) と云ふ。一七七六年は歴史に於て色々の意味で

忘るべからざる年である。此の年に亞米利加は獨立して、やがて佛蘭西大革命の先驅をなした、此の年にアダム・スミスの「國富論」は現はれ、ギボンの「羅馬衰亡史」が出た、又此の年に英國最大の哲人ダヴィッド・ヒュームは死んだ、その年に吾がベンサムの處女作も亦公にされたのである。忽ちに世の視聽を集め、著者は樣々に揣摩臆測されたが、エドモンド・バークやマンスフィールド卿の如き名流が擧げられた。以て如何に世人の見た此の書の水準の高かつたかが分るだらう。一七八五年から八八年迄彼は弟が技師をしてゐた露西亞に旅行したが、旅行そのものは彼に何等の感激を與へなかつた。唯弟より暗示を受けてパノプチコン（Panopticon）と云ふ一種の監獄の設計圖案を作ることを始めた。之はある一所に監視人が立てば、監獄内のすべての囚徒の一擧一動が解ると云ふ組織の監獄である。此の圖案の爲に彼が費消した金と時とは、想像の出來ないほどであつたが、彼には自然科學者らしい技術的の興味があつて、それが現はれてパノプチコンへの熱情になつたのであるが、こゝにも尋常哲人の持たない獨特の才能の惠まれてゐたことが窺はれる。彼は哲人の迂遠抽象に滿足が出來なかつた、彼は抽象の原理を何處に適用するかを辨へてゐた。然し彼は技術の末梢に囚はれて、組織と統一とを忘れる技師ではなかつた。一言にして言へば、彼はイデオロギーとテクノロギーとを併せ持つてゐた。之こそ正に社會改革者としての必要の條件なのであつた。

彼が露西亞から歸國した翌年即ち一七八九年、彼れの十五年間苦心の結晶たる代表作「道德及び立法原理の序論」（Introduction to the Principles of Morals and Legislation）が出た。前の「政府斷片論」を推敲し、その人間觀道德哲學社會哲學は、遺憾なく表白されてゐる。彼れの名聲はこゝに於て遂に確立した。かくして彼は既に哲學を持ち、立法の成案を持つた。だがまだ必ずしも急進思想家ではなかつた。若し急進思想家なるものが、改革の內容が急進的たることにあるならば、彼も亦既に急進思想家であつたらう。何故なれば彼は社會の理想を「最大多數の最大幸福」に置き、その理想を實現すべく社會改革の念に燃えてゐたからである。だが若し急進思想家なるものを、民衆の爲を思ふと共に民衆と共に改革するものを意味するならば、彼はまだ急進思想家ではなかつた。何故なれば、彼は當時の國王と議會とに望を抱いて、之によつて改革を爲しうるものと思つてゐたからである。即ち彼は改革案を抱ける志士ではあつた。然し現代的に云へば、軍部や新官僚の勢力を藉つて改革を圖らうと云ふ希望を抱いてゐたのであつた。政黨の關係から云つても、當時の保守黨たるトーリー黨に屬してゐた。然るに彼から此の希望を切斷したのは前述したパノプチコンの採用に就てであつた。彼はパノプチコンの採用を幾度か政府に建策し、遂に議會は採用を決議したけれども、國王ジョージ三世は之に反對し、彼れの多年の苦心も水泡に歸した。時は遙に後年の一八一一年であるが、彼は此の以後國王に對して憤慨の念が止まなかつたと云ふ。かくして彼に殘された路は、民衆と共に歩むことに在つた。こゝに於て改革の內容を既に持てる彼は、いかにせば改革を成就しうべきかの方法が重要となるに至つた。彼が自由主義者として名實急進思想家の名に値するに至つたのは此の以後である。

彼れの代表作の現れた年に、海峽の彼方に大革命と云ふ驚天動地の事件が勃發した。彼れの改革の內容から云

へば、大革命の爲さんとする所とは相通ずるものがあつた。又彼は元來佛語に堪能で英語よりも巧に之を綴り、原稿も佛文で書かれたのが多いと云ふ。彼れの秘書瑞西人デュモンは、彼れの著書を佛蘭西に紹介してゐたので、ベンサムの名は佛蘭西に於て夙に知られ、一七九二年彼は佛國國民議會からトーマス・ペーンと共に、佛國市民たる名譽を與へられた。然し彼は丹念に海峽の彼岸を注意して、革命の進行を見守つてゐた。そして大革命が無政府的混亂を繰返すのを見て、決然として佛蘭西革命思想に反對し、革命の基調を爲す自然法の思想を完膚なく批判した。今にして當時を顧みれば、社會改革に就て、海峽の彼方に現はれたのは暴力革命主義であり直接行動主義であつた。之に對立して考へられるのは議會主義であつたらう。今日社會思想界に對立する此の二思想は、既に當時に於て取捨去就を思想家に迫つてゐた。而して彼は議會主義を採つて暴力革命主義を捨てたのである。かくして彼は既に哲學を持ち改革の內容を持ち、民衆と共に起つことを決定し、而も暴力の直接行動を排斥した。彼れの思想體系は既に完備したと云ふべきである。

一八〇八年彼はジェームス・ミルを知り、此の以後ミルは秘書として彼れの膝下に在り、多くの崇拜者を率ゐて、彼れの爲に盡したことは非常なものであつた。ミルは學者としては遠くベンサムに及ばないが、ベンサムに全く缺けてゐた實際的手腕に秀でてゐた。若しミルなかりせば、彼れの思想は實際問題に適用されるに至らず、又彼れの思想は世上に廣く宣傳されなかつたであらう、ミルを知つたことの幸運は、いかに彼が隱者であつたかを思へば足る。彼は蒲柳の體質から來たのであらうが、邸內に籠つて人と面會することを極度に嫌つた。佛蘭西の有名な才媛マダム・ヅ・ステールが彼れの門を敲いて名刺を通じて、それにマダム・ヅ・ステールはジェレミー・ベンサムに會ひたいと思ふと書いたら、ベンサムはその名刺の裏に、ジェレミー・ベンサムはマダム・ヅ・ステールに會ひたくないと思ふと書いて門衛に渡したと云ふ。又ロバート・オーウェンが彼に面會を申込んだ時に、彼はオーウェンに好意を持つてゐたので、申込を全く拒絕はしなかつたが、階段の上と下とで問答したと云ふ挿話がある。かほどの隱者であつたベンサムに、あれほどの崇拜者の群を率引し、一代を支配する勢力を爲さしめたのには、努力奮鬪の典型的性格なるジェームス・ミルは絕對的必要の存在であつた。

一八三二年彼は八十四歲の高齡を以て逝世した。高齡は特に彼に於て幸であつた。と云ふのは彼が多年苦心して來た選擧法改正案は議會を通過し、彼れの瞑目した六月六日の翌日に國王の批准があつたからである。彼はその思想が實現されるのを見て、定めて滿足することが出來たらう。況んやその身邊には當時の各方面の名流が崇拜者として群り、レスリー・スチーブンの言葉を用ふるならば經典を編む門弟を集めたマホメットの如くに晩年を送りえたからである。だが彼は臨終の床には秘書ジョン・ボーリングの外は何人をも遠ざけた。蓋し他人に與へる苦痛を最小ならしめることが彼れのモットーだからであり、遺骸は學問研究の爲に解剖に附することになつた。彼は他人に對する同情の念に富み、その同情は動物にも及んだ。彼れの「最大多數の最大幸福」は、單に言葉の上だけではなくて、その性格に深い根據を持つてゐるのであつた。彼れの骨骼は愛用の衣服を纏はせ、常に庭內を散步する時に使用したステッキを持たせて、今倫敦のユニバーシチー・カレッヂのホールに存置されてゐる

る。此の大學こそ一八二五年、傳統と保守との大學、オックスフォードとケンブリッヂとに對抗して、倫敦に新學問新思想の宣傳普及の爲に建設されたので、ベンサムはその大學の精神的父であり、彼は建設委員會に缺かさず出席したのみでなく、その門弟の多くは大學の爲に活動し、ジョン・スチュアート・ミルが學生の一人であつたことも忘れられてはならない。

以上がジェレミー・ベンサムの外的生涯の素描である。かうした特異の經歷を持つた人により、いかなる思想の體系が構成されたか、それが私の次に語らうとする問題である。

(五) 哲學體系

(1) はしがき

ベンサムの出發は法律の改正と云ふことにあつた。だが法律の改正は當然に當代の全社會秩序に對していかなる態度を採るべきかを前提とせねばならなかつた。こゝに於て彼は社會思想を確立せねばならなくなつた。然し社會思想は又當然に哲學を豫想せねばならない。かくして彼は哲學の體系の構成に到達した。彼自身の着想の時間的順序から云へば、社會思想から哲學へと遡及したのであるが、こゝには論理的の順序を辿つて、先づ彼れの哲學から述べることとしよう。

彼れの青年時代からの念願は、自然科學に使用された因果關係を追窮すると云ふ方法を、人間や社會にも擴張して、現代の所謂社會科學を構成することにあつた。即ちそれは自然主義を以て貫徹する思想體系を建設するにあつた。此の念願を抱いて當時の思想界を眺める時に、二つの種類の反對陣營があることに氣付いた。一つは幼稚ながら理想主義の系統に屬する思想で、人間には自然又は經驗から導き出されないもの、即ち先天的なるものが內在すると唱へて、自然主義の前に微弱ながら命脈を保持してゐた。ベンサムの眼に之はいかに獨斷的な又非科學的なものに見えたであらう。飽くまでも原因を遡ることなしに、半途曖昧糊塗の中に推理を停止して晏如たるもの、それが理想主義だと思はれた。彼れの此の陣營に對する攻擊は、簡潔にして一擧敵陣を突くの概がある。曰はく「正邪の標準に關して今迄述べられたる各種の體系は、要するに論者の一個の好惡に歸するに過ぎない。…何等かの客觀的標準に訴へることの義務を避けるが爲に、又論者の感情意見を讀者に强ひんが爲に案出されたもののみである。」又「道德官、常識、悟性、理性、正しき理性、自然、自然法、自然的正義、自然的公平、善良なる秩序、眞理、等すべて之等の言葉は、畢竟暗默に自己に服從せしめんと欲する人々の獨斷に過ぎない」と。かくして彼は主觀的の獨斷を排斥して、何人にも妥當する客觀的標準を與へようとした。そしてそれは唯科學的方法に依るの外ありえないと考へたのである。

理想主義に對する駁擊は、當時の主要潮流たる自然主義を背景にして、逃亡する敵手に留めを刺すの容易さで

あるが、今一つの反對陣營を突くことはさまで簡單には濟まされなかつた。その今一つとは、佛蘭西大革命を產んだあの自然法の哲學であつた。此の哲學はそれに接續する社會思想として自由主義を採ると云ふ點に於て、ベンサムの社會思想と同一であり、更にその哲學自體も亦一面に於て、自然主義を基礎とすることに於て認識論や人間觀に於てホッブスやロックの系統に屬し、認識論や人間觀に於て、ベンサムと類似してゐた。然しベンサムと異るのは、その道德哲學や社會哲學に於てである。自然法の哲學は遠く希臘のストイック學派の流れを汲んで、吾々の胸奧に神靈がある、之に聽けよと云ひ、後に羅馬法律家の表現を假りて、吾々の衷に自然法なるものがあり、外に在る實定法と對立して、吾々の行爲の標準であり規範であると云ふ。之こそ前に述べた理想主義に屬する思想であつて、ベンサムの反對は理想主義に對すると同樣に之に對してもそのまゝに妥當する。更に自然法の社會哲學によると、人間が社會を構成する以前には各人孤立して生活してゐた。それは自然狀態と呼ばれ、そこには自然法なる法律が存在してゐて、その法律の上に吾々は權利を持つてゐた。所が孤立生活の不便を除くが爲に、各人相集まつて社會を構成する契約を作り、そこで社會が成立し、社會の秩序維持の目的に必要な限りに於て、各種の權利を讓步した。此の契約を社會契約と云ひ、此の契約に於ても最後まで讓步すべからざる權利は留保された。それが自然權と云はれるもので、自由と平等とがそれである。從つて若し自由と平等とが侵害されるならば、之は留保された自然權なのであるから、各個人は支配者に對して叛逆の權利があると云ふのである。かゝる內容を持つ自然法の社會哲學は、色々の方面から甚だ興味ある思想であるが、今はそれを說明する場合ではない。ベンサムは自然法の社會哲學に對して、二つの點に於て反對する。凡そ權利とは法律を俟つて始めて成立するものである。而して法律とは社會の存在を前提とする、未だ社會が成立せざる自然狀態にどうして法律が有りえようか、又法律なき所にどうして自然權なる權利がありえようか。又契約とは法律上の概念である。然るに社會契約とは社會なく從つて法律なき時に結ばれたと說かれてゐる。之こそ論理上の矛盾でなくて何であらう。だが今一つの反對が續く、吾々の祖先が契約を結んで服從を誓つたからと云つて、何故に吾々子孫に服從の義務があるのか。祖先の義務は當然に子孫に繼承されるとしても、契約をしたからと云ふことでは、まだ何故に契約を守らねばならないかの說明にはならない。契約を守らねばならぬと云ふことが更に今一應遡つて說明されねばならない。而してそれこそ社會哲學が果さねばならない任務であるのに、自然法は此の課題を解決してゐないと云ふのである。自然法の社會哲學に對するベンサムの反駁は正に論理的であり、彼れの眼に映じた大革命思想は「混亂と不合理のごつた返し」(a hodge-podge of confusion and absurdity) であつた。一脚を自然主義に置きながら、他脚を理想主義に置き、首尾一貫を缺いた自然法の哲學に對立して、彼は前後矛盾撞着なく自然主義を貫徹せしめた哲學體系を構成せんとした。何故に科學と云ふ言葉がかくも彼を魅惑したのか、何が故に時代の改革者は屢々科學の權威を假りて思想體系を作らんとするのか、此の興味ある問題は後に觸れるとして、ベンサムは一方に理想主義に對立し、他方に自然法の哲學に對立して、彼れ自身の獨自の哲學の體系を構成した。私はそれを次々に語ることとしよう。

(2) 認識論と存在論

哲學の此の二部門に就ては、ベンサムの業績は獨創を缺くか或は分明を缺いてゐる。認識論に就て彼はさしたる著作を殘してゐない。然し思ふにロックよりヒュームに傳はつた感覺論的認識論をそのまゝに踏襲したのであらう。それによれば認識はいかにして成立するかを追窮して、外界より來る刺戟が感官に觸れて感覺を生じ、此の感覺が集合して觀念を生じ、之が卽ち認識であるから、認識の成立には外界より來る刺戟と吾々の生理的器官があれば十分で、先天的なる何物も必要としないと云ふ。かくて理想主義の觀念論的認識論に對する自然主義の感覺論的認識論が成立する。ベンサムは青年時代からロック、ヒュームを好んで研究し、ロックの「人間悟性論」やヒュームの「人性論」は彼れの愛讀書であつたらう。彼が無條件に彼等の認識論を受容したことは、想像するに餘りある。

存在論に至つては、先輩ロック、ヒュームに於ても明白でないから、ベンサムに至つては全く分明を缺いてゐる。然しロック、ヒュームの認識論では、外界から來る刺戟を前提として既に認識成立以前に外界自然の存在を暗默に豫想してゐるから、唯物論を採るものと云つて差支へあるまい。彼等に於て不鮮明であつた唯物論を前景に押し出したのが、佛蘭西唯物論者であるが、たとへ後者ほどでないとしても暗々裡に彼等も亦唯物論者であつた。ベンサムは此の點に於て認識論に就てよりも、更に語る所ないが、彼も亦その立場を論理的に追窮すれば唯物論者であつたに違ひない。要するに認識論と存在論とに就て、彼は獨自の境地を開拓することなく、先人の業績を繼承したに過ぎない。彼が眞に活躍を恣にしたのは、次の部門に於てである。

(3) 人間觀

人間とはいかなるものであるか、何によつて人間は動くものであるかは、ホッブス以來英國哲學者の好んで論じた問題であつた。こゝでも理想主義と自然主義とは對立して、前者は人間に先天的な利他心のあることを說いた。之に反して後者は利他心なるものはそれ自身固有なものではない。人間は唯利己心によつてのみ動くものである。一見利他心の如くに見える場合も、實は利他が自己に利益があるが爲であつて、唯利己心の變形したものに過ぎないと云ふ。此の論爭の眞唯中に立つてベンサムの與したのは、云ふまでもなく自然主義の人間觀である。彼はその代表作「道德及び立法原理の序論」の卷頭第一頁に云ふ「自然は吾々を二つの主權者の支配の下に置いた。その二つとは卽ち快樂及び苦痛（Pleasure and Pain）に外ならない。吾々が何を爲すべきかを指示するのも、はた又何を爲さんかを決定するのも、唯彼等に在る。一方に於て何が正しきか、何が誤れるかの標準も、又他方に於て何が原因にして何が結果なるかの說明も、共に係つて之等の主權者の王座に在る。彼等は吾々の行爲に言語に又思考に、常に吾人を支配する。吾々が彼等の支配を脫せんとする努力は、畢竟彼等の存在を確認せしめる用を爲すに過ぎない」と。卽ち人間は常に自己の快樂を求め苦痛を避ける衝動に支配されるので、而もそ

の支配はそれから脱することの不可能な絶對的なるものである。彼れ以前に於て利己說を唱へたものはある。現にアダム・スミスは「國富論」の中で「個人的利益、卽ち彼れ自身の境遇を改善せんとする各個人の自然的努力」と云ふ言葉を、前後數箇所に使つてゐる。然しスミスは之れ以上に說明を試みてはゐないし、「國富論」と並んで公にされた「道德情操論」に於て、人間の利他的傾向を說いてゐて、兩者の聯關が十分に企てられてゐない爲に、スミス研究者を惱ましたのであつた。ベンサムの利己說は以上の如くに簡明にして又直截であつた。之が思想史上に於て「快樂主義」(Hedonism) と云はれる人間觀である。

何故に科學的卽ち原因結果を追窮すると云ふ方法を採るならば、人間は利己心によつてのみ動くと云ふ結論に到達せねばならないのか。思ふに、人間に利他的行爲が存在することを認めるとしても、それを固有の利他心として承認することは因果關係の追窮を半途に停止することの如くに感ぜられ、更に遡つて今一歩その原因まで追窮して、利己心に到達することが、いかにも科學的の確實性があると考へさせたのであらう。更に今一つの理由を求めれば、利他心は人間に特有のものであるが、利己心は動物界一般に共通する普遍性を持つてゐる。人間を自然の一部として取扱はうとする自然主義者は、自然に共通する原因を、人間をも動かす原因と斷定したかつたのであらう。更に彼等以前の中世的思想に於ては、殊更に人間性を美化しようと努めた傾向があつた。一般に他の點に於ても中世的思想に反抗する彼等は、殊更に人間性を惡化することを以て、眞實を隱蔽しない科學的態度と感じたのであらう。その理由は何であらうとも、ベンサムは快樂主義の人間觀を打ち建てた。彼によつて人間は唯自己の苦痛を避け快樂を求めるものと斷定され、而も此の衝動は絶對的の支配力を持ち、人間は此の衝動の前に如何ともすべからざる運命に在ると見られた。卽ち彼に於て人は因果必然の法則に支配され、意志の自由を持たざる被決定的の存在物となつたのである。此の人間觀がいかに此の以後の科學者の前提となり、又いかに資本主義のイデオロギーとして資本家を動かしつゝあるかは、後の章に於て述べることとしよう。今一つこゝに附け加へる必要のあるのは、かうしてベンサムは各個人は自己の利害によつて動くと見たから、個人の集團である治者階級は、當然に自己の利害によつて動くと見て、彼は之を不正の利害 (sinister interest) と稱して、之あるが爲に社會の改革が行はれないのだと說明した。見よこゝに政治形態は社會關係によつて決定されると云ふ唯物史觀の萠芽は旣に現はれてゐる。ベンサムとマルクスとは凡そ正反對の立場に立つかのやうであるが、奇怪にも色々の意味に於て類似した要素を帶びてゐる。こゝにもその一例があることを注意して、後の照應の伏線としよう。

(4) 道德哲學

人間は行動して外界に働きかけねばならない。それが爲には行動の準則がなければならない。從來理想主義は、或は正義と云ひ、理性に從へと云ひ、或は自然法に從へと云ふ答へを以て之が準則を示した。だが何が正義であり理性の命ずる所であり、自然法に從ふとしたらどうしたらよいのか、之こそ正に行動の準則であるべきに、

準則が徒に抽象的であつて漠として捕捉し難い。之がベンサムの理想主義の道德哲學に不滿な所以であつた。彼は抽象的ならず具體的に、主觀的ならず客觀的なる準則を與へようと欲した。かくして善とは何ぞや、吾々の行動の準則は何ぞやと云ふ問に對して彼は答へた。曰はく「最大多數の最大幸福が善だ」と。前項彼れの「生涯」に於て述べたやうに、此の準則の暗示は既に幼少の頃フェネロンのテレマックスを讀んだ時に萠し、後プリーストレーの著作に接してから爾來、彼れの金科玉條となつたのである。思想史上此の道德哲學は功利主義（Utilitarianism）と呼ばれてゐる。

「最大多數の最大幸福」を目標として吾々は行動せねばならないと聞かされた時、人は理想主義の與ふる道德的命令よりも、より具體的であり平易通俗な目標を與へられたと感ずるだらう。彼は更に詳細に「最大多數の最大幸福」を、いかに計算すべきかを敎へてゐる。それによれば、「最大多數」を計算するに就ては、各人は一人として計算し、何人も一人以上として計算すべからずと云ふ。此の言葉の中にいかに民主主義的意味が籠められてゐるかは後に語らう。「幸福」とは此の場合に快樂を意味するので、快樂の由つて來る所は四つある。自然的、政治的、道德的及び宗敎的之である。自然的とは何人からの力を俟たずして自然に起るもの、道德的とは社會の賞讃非難より來るもの、政治的とは政府當局の與ふる賞罰より來り、宗敎的とは神の賞罰より來るもので、此の三種の快樂苦痛は必ず自然的の快樂苦痛を通じて現はれて來るのである。之等の快樂苦痛を計算して「最大幸福」と斷定するが爲には、七個の條件が必要になる。即ち快樂苦痛の强度、繼續、確否、遠近の四條件の外に、第五に快苦の生產力即ち同樣の快苦が將來再び發生する可能性あるや否や、第六に快苦の純粹性即ち快苦が互に反對の感覺を伴ふことなきや否や、第七に快苦の延長性即ち快苦の影響すべき範圍が多數なりや否や等が、考慮に入れられねばならない。だが以上の七個の條件を考慮すれば、一切の快樂苦痛を計算し、結局何が「最大多數の最大幸福」たるかは容易に決定され、吾々の行動の準則は與へられると云ふのである。なるほどその以前にも「最大多數の最大幸福」と云ふことを唱へた人はあつた。然しベンサムほど詳細な計量方法を述べたものはなかつた。彼れの念願は道德を科學的たらしめんとするにあつた。此の念願よりして此の道德哲學は產れ出でた。今に至るまで功利主義の道德哲學が彼によつて代表されてゐるのは、實に彼が科學的計量方法を提供して、功利主義に一生面を開拓したからである。

こゝまで述べて來ると、人は當然に疑問を挿むに違ひない。最大多數の最大幸福を圖れとは、全く利他的の命令ではないか、然るにベンサムの人間觀によると、人は唯自己の利害によつてのみ動くと云ふ、此の人間觀と彼の道德哲學とはどう調和するのかと。確かに之はベンサムの體系に於ける大きな矛盾である。だが彼は流石に一應此の矛盾に對する活路を忘れてはゐなかつた。彼によるといかにも人間は利己的である。此の人間觀に間違ひはない、その故に人の利己心を刺戟することによつて最大多數の最大幸福を圖らせるのである。即ち之を圖れば賞與を受け之を圖らなければ處罰されると云ふ風にすれば、人はその利己心の故に結局最大多數の最大幸福を實現することになるのであると。此の說明によると一應辻褄は合はせることは出來る。然しそれは一應であつて窮

局に於てではない。私は後に此の點に再び戻ることとする。然し今は彼れベンサムの言葉に從つて話を進めねばならない。最大多數の最大幸福を實現するには、それを實現するやうに各人の利己心を刺戟する社會制度を設けねばならない。のみならず現在の社會制度は最大多數の最大幸福の實現を阻止するやうに作られてゐる。かくして彼は社會制度の批判が重要な問題となつて來た。道德哲學は各個人をしていかに社會に對すべきかを教へて、社會に對する個人の心の持ち方の準備を整へたが、今や社會は何であらねばならないかと云ふ、新な段階に進展する。之が社會哲學の問題である。

(5) 社會哲學

社會制度はいかなる準則によつて批判したらよいか。同じ事を別の言葉で云ふならば、社會制度の理想は何か。之に對するベンサムの答へは道德哲學の場合と同じである。「最大多數の最大幸福」が社會制度の理想であり、之に合致するかしないかによつて、社會制度は善しとされ又惡しとされるのである。此の場合に「最大多數」や「最大幸福」の計量の方法に就ては、先に述べたことがそのまゝこゝに當てはまる。人は道德哲學上の功利主義に對して、之を社會哲學上の功利主義と云ふ。

吾々は之を聞いて、極めて通常平凡の感じしか起らないかも知れない。然しそれはベンサム在りし當時の社會を知らないからである。先づ彼は功利主義を提げることによつて、制度を批判するに原理を以てすることを教へた。此のこと既に大きな革命である。何故ならば當時の人々は——今も多數の民衆は變る所がない——唯制度の中に生れ制度の中に育ち制度の中に死んでゐたのである。人々を圍む制度の傳統の偉力は强かつた。之を批判するは尠くとも身を制度の埒外に置いて、己れを包む制度を客觀視することを必要とする。此の能力は決してベンサム以前の人に、又今もすべての人に、惠まれたことではない。よしや制度の一局部に不便を感じようとも、その部分のみを改めることが精一杯の仕事であつた。その時代に於てである、ベンサムは功利主義の原理を提げて、あらゆる制度をば此の原理によつて善惡の裁決をしようとしたのである。制度が今迄維持されて來たと云ふ傳統や因襲は、彼にとつて何等の神聖性を持たない。彼はあらゆる制度に「何故か」と云ふ問を向けて怯む所がなかつた。若し制度が維持されるならば、それは此の原理によつて肯定された後でなければならない。此の原理によつて否定されるなら、制度はいつにても倒壞しなければならない。此の原理は制度の中に眠れる民衆を覺醒させ、眼を擧げて制度を批判の俎上に上させた。而して馬觸るれば馬を斬り、人觸るれば人を斬る鋭き名刀の武器を與へたのである。

だが之は「原理」を提げたことであつて、原理の「內容」のことではない。それでは彼れの原理の內容は何かと云ふならば、最大多數の最大幸福であるが、此の句の力點は後段の「最大幸福」にはなくて、前段の「最大多數」にあつた。最大多數を計量するに當つては、各人は一人として計算すべきで、何人も一人以上として計算すべきでないと云ふことは前に述べた。各人は一人として計算する。之は當時に於て何と云ふ革命的な響きを持つ

たことだらう。門地や財產や信仰や性別によつて、人には差別があることが當然と考へられてゐた。人は永い間怪しむことなしに此の墮性に支配されて來たのである。此の時ベンサムは幸福を計算するに際しては、國王も貴族も地主も男子もすべてその特權を剝奪されて、臣民と平民と商工業者と婦人と對等の地位に在るべきことを宣告したのである。讀者はこゝで本文第二項のベンサム當時の社會的狀勢を記憶の中から呼び返す必要がある。十八世紀後半の英國は、誠に特權不平等に滿ちてゐた。ベンサムは「最大多數」と唱へることによつて、その懷に鋭刄を藏して、此の特權不平等と戰端を交へたのである。彼は大革命の自然法の哲學には反對であつた。然し大革命の平等と云ふ標語は、ベンサムの「最大多數」と完全に符合する。彼れの言葉は柔軟に聞える。然しその內容は支配階級をして戰慄せしめる含蓄を藏してゐた。かくて彼は社會制度を少數特權階級より解放し、最大多數の所有物たらしめんとした。功利主義の社會哲學は、此の點に於て勇ましき改革の雄叫びであつた。そしてストイックの哲學者、羅馬法律家、基督教の布教師と共に、又更に自由平等博愛を唱へた佛蘭西大革命論者と相竝んで、人類解放の任務を果したのである。

今や彼は自然主義の旗幟の下に、一貫した哲學の體系を構成し、認識論から人間觀、道德哲學から社會哲學までを網羅して、社會制度批判の舞臺に登場した。社會制度是非の鋭刄を提げて、十八世紀末の英國社會を展望した時に、至る處に最少數の最少幸福が見受けられるではないか。今や原理——何の時代にも何の場所にも妥當すべき——を提げて、そこで止まることは出來ない。十八世紀と云ふ時代の英國と云ふ場所への、その原理の適用が緊急の任務となる。こゝに於て私は彼れの社會思想に移らねばならない。

（六）社會思想

彼れの社會哲學によれば、最大多數の最大幸福が社會の理想である。さうして彼れの人間觀によれば、あらゆる人は彼れ自身の快樂卽ち幸福を求めることによつてのみ動くのである。各個人は何人からの指導を俟たずして、何が自己の幸福であるかを知つてゐる。從つて若し各個人をして各々の路を步ましめるならば、その人の幸福は實現されるだらう。そして各個人の幸福の總和が卽ち最大多數の最大幸福になるから、之より來る當然の論理的歸結は、各個人の自由を最大限度に擴張し、唯各人の幸福に必要なる限りに於てのみ、干涉保護を認めようと云ふこととなる。かくしてベンサムの社會哲學からの歸結は、自由主義と云ふ社會思想である。

だが自由と云ふ時に、何からの自由であるかが明かにされねばならない。ベンサムの場合には明白に、自由とは國家からの自由であつた。蓋し彼れの人間觀によれば、人間は利己心によつてのみ動くのであるから、個人が社會を作つて共同生活を營んでゐても、その共同は各個人の利己心から來る繫がりであつて、後の人々の說くやうな內面的の結合ではない。國家も社會の一種としてかうした個人の機械的の集合としか考へられなかつたのである。それのみならず、十八世紀末の英國の國政を掌る官吏は、特權階級の私慾のみを圖り、懶惰にして能率の

擧がらないこと夥しいものであつた。此の點から云つても彼は國家から多くを期待しえない、否進んでかゝる國家との交渉を離れることが最大多數の最大幸福と考へたのである。

彼れ以前に自由主義的要求がないではなかつた。然し彼はあれこれの斷片を孤立的に揭げる自由主義者ではなかつた。彼れの社會哲學上の原理が確立した時に、個々的の自由主義的要求は今や一の原理の上に基礎を置き、一つの中心の圍りに、互に有機的聯關を持つ渾然たる思想となつた。かくしてベンサムにより、身體上の自由、信仰の自由、言論の自由、團結の自由、結婚の自由、離婚の自由、教育職業の自由、經濟上の自由、家族上の自由、國民的自由が說かれて、自由主義——それは初期の自由主義ではあるが——は、こゝに陣營を整へて社會改革の指標として、勇ましく登場するに至つたのである。今之等の自由の一つ一つに就て說明することは、自由主義の書物に讓ることとしよう。だが當時重大な問題であり又その後に於て更に重大となつた經濟的自由に就てだけは、こゝに一言して置く必要がある。

彼が經濟上に自由を要求した根據は、彼れの一般自由主義の根據と異る所はない。最大多數の最大幸福の實現には、產業革命によつて生產力の膨脹した當時に於て、各人に自由な手腕を揮はしめるに如くはないと思つたからである。その著「經濟的綱要」(A Manual of Political Economy, 1798) の序文に云ふ「國民の富の分量を增加せしめんが爲、卽ち生計又は享樂の資を增加する目的の爲ならば、特別の理由なき限り、一般の原則は何事も政府によつて爲さるべからず、企てらるべからずと云ふことである。之等の場合に於て政府の守るべき標語は、『じつとして居れ』」(“Be quiet”) なる言葉でなければならない」と。かくして國家の無用な干涉がなくなれば、最大多數の最大幸福が實現される譯になる。だが今少しく立入つて考へてみると、今こゝに九十九人の貧困な人間と一人の大富豪とがあつた時、その富豪が感ずる快樂の分量は、必ずしも富の分量とは正比例しない。否寧ろ逆比例するのである。してみると此の百人の最大幸福は、九十九人を貧困に置き、大きな富を一人に集中することではなくて、富豪の富を割いて九十九人に分配することになりはしまいか。卽ち最大多數の最大幸福は、却て富の平等を圖ると云ふ社會主義的結論に到達しないかと云ふ疑問が起るに違ひない。流石に彼は後年の限界效用說の先驅とも云ふべき思想を抱いて、此の問題に氣付いてゐた。彼は云ふ「立法者はその目的として、團體の幸福を求めねばならない。此の幸福とは何たるかを更に究めれば、吾々は四個の從屬的の目的を擧げることが出來る。生計、餘裕、平等、安全が之である」と。生計と餘裕とが幸福に必要なことは言ふを俟たない。問題は平等にあるが、彼は之に就て云ふ「(一)富の一定量に對して之に相應する幸福の一定量が伴ふ、(二)不平等の富を所有する二人の人に就て云へば、より多くの富を所有するものは、亦より多くの幸福を享有する、(三)より多く富める人の幸福は、必ずしも超越せる富の分量に正比例しない、(四)富を所有する二人の人の富の不釣合が大なれば大なるほど、幸福の分量の不釣合は小さくなる、(五)二人の人の富の分量が平等に接近すればするほど、二人の幸福の總量は之に從つて大きくなる」と。かくも平等の福音を理解してゐるならば、彼は最大多數の最大幸福の爲に、富の平等を實現せねばならない筈であるが、所が更に進んで安全と云ふ問題に逢着して、彼れの結

論は人の豫期に反して來る、「安全と云ふ此の尊き恩典――最もよく文明を表象する――は一に法律によつて作られるものである。若し法律なくば安全なく、故に餘裕なく、生計の保證すらない。而してかゝる事情の下では、若し平等があつたとしても、それは唯貧窮の平等があるのみである」と。又云ふ「若し安全と平等とが相衝突するならば、一瞬も躊躇があつてはならない。平等は道を讓らねばならない。安全は人生の基礎である、生計も餘裕も幸福も一切は之に依る」と。又「若し財産の平等を圖ると云ふ明白な目的を以て、私有財産權が侵害されるやうなことがあるなら、その齎す害惡は到底回復し難いであらう。何等の安全もなく何等の勤勉もなく何等の餘裕もない社會は、再び原始時代の野蠻狀態に戻るの外はない」と。かくして折角平等に理解を示した彼は、再び私有財産制度の神聖性を固執する結論に到達した。彼れ及び一般の經濟的自由主義者が、平等の見地から批判されるのは、遙に後代の時の經過を必要とする。當時まだ貧富の懸隔がさまで大きくはなかつた。たとへ懸隔があつたとしても、自由主義により正當に戻るだらうと樂觀されてゐた。殊にまだ資本と勞働とが一人格に所有され、勞働の所得が勞働するものに歸屬した時に於ては、私有財産制度の確立は、勞働への好個の刺戟と考へられたであらう。況んや君主諸侯から、いつでも沒收されるかも知れない危險に曝されてゐた時に、己れの物を保護すると云ふことは、單に所謂ブルジョアーのみならず、一般民衆も隨喜させえたのであつた。更に況んやプロレタリアの上には、中世以來各種の壓迫的法律が蔽ひかぶさつてゐた。自由主義の名の下に之等の法律を廢止することは、彼等にとつても福音であつた。當時經濟的自由主義は今日吾々が想像するとは似もつかない、民衆解放の戰鬪的な響きを持つてゐたのであつた。

固より經濟的自由主義に對する功績は、彼れ獨りの私すべきものではない。前にアダム・スミスの「國富論」あつて、經濟現象を歷史的に回顧して、自然に卽ち人爲の干涉なしにすべてよきことが産れ出たことを說明することが必要であつた。後にマルサスの「人口論」あつて、貧困の世に絕えざるは、食料の不足と性慾とにあると云つて、ゴドウィンの社會制度に罪を歸する說を反駁することが必要であり、更にリカアドの賃銀論や地代論がなかつたなら、彼れの經濟的自由主義は科學より來る證明を缺いたであらう。だが經濟學と云ふ科學だけでは、唯原因結果の關係を說明するに止まつて、社會思想として改革を指導することとはなりえない。科學より來る證明を背後に所持して、之に社會哲學の原理を加へ、更に經濟的自由主義のみならず、一切の自由主義を打つて一丸とした所に、彼れの功績が存在する。況んや彼れ自身も亦經濟科學者として、一七八七年「高利辯護論」(The Defense of Usury) を著して、利息に關しても政府は干涉すべからずと唱へて、アダム・スミスの不備を是正し、又一七九八年には「經濟學綱要」を書いて、經濟科學に微少ながら貢獻したのである。

彼は經濟的自由主義を始めとして、一切の自由主義を主張したのであるが、彼れの獨創は單に自由の實現と云ふ改革の內容に止まらずして、改革の方法にも亦窺はれる。從來法律の改正には二種の方法が考へられた。一は立法議會に於ける法律そのものの改革で、二は旣存の法律を裁判官が解釋によつて補充し、以て時代の實情に副はしめることであつた。前者は所謂制定法 (enacted law) であり、後者は判例法 (judge-made law) である。

若し裁判官にその人あつて解釋權を活用するならば、立法を俟たずして法律の改正は爲しえたであらう。現にマンスフィールド卿は之を企てたのであるが、ベンサムは人民と交渉尠き裁判官の掌中に、法律の改革を任せることを有害なりとし、之を立法議會に渡し、人民の代表者をして、法律の改正を爲さしめようとした。又從來の判例法は、法律をして法曹家の獨占物たらしめ、民衆の生活より隔離させる嫌ひがあるので、彼は法典を編纂して、民衆に法律を平易に理解せしめようとした。最大多數の最大幸福を主唱する立場から云つて、啻に法律の內容を改革するのみならず、その改正を制定法によらしめんとしたこと、一定の法典を編纂して法律の通俗化を企てたことは、誠に時宜に適した方法であつた。ベンサム以前には立法と云ふことは、決して國家の主要な職能ではなかつた。ウィリアム・ピットの光榮に輝いた時世に於てすら、法律の制定されたことは一度もなかつたと云ふ。然るに現代に於て立法は政府の重要な職能となり、往年法律で規定したる事項は極めて限定されてゐたのに、現代ではあらゆることが法律と云ふ形式で規定され、一々法文として公布されてゐる。之れ一にベンサムの發案に基づくのである。彼が改革者としての特徵は、抽象的な原理を提げるのみでなく、かゝる微細な技術的方面を忘却しなかつた所に在る。之れ勿論彼が元來法律家出身であつたことにも依らうけれども、一は彼が技術家的能力を持合せてゐたことにも依る。彼れの此の惠まれた能力は、往々にして改革者が大雜把な放言を爲すに止まつて、肝心な所に漏れがあり勝ちな缺點を免れさせた。此の點から云つて、彼れ自身は自由主義を唱へて、國家の職能を最少限度に縮小することを考へたに拘はらず、元來彼れの能力は國家の職能の擴大された時代の官僚にも適したであらうと思はれる。前に述べた模範的監獄の圖案を始めとして、貯蓄銀行に就て又衞生設備に就て、彼はよく案じてよく工夫した。そこには獨逸官僚の面影さへ見受けられるのである。

前に擧げた自由主義、改革の方法としての立法、之だけがベンサムの企てた改革ではなかつた。今一つ重要な改革が殘されてゐた。それは政治組織の改革であつた。たとへ自由主義を實現しようとしても、法律の改正を圖らうとしても、當時の立法議會は容易に改革を行はうとはしない。こゝに於て彼はその原因を探究して、特權階級は自己の不正の利益に執着するが故に、最大多數の最大幸福を欲しないことを發見した。こゝに於て彼は立法議會自體を改革するに非ずんば、一切の改革の路は開かれないと思ひ、政治組織の改革へと注意を向けた。改革の內容はこゝに至り、改革の手段へと發展したのである。十八世紀末以來の政治改革は、彼れの手に落ちて組織的となり系統的となつた。彼は普通選擧、選擧區整理、無記名投票、每年議會の開會等を主張し、更に進んで上院を廢止して一院制を布かんとし、君主制を排斥して共和制を理想的なりとした。殊に注目すべきは、彼が逸早く婦人參政權を認めたことであつて、最大多數を云ふ時に論理上は當然の事とは云ひながら、多くの自由主義者が二十世紀に於てさへ躊躇してゐた問題を、百年以前に喝破したのは、正に時代に先じたものと云はねばならない。かくしてこゝに政治上の自由が加へられて、自由主義には必要とする一切の內容が具備された。彼れの自由主義が何を爲し遂げたか、いかに全社會を根柢から變化せしめたかは、自由主義史が語る所であつて、既にジェレミー・ベンサムと云ふ個人の評傳を逸脫する。

（七）影　響

その時とその後とに及ぼしたベンサムの影響を述べるが爲には、彼れの全思想の個々の部門に就て檢討することとしよう。

先づ彼れの哲學の體系を貫徹する自然主義を採ると、彼は科學的方法を自然から人間及び社會にも擴張せんとした。科學的方法にも許されるべき限界がある。然し彼れの前にあつた反對の陣營が動もすれば、主觀と獨斷と迷信と傳統とに立て籠つて、理想主義の名に於てそれを擁護しようとした當時の狀勢を考慮に置かねばならない。その時に彼にとつて科學的方法を使用するとは、之等の獨斷と迷信と戰ふことを意味してゐた。たとへ自然主義に限界があらうとも、獨斷と迷信とが克服されねばならないことに疑ひはない。かくて彼は自然主義を提唱することにより、思想界から形而上學的要素を驅逐したのである。人若しケネー等の重農學派の經濟學說やスミスの「國富論」を繙くならば、そこに信仰に類する自然秩序の說や、見えざる神の手といふ言葉に出會するだらう。ベンサム出でたる後いかに之等の要素が跡を潛めたか。ケネーやスミスやマルサスの地代論とリカアドの地代論とを比較すれば、之が明白に現はれて來る。前者に於て地代とは神の賜へる恩惠であつた。後者に於て地代とは土地の不足に基づく結果であつた。神の恩惠からではなくて神の吝嗇から來るのであつた。そこに冷徹氷の如き

科學的態度が遺憾なく現出してゐるだらう。一言にして云へば、ベンサムはコントの所謂形而上學時代を送つて、實證的時代を齎らしたのである。佛蘭西大革命の思想にも、自然主義と理想主義との混淆があり、自然の法と云ひながら、法則と云ふ意味の法と、規範の意味の法とが混同されてゐた。彼はこゝでも自然主義の大旆を振り翳して、一元的の自然主義を以て一貫しようとした。かくて英國ではベンサムによつて自然主義は一時代を構成した。然るにベンサムなかりし大陸では、自然主義的貫徹は遙に後代の思想家を必要とした。吾々は後にマルクスが此の役割を果したことを知るであらう。だが英國では夙にベンサムによつて此の任務が果されてゐた。敢てマルクスの到來を必要としなかつたのである。

思想界に於ける彼れの影響を去つて、一般民衆の心理に及ぼした自然主義の影響を見ると、それが民衆に――傳統と墮性の中に默々としてゐた民衆に――吾れと吾が周圍とを見廻してあらゆることに批判の眼を開かせたと云ふことであらう。ジョン・スチュアート・ミルの一言は最もよく此のことを道破してゐる。曰はく「ベンサムは人に探究の精神と、あらゆるものに『何故か』（"why?"）と尋ねる傾向とを與へた」と。探究するに當り又何故かと尋ねる時に、用ふる方法と原理とはたとへベンサムから離れようとも、眠れる民衆を呼び覺まし、飽くまで追窮せずんば止まざる探究の心と、すべてを默過せざる慣習とを敎へたと云ふことは、實に大きな貢獻だと云はねばならない。

移つて彼れの人間觀に至ると、人間に關する科學はすべて人間に對する豫定概念を持たざるを得ない。之が單

なる假定に止まるか、斷定としても差支ないかは後代の問題とはならう。然し兎もあれ何等かの人間觀を前提とせざるをえない。彼は明白に快樂主義の人間觀を供與した。此の人間觀はジョン・オースチンにより法律學に輸入され、マコーレーの如き政治學者に使用され、殊に經濟學者は一樣に此の人間觀に支配された。マルサス、リカアド、マッカロック、シニオル、ジョン・スチュアート・ミルの經濟學にその痕跡は歴々として指摘される。實に彼れの人間觀こそ好かれ惡かれ、正統派經濟學の立論の出發點となつたのである。更に科學より去つて實際界に活動する人々の人間觀を敲いてみよ、そこにもベンサムの快樂主義が侵入してゐる。資本家は云ふ、勞働者には餘分の賃銀を持たせてはいけない、何故なれば人は唯快樂を求め苦痛を避ける爲のみに勞働するのだからと。又彼等は云ふ、社會主義社會は駄目だ、働くも儲けなく働かざるも食へる社會で誰が働くものか、何故なれば人は唯快苦の爲にのみ動くからだと。ベンサムの人間觀は資本主義下に躍動して、資本家のイデオロギーを構成してゐるのである。

轉じて彼れの道德哲學に及ぶ。功利主義は最大多數の最大幸福を圖れよと云ふ高貴な道德說である。だが彼れの人間觀では、人とは唯彼れ自身の利益のみより外動きえない動物である。ベンサムの云ふが如く利他であれば賞讃され、利己であれば處罰されるやうに社會制度を改正すれば、一應辻褄は付くにしても、かゝる社會制度は一朝にして成立しえないし、恐らく永久に不可能だらう。その理論上の間隙から功利主義は變形して、人とは自己の利益の爲のみに動くし、又さうすることが善なのだと云ふ利己主義に墮し易い。ベンサムの功利主義は歪曲されて、かゝる利己主義となつた。のみならず幸福卽ち快樂は善の條件ではあらうが、善そのものではない。善なるものは別に外になくてはならないのに、幸福を善だと云ふ彼れの道德哲學は、手段を化して目的とする主客顚倒の誤謬を犯すものである。かくして功利主義の崩れた結果は、自己の幸福のみを孜々として圖るのが人の道だと云ふこととなる。そして之こそ正に資本主義下に活躍する資本家階級の道德哲學となつたのである。自己の利益あるを知つて他を思はず、幸福の源泉たる富を求めて飽くなき資本主義の道德的イデオロギーは、かくしてベンサムより導き出されたのである。

だが之は彼に十分の責任があるとしても、彼れの意圖に反した影響であるが、彼れの道德哲學の影響として、今一つ注目すべきものがある。それは彼が通俗平易化して俚耳に入り易い內容を揭げて、道德哲學を民衆に普及化したことである。今まで人は傳統と因襲とによつて行動するか、神か國家か輿論かを恐れて行動してゐたのである。かくて人の行爲の準則は外に在つて、彼れ自身の內にはなかつた。ベンサムは最大多數の最大幸福を唱へて、自己の行爲が此の準則に合するか否かの批判を、人彼れ自身の內に置き、外なる準則を抹殺したのである。かくて人は自己によつて動く自律の人となる。此の準則が果して妥當か否かは後代の批判に俟たねばならないが、何よりも道德哲學の任務は人をして自己規律のものたらしめるに在る。ベンサムの道德哲學は果しなくも、此の須要の任務を果したのである。

去つて彼れの社會哲學に移ると、最大多數の最大幸福と云ふ社會理想は、凡そ政策を論ずる者の窮局の前提と

なつた。法律學者政治學者何れも此の影響を受けないものはなかつたが、殊に經濟學者に於てその影響が最も顯著である。正統派經濟學者中の第一人者と呼ばれたリカアドは、經濟科學以外には全く教養のない人であつた。彼は經濟學の出立にベンサムの人間觀を使用したのみならず、その政策の窮局の理想を功利主義の原理に置いたのである。ベンサムは曾て云ふ「ジェームス・ミルはリカアドの精神的父にして、余はミルの精神的父であるから、余はリカアドの精神的祖父である」と。然し啻にリカアドのみではなかつた。マルサス、マッカロック、ミル父子、ジェボンス、シヂウィック、ケヤンス等擧げ來ればその遑がないほど、正統派經濟學者はベンサムにより政策の原理を與へられたのである。學徒でない社會改革者も、或は明白に或は暗默に、功利主義を改革の原理とし、更に資本家も亦資本主義を辯護する爲に、何等か之を肯定する根據を必要とする時には、最大多數の最大幸福の目的に合致するからと云ふ所に逃避した。凡そ最大多數の最大幸福を念願とするとは緣遠き資本家、常には自己の利益の追求が善だと信じる資本家も、普遍妥當の原理を携へる必要ある場合に、立籠つて自己を掩護する藉口の口實と爲したのは、功利主義の原理であつた。此の意味に於てベンサムは利己主義の道德哲學に崩れたと同時に、或は改革の或は保守の社會原理を與へたこととなる。今日に於ても別個の社會理想を持たない者は、その理想を追窮された時に最後の逃避物として持ち出す社會理想は、功利主義より外にないだらう。彼れの影響も亦大なりと云ふべきである。

最後に社會思想としての自由主義の影響に至つては、特に贅言を必要としまい。半世紀間社會改革の思想となつたのは、自由主義であつた。いかに自由主義を批判するものでも、現代に於ての自由主義を批判するに止まつて、その當時に於ての自由主義の任務と功績とを沒却するのではない。最もよく自由主義の業績を評價するものは、自由主義を最も辛辣に批判するマルクスその人であることを想起すれば足るだらう。ベンサムは單に自由主義者として貢獻したのみではない。彼は最大多數の最大幸福に役立つが故にとて自由主義を採用した。すべて一物を肯定するに最深の根據を以てするものは、その肯定愈々强まると共に、その根據よりしてそれが否定されることがありうる。何等の根據を持たざる自由主義者は、いつまでも原型に膠着するの外あるまいが、功利主義によつて自由主義を肯定したベンサム及びベンサム主義者は、最大多數の最大幸福の爲に却て自由主義を改訂する可能性を持つ。自由主義の融通性、可變性、發展性は、こゝに原因ありと云ふべきである。否啻に可能性があるばかりではなかつた、ベンサム存生の時に於てすら、功利主義を原理としリカアドの勞働價値說を援用して、社會主義思想を述べた數名の人のあることを忘れてはならない。彼等は普通にリカアド派社會主義者(Ricardian Socialist)と呼ばれてゐるが、彼等こそマルクスに勞働價値說の援用を暗示し、既に「餘剩價値」とか「搾取」とかの語をさへ使用した先驅者であつた。ベンサム當時に於てこそ自由主義は功利主義に忠なるものであつたらう。然し時代が異なつたならばそれが社會主義とならないと誰が保證し得ようか。最大多數と唱へて特殊と不平等と戰つた功利主義は、正に臨機應變の妙藥でなくてはならない。

以上は彼れの思想の個々的影響を擧げたのであるが、少しく別の方面から彼れの影響を窺ふこととしよう。由

來英國の哲學界には獨逸のそれの如くに、特定の大立物を圍んで多數の門弟が集合し、思想運動を起すと云ふことは稀有なのであるが、ベンサムだけは特別の例外であつた。彼れの身邊で秘書の役目を務めたものには、ジュモンありジェームス・ミルあり、後にジョン・ボーリングがゐた。彼れの門弟には經濟學者として、マルサス、リカアド、マッカロック、ジョン・スチュアート・ミルがあり、法律學者ジョン・オースチン、銀行家にして歴史家たりしジョージ・グロートがあり、政治家としてローバック、モレスウォース、ジョセッフ・ヒューム等がゐた。之等の門弟は「哲學的急進派」(Philosophical Radicals) と呼ばれ、學徒として又實際家として、夫々偉大な業績を擧げた人であつた。その他ベンサム主義者と呼ぶと呼ばざるとを問はず、彼れの主義に共鳴した人々は枚擧に遑がない。その中にはブローハム、ラッセル、マコーレーの如きホイッグ黨の政治家があり、ダニエル・オッコンネルのやうな愛蘭土の煽動家があり、コブデン、ブライトの如きマンチェスター派があり、サー・ロバート・ピールのやうな保守黨政治家があり、更にチェアリング・クロッスの洋服屋であり、そして勞働組合の領袖たりしフランシス・プレースの如き風變りのものもあつた。彼等は倫敦ウェストミンスターにあるクキーン・スクェーアのベンサムの邸宅に出入し、隱者ベンサムの門前は市を爲したと云はれてゐる。その門弟はジェームス・ミルを首領として、功利主義(ユーティリタリアニズム)の宣傳(プロパガンダ)に從事したのである。

當時の思想界は四個の陣營に分れてゐた。最左翼にあるは大革命思想に共鳴する一群で、リチャード・プライス、トーマス・ペーン、ホルン・トューク、ウィリアム・ゴドウィン、ウィリアム・カベット、サー・フランシス・バーデット等が之に屬してゐた。最右翼にあるのが保守主義のトーリー黨で、その機關誌は「四季評論」(クオータリー・レビュウ)であつた。小說家スコットがその編輯主任であつたこともある。此の兩者の中間に位するのが二つあり、右翼に近いのがホイッグ黨で機關誌「エヂンバラ・レヴュウ」を持ち、左翼に近いのがベンサムを中心とする「哲學的急進派」で、彼等は一方で大革命思想家群に反對すると共に、ホイッグ黨を猛烈に攻擊し、その改革が不徹底不忠實なることを咎めた。彼等は一八二四年に機關誌「ウェストミンスター・レヴュウ」を發行し、後廢刊になつたが、一八三四年復活して「ロンドン・レヴュウ」と稱し、次で「ロンドン・エンド・ウェストミンスター・レヴュウ」と改名した。自由黨なる政黨の成立したのは遙に後年のことであつて、ホイッグ黨内の一部はトーリー黨に走り、一部が稍々左傾してベンサム主義に接近するに至つて、始めて自由主義の大旆を揭げる自由黨が生誕したのである。

問題は何故にベンサムはかくも大きな勢力を揮つたかと云ふことである。一言にして答へれば、彼は時代の要求に投じたのである。前に述べた社會的狀勢を顧みるならば、保守と沈滯、腐敗と無能とが、十八世紀以來の英國を支配してゐたことが分るだらう。之は正に改革を必要とする狀勢であつた。而も既に改革の氣運は動いて、ベンサムの出現の爲に準備してゐたのである。此の時に彼は改革の原理と綱領とを、組織的に又體系的に表現した。彼れの現はれること今少し早かつたら、彼は理解されずして終はつたかも知れない。又若し今少し晩かつたら、彼の地位は他人に占められたか知れない。彼れの來るや、晩からず早からず、極めて時を得たのであつた。

だが之だけでは改革の哲人が必要であつたと云ふだけの說明にはなるが、大革命論者を排してベンサムのみ占めえた特殊的地位の說明としては足りない。それには更に二つの理由が附加されねばならない。一は最大多數の最大幸福と云ふ原理は、通俗平易にして何人にも理解し易く、その論理的歸結はいかほどの大膽なる改革をも包含しうるに拘はらず、人をして危險性を感ぜしめない。自由平等博愛と云ふ大革命の旗印が、奈邊まで及ぶか測知し難いのとは、頗る趣きを異にする。次にベンサムの改革の方法は立法議會を改革し、立法を通じて改革を爲さんとするに在る。現代の用語を以てすれば、暴力革命主義を排して議會主義を採つたのである。之が大革命の暴動に戰慄した人々をして、安んじて反動の波を起させた理由であつたらう。當時の佛蘭西と英國との關係は、今日の露西亞と西歐とのそれに類似する。今まで自由の面影さへなかつた佛蘭西と露西亞には、大革命が必要だつたかも知れない。然し既に多少の自由を持つ英國と西歐とは、敢て大革命あることを必要としない。大革命の爆發した佛蘭西には、次に猛烈な反動獨裁政治が布かれた。然し大革命なかりし英國では、敢てさまでの反動の起ることを必要としない。かくしてベンサムの改革思想をして、順風に帆を揚げるが如くに進ましめたのである。之がベンサム主義が時代を支配したことの解釋の要點であらう。

(八) 批判

今にしてジェレミー・ベンサムを回顧する時に、人はその業績の素晴らしさを只管に感歎せずにはゐられまい。彼は下は認識論から始まつて、人間觀、道德哲學、社會哲學を併せて、遂に上は社會思想までを包含する綜合的一思想體系を構成した。貫くに一元的の自然主義を以てし、盛るに改革志士の情熱を以てす。その構想は非凡にして、その規模は雄渾である。かほどの體系を殘したるものは、古來思想史上に類例が尠いだらう。幸にして彼は學徒としての雄志を抱いて、空しく槽櫪の間に朽ちはしなかつた。彼れの思想は半世紀間英國を支配し、彼れ以後制定された法律にして、彼れの影響を受けざるものは一つもないと云ふ。彼に惠まれた時の力と人の和とは、彼れの勢力を單に思想界に限定することなく、直に現實界の改革の實踐にまで押し擴げた。見よ彼は資本主義の思想的構成者であつて、その思想は今も現に資本主義の中に躍動してゐる。之ほどの實踐が特定の思想家に歸せられること、亦思想界に稀有と云はねばならない。

だがベンサムが先人の思想を批判したと同じく、彼れの思想も亦後人の批判の俎上に立たなければならない。一は當時には適合した思想も、事情の變化に伴つて妥當性を失つた點に於て、又その當時に於てすら內包してゐた論理上の誤謬に於て。社會思想としての自由主義は、十八世紀と十九世紀との過渡期には、多分の合理性を持つてゐようとも、十九世紀中頃以後には變形されねばなるまい。否彼れの體系自身が內部的にかゝる發展を促してゐる。社會哲學としての功利主義は一見して無過失の如くに思はれる、だが幸福快樂とは主觀的である。最大多數の主觀的感情に目標を置くならば、本來は改革的原理たるべき功利主義は、却て現實維持の保守的役割を演じ

ることになりはしないか。道德哲學なる部門を重要視したことは正しい。改革の思想體系には道德哲學は必須の存在である。だが道德哲學の存在は必要であらうとも、彼れの人間觀の如くに意志決定論を採るものにとつて矛盾であることは免れない。彼れの幾多の努力にも拘はらず、此の矛盾を結局に於て克服することは出來ない。更に幸福が善であるとは、善の爲の條件と善そのものとを混同する誤謬に陷つてゐる。若し最大多數の最大幸福が善だとしても、その證明は何れから來るか。理想主義を咎めて獨斷と誹つた自然主義者は、こゝでは自ら獨斷を犯してはゐないか。人間觀としての快樂主義は、それが世上一般の事實に適合しないのみならず、博愛動物にも及んだベンサム自身とは最も似もつかない對立物である。殊に人間を決定論的に見ることによつて、道德哲學との連接を不可能にし、改革思想としてのベンサム主義を破綻に導くものである。若しそれ感覺論的認識論に至つては、科學的と誇稱しつゝ、却て科學の成立を不可能にし、眞僞の差別を辨じえないと云ふ自己破滅を齎すであらう。かくて問題は遂に遡つて自然主義自體に及ぶ。「科學的」を以て獨斷と迷信とに戰つたことはよい。然しそのことは人間及び社會の一切を科學化することを以て正當とすることにはならない。科學的方法の妥當性の根據、その限界が重要な問題とならねばならない。

ベンサム以後彼れの思想體系を凝視し續けて、いかにせば之を克服しうるかを苦心した思想家が二人あつた。その一人はマルクスであつた。彼はベンサムが大革命思想の二元的不統一を整理したと同じやうに、ベンサム主義の中にも殘存した二元的不統一を整理して、之こそ純一の自然主義を貫徹した思想體系を構成した。今一人はグリーンであつた。彼もベンサムの二元的不統一性を克服せんとした。だが彼は自然主義の貫徹を以てでなしに、理想主義の一元論を以て矛盾なき思想體系を建設した。だが之等二人の以前に於て、ベンサムの中に生れその中に育つて、可能な限りベンサム主義を修正補綴しようとした一人の思想家があつた。それがジョン・スチュアート・ミルであつた。吾々は次々に之等思想家の足跡を辿るであらう。

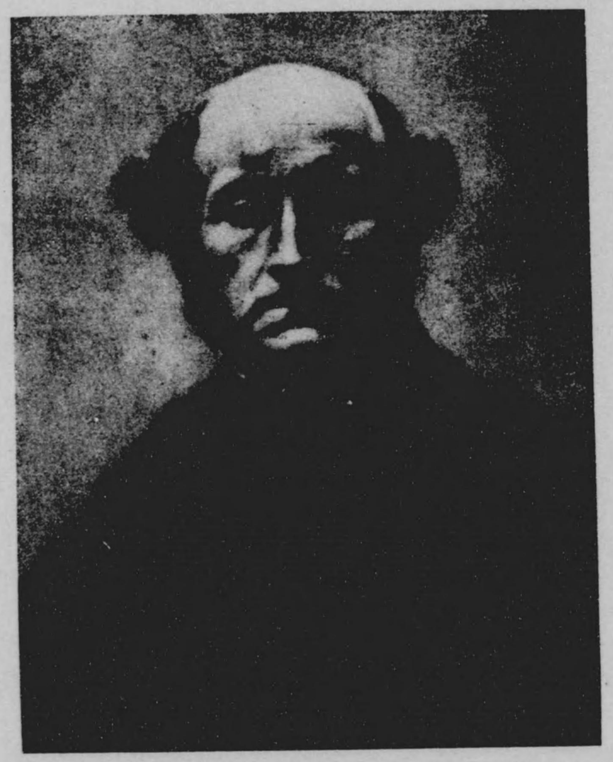
第二篇　ジョン・スチュアート・ミル

（一）はしがき

六歳の少年ジョン・スチュアート・ミルを指さして、父ジェームス・ミルとベンサムとは、あの子を吾々の學派の相續者としようと語つたさうである。此の少年の未來にいかに大きな期待が賭けられたかが分る。だが此の子の將來は彼等が期待したやうな單純なものではなかつた。結局に於て先人の希望を裏切りはしなかつたが、然しそれには實に幾多の迂餘曲折を經過せねばならなかつた。彼は搖籃の時から父を通して又直接ベンサムに觸れて、遺憾なきまでにベンサム主義の浸潤を受けた。だが彼れの成長と共に、ベンサム主義の內藏する理論的缺陷に氣付いて、その主義を破壞しない限りに於て、之に多くの修正補綴を加へようとした。又外界の事情の眼まぐるしい變化に伴つて、その變化に適應するやうに、今まで人の氣付かなかつた程度までベンサム主義を發展せしめ、遂に發展の不可能な所では他の思想を借りて、その足りない部分を補充しようとした。彼れの思想を點檢する時に、いかにベンサム主義の發展が可能であるかが分ると共に、いかにベンサム主義に缺陷があり、それが遂

にミルの試みた方向では修正されえないかが、如實に描寫されてゐるのを見る。ベンサム主義の往くべき極地と、それへの別離と、新な思想の展望とが、彼れの全著作により髣髴として浮び出る、ジョン・スチュアート・ミルの興味は一にこゝに懸つてゐるのである。

ある時代を支配した思想は、次の時代に別の思想によつて代はられる。思想史はかゝる思想の興亡隆替の跡を語るのであるが、多くの場合に前時代の思想と次代の思想とは、餘りに峻嚴に對立し、前代の思想に缺けたる所が次の時代に、必要以上に誇張して述べられ、既に前代の思想に存在する部分は、次代の思想には當然の事として默過され、かくて一の誤謬は他の誤謬を誘發し、一の眞理は他に於て至當の評價を受くることなく埋沒される。かうした思想の交替は、やがて第三に前二者の何れをも包含し、而もその何れでもない思想の出現するに於て、始めてあるべき場所に落着くのであるが、こゝに到達する迄には多分の時間と精力との浪費がある。十九世紀の英國にも前半と後半とに、明白な思想の交替があつた。然し此の場合には、異る二つの思想は徒に反撥し衝突したのでなしに、こゝに前代の思想を身親ら具現した人があつた。彼は可能な限りに時代の變化を一身に體驗して、時代の人々の心を準備し、極めて自然に又圓滑に、次代の思想へと、民衆を送り込んだのであつた。彼は決して次代を指導する思想家ではなかつた。だが彼は前と後とを接續する橋梁の使命を果した。彼あることにより、英國は無用の時間と精力とを浪費することなしに、新時代の思想を迎へることが出來た。彼れの自由主義と思想上に對立するフェビアン社會主義者は云ふ、吾々の若かりし時、ミルの言葉は殆ど法則に等しき權威を有し



ルミ・トーアュチス・ンョジ

てゐたと。そしてその權威の變化と共に彼等も亦變化した。シドニー・ウェッブは云ふ「一八四八年に於けるジョン・スチュアート・ミルの『經濟學』の刊行は、便利にも古き個人主義經濟學の限界を劃するものである。ミルの書物の版の改まる毎に、彼は愈々社會主義的となつた。彼れの死後社會は、單なる政治的民主主義者より、改宗した社會主義者への成長の個人的歴史を、彼れ自身の手によつて描かれて學ぶことが出來た」と。

だが若し對立する前代の思想と後代の思想とが、何れも小規模な又斷片的な思想であつたなら、それの橋梁の役目を演じた思想家の評價も亦大きなものではなくなるだらう。だが前代の思想ベンサム主義は、前篇に於て述べたやうに、自然主義の一元的體系であつた。又後代にグリーンによつて作られた思想は、理想主義を以て貫徹した素晴らしい體系であつた。こゝに自然主義と理想主義とは、全き姿を以て對立してゐる。固より自然主義にも、理想主義にも、各種各樣の形態の分派がある。それにしてもベンサムに於て自然主義は、グリーンに於て理想主義は、その好個の代表者を見出してゐるのである。今吾々の物の見方、物の考へ方、人生の送り方に於て、自然主義と理想主義とは、相對立し相反撥し相矛盾する二つの立場である。若し吾々にして凡そ思想を持たんとするならば、吾々は此の二つの内の何れを採るかの去就を決定せねばならない。ミルは此の二つの體系を右と左とに凝視して、自然主義から出でて理想主義を採り入れ、理想主義から受けて自然主義を離れなかつた。彼れの思想生活に於て、此の二つは鮮明に對立し、比較され對照され判斷され決定された。彼れの思想に於て、吾々は二種の體系の本質的の差別と、その夫々の評價とに就て、多大の暗示を受けるであらう。ミルは單に十九世紀英

國の過渡的思想家ではない、彼は吾等の持つ二大體系の橋梁を爲した思想家であつた。ミルの研究は此の意味に於て、凡そ思想するものにとつて、普遍的の價値を持つ。

だがミルの興味は、單に思想家としての彼のみに止まらない。彼は父の膝下に於て類例なきほどの早教育を受けた。かほどの早熟をした少年は、えて凝結し固定した頭腦の持主になり勝ちなものである。それにも拘はらず、彼は常人の及ばないほどの伸縮力と適應力とを死に至るまで保有し、かくして橋梁としての役目を果しえた。このことは教育學上の奇蹟として數へられねばならない。又彼は父の下に合理主義の化身の如くに育てられ、身親らも又合理主義なる思想を抱きながら、合理的ならざるあるものを胸中に餘して、テーラー夫人と戀愛關係に陷り、單調な學徒の生活に異彩を添へたのであつた。合理主義者が非合理的のものに叛かれ、非合理的な人間關係から、いかに思想上の影響を受けるかと云ふ興味ある問題がこゝに提出されてゐる。ミルの生涯は平凡枯淡な學究の生涯ではなかつた。學究としての彼れの外に、人としての彼が別に語られねばならない。

今私は先づ彼れの周邊に展開したベンサム以後の社會狀勢を擧げて、彼れの思想の展開を促したテーマが何であるかを示すこととしよう。

（二）社會的狀勢

アダム・スミスの「國富論」が出たのは、一七七六年であり、ベンサムがその代表作を出したのは、一七八九年であつて、產業革命は漸く發途に就いたばかりであつた。經濟的自由主義は產業革命の代辯思想であつたと共に、又產業革命の進行を促した拍車でもあつた。かくて十九世紀の始めに至つて、產業革命の社會的結果は漸く次々に世に現はれて來た。人口が都市に集中して農村が衰微するに伴つて、工業を主とするか農業を主とするかの問題がその第一。機械使用の工業が繁榮して手工業が沒落するに從つて、一八一一年から一四年に亙る機械破壞の暴動が各所に頻發した、機械工業對手工業の對立と云ふ問題がその二。機械工業の資本家と勞働者とが對立して、所謂勞働問題は既に一切の條件を具備して出現した。一八一〇年以來ストライキは各所に起つたが、一八一八年には大規模なストライキがランカシアに起り、一八一三年八月十六日には、マンチェスターで勞働者と官憲とが衝突して、多數の勞働者が殺され、世に所謂ピータールーの虐殺と稱されたが、一八二〇年二月二十三日には、倫敦のケートー・ストリートで社會顚覆の陰謀が企てられた。農工何れを主とするかの問題は、容易に工を主とすることに決着した。機械工業對手工業の問題も亦後者を犧牲として前者を保護することに決定した。だが大工業の內部に於ける資本家對勞働者の問題は、しかく容易に決定しうる事項ではなかつた。否爾來連綿として今日に至るまで繼續してゐるのである。此の至難の問題は當時既に擡頭して、解決の如何を課題として要求し始めたのである。

產業革命の結果として以上のやうな事柄が陸續として發生しただけでも、既に未曾有の社會的變動である。所

が之に加ふるに、恰も此の時英國はナポレオン戰爭の渦中に投じて、十八世紀の末からウォーン會議に至るまで約二十年間、生死の角逐を行つてゐた。政治家の注意が國内に集中してゐても、尙ほ産業革命より來る變動に處して、力足らざるを憂へたであらう。然るに彼等の眼は國外に注がれざるをえず、國内の問題を放任して愈々紛糾せしめるの止むなきに至つた。殊に戰爭の爲に政府の負つた借金は莫大な金額に上り、公債額が一七九三年に二三八、二三一、二四八磅であつたのが、一八〇二年には五六七、〇〇八、九七八磅となり、一八一〇年には七三四、七八七、七八六磅、一八一六年には、一、〇〇三、七六八、六九四磅となり、戰爭による公債の增加額は、七六五、五三七、四四六磅と云ふ巨額に達し、之が國民に賦課されたのである。ナポレオン戰爭と云ふ一事を以てするも、英國にとつて非常の國難であつたに相違ない。而も内に産業革命よりの變動があり、内外多事とはこれにこそ該當してゐたらう。

戰爭から生ずる疲弊は、國民の困窮を重加しはしたらう、だが問題の核心は依然として、産業革命の必然の結果としての、資本家對勞働者の問題でなければならない。之に對して自由主義者は云つた、各人がその利益を追求するならば、「見えざる手」によつて、社會の利益は調和すると。だが勞資の利益の調和を圖る「見えざる手」は何處にも見出されなかつた。又云つた、勞働も亦商品の一種である、商品の賣買が契約自由の原則によるべきが如く、勞働の賣買も亦勞資双方の自由なる契約に依るべきで、第三者が干涉容喙を爲すべきではないと。だが勞働は商品の如くに賣買されるが、此の商品は人格に伴ふ商品で、人格と分離しうる一般商品と同一ではない。

此の商品を買ふものは當然に人格を左右する。又云つた、勞資は何れも對等の人格である、宜しく双方好む條件を爭ふべきだと。だが勞働を賣る人格者は破産に瀕した商人に等しい。あらゆるものを賣つて最後に殘る勞働と云ふ商品を賣る勞働者は、飢餓線上に彷徨する弱者である。かくて自由主義者の意圖が何であらうとも、勞働者の勞働條件は同情すべき劣惡のものであつた。殊に當時工場や鑛山に雇はれた勞働者の大部分は、婦人及び少年勞働者であつて、彼等の悲況は特に著しかつた。之に就てはマルクス、エンゲルスの著作や、ハッチンス、ハリソンの共著「工場立法の歷史」(B. L. Hutchins & A. Harrison: History of Factory Legislation, 1911. 3rd ed., 1926.) 等に讓らう。こゝに於て人道主義の立場から、之等の特殊勞働者に對しては、國家が勞働法規を制定して保護すべきで、經濟市場の狀況に放任すべきでないと云ふ運動が擡頭した、所謂工場法運動が之である。

英國で工場法の制定された最初は一八〇二年で、爾來一八一八年一八三〇年一八三三年と引き續き制定されたが、之等はまだ英國「普通法」(Common Law) の傳統たる弱者に對する保護と云ふ立場で立法されたので、社會組織に對する批判とか、特殊の思想に對する攻擊とかに及ばなかつた。所が一八三〇年リチャード・オースラーが「ヨークシアに於ける奴隷制度」(Richard Oastler: Slavery in Yorkshire) を書いて、ヨークシア州の工場勞働者の悲慘な生活を暴露するに及んで、果然全社會にセンセーションを喚起した。つい最近に英國は海外領土の奴隷を解放して自由を與へたのであつた。此の記憶のまだ鮮かな時に、海外ならぬ母國の中に黑奴ならぬ白人の奴隷が默過されてゐるではないか。全社會の良心的輿論を背景として、オースラー、サウシー、サドラー、シャ

フッベリー卿等は、就業時間十時間說を主張した、之が「十時間法案運動」と稱されて、千八百三四十年代を賑はしたのである。恰も英國の穀物が不足して穀物價格が騰貴して、勞働者の生活が困窮してゐる時に、「穀物保護關稅條例」なるものがあつて、穀物に輸入稅を課して穀價を高め、地代と地價とを釣上げて地主を保護してゐた。之に對してコブデン、ブライト等は「穀物條例廢止同盟」(Anti-Corn Law League) を作つて、生活費の低落を圖らうとした。「十時間法案」は地主の政黨たるトーリー黨の人々により支持され、「穀物條例廢止」は資本家の政黨たるホイッグ黨に主張され、前者が勞働者の名に於て資本家の無慈悲を攻擊すれば、後者は勞働者の名に於て地主の橫暴を攻擊する。前者が經濟的自由主義を批判して、政府の立法の干涉を要求すれば、後者は經濟的自由主義の名に於て特權獨占を打破せよと云ふ。こゝに於て勞働立法は階級の對立、社會思想の對立と云ふ巨大な意義を持つに至つた。その結果は一八四六年に「穀物條例」は廢止され、翌年に「十時間法案」は可決されて、兩虎共に傷いたとも云へるし、双方目的を達したとも云へる。

「穀物條例」の廢止は經濟的自由主義の勝利である、のみならず之は自由主義の花々しい未來を祝ふ門出の凱歌であつた。だが以上の如き背景の下に可決された十時間法は、その重要性に於て從來の工場法と同列に律することは出來ない。勞働者は資本家と對等でないことは確立された、何故ならば對等であれば政府の立法の必要はないからである。勞働は普通の商品でないことは認識された、何故なれば一般の商品であれば、敢て保護を加へる必要がないからである。此の意味に於て經濟的自由主義の前提は崩壞したのである、之は手痛い打擊でなければならない。本來資本主義の埒內に於ける補綴工作に關心を持たざるべきカール・マルクスが「國際勞働者協會」の發會の辭に於て「十時間法案」成立の重要性を高調した所以はこゝに在る。況んや此の法案の成立は、單なる孤立した一現象ではない、やがて未來に亙つて擴大强化さるべき立法の序幕に過ぎない、かゝる將來を展望する時に、自由主義はその晴やかな門出に、既に一抹の暗影を投ぜられたのである。自由主義は飽くまで原理に忠實に、勞働立法を否定し續くべきであるか、或は勞働法規を承認することは、自由主義の本質に矛盾なしに可能なのか。又好むにせよ好まざるにせよ、事實として國家は經濟現象に容喙して、個人の自由に拘束を加へた、かくして個人の上に優越の地位を有する國家なるものは、その存在が愈々鮮明にされ、その活動が愈々增大するや、從來の個人主義では說明し盡されないと云ふ缺陷が意識される。個人に對立する社會は果して、個人の機械的集合に過ぎないのか、凡そ之等の問題はミルの眼前に展開して、その解明を要求したのである。

勞働法規は婦人勞働者と少年勞働者を對象とするもので、之等の勞働者と關係ある限りに於て男子成年勞働者に影響するだけであるから、男子成年勞働者は別に自己の勞働條件改善の方策を講じなければならない。個々の勞働者が孤立してゐればこそ、資本家に對抗することが出來ないのであるから、彼等は團結によつて個人の弱勢を補充せねばならない、云はば團結による勞働の獨占價格を作らうとする、かくて勞働組合なるものが成立する。英國に於ける勞働組合の起源は佛蘭西革命以前に遡るが、有名な組合は一七九二年製靴職工トーマス・ハーディーによつて作られた「倫敦通信協會」(London Corresponding Society) で、倫敦だけで組合員の數は三萬を超

えてゐたと云ふ。所が大革命に脅えた政府は、一七九九年と一八〇〇年の兩年に「結社禁止法」を公布して、勞働組合を禁止した。ナポレオン戰爭が終結してから後の勞働者の要求は、實に「結社禁止法」の廢止と云ふ一項に集中した。後年に於てこそ結社の自由は、自由主義の一項目に挿入されたが、元來自由主義と結社との關係は、中々複雜で相當の紆餘曲折を必要とする。即ち自由主義の立場から、結社に就て二つの態度が考へられるだらう。意志に强制を加へないと云ふ立場からすれば、結社の意志に干涉することは自由主義に矛盾する、故に結社の自由を認めねばならないと云ふのが、その一つである。所が結社ある所多數の威力があり、之によつて結社の相手は意志を强制され、結社に加入しない仲間も意志を强制される、かくて結社より生ずる結果に着眼すると、結社は意志を强制し自由主義に矛盾するから、結社禁止こそ自由主義の本來の趣旨に合すると云ふことになる、大革命は此の立場に於て結社禁止の態度を採つたのである。英國の自由主義者は二つの態度に對して取捨を決すべき地位に置かれた。所が彼等の意見は區々に分れて容易に決し兼ねたが、結局に於て結社の自由を認めることに落着して、フランシス・プレース、ジョン・グラスト、ジョセッフ・ヒューム等の盡力で、一八二四年に「結社禁止法」は廢止されて、勞働組合は自由の地位を與へられた。然し之等の人々の警告にも拘はらず、束縛から解放された勞働者が各地で餘りに猛烈なストライキを企てたので、資本家は驚愕して翌一八二五年改正して、組合の行動に色々の拘束が加へられるやうになつた。之等の拘束が解かれて組合が名實自由になつたのは、一八七五年であるが、兎も角、一八二四年一八二五年の何れもの組合法は、勞働組合の設立を禁止しないこととして、結社團結の自由を認めた原則に於ては變りがない。

一八三〇年市場の景氣が回復するや、「新組合主義」が擡頭し、從來一職業一地方に限られてゐた組合を、全職業に亙り全國的に結合せんとして、「英國大聯合組合」成立し、三十二年改名して「勞働保護國民協會」となつたが、大した成功なくして止んだが、三十四年ロバート・オーウェン等の計畫で、「大國民聯合職業組合」を作り、五十萬の組合員を擁して、總同盟罷業を企て產業の管理まで進まうとしたが、一年も繼續せずに解散した。此の以後又再び各職業別の組合に戻り健實なる基礎の上に組合は成長し、一八六八年に「全國組合會議」(Trades Union Congress) を始めて開いた時に十萬の勞働者が代表されたに過ぎなかつたが、一八七三年の第五回の會議には七十萬の組合員を算へるに至つた。

自由主義者は結社せんとする意志に重點を置いて、結社の自由を認めるに至つた。然し若し意志の自由に重きを置くと云ふだけならば、結社せんとする勞働者の意志と同じやうに、結社を禁止せんとする資本家の意志も、結社を喜ばない一部勞働者の意志も亦、計算の中に置かれねばならない筈である。所が結社の意志のみが重きを置かれたのは、單に意志の自由を重んずると云ふ自由主義の原理のみからでは導き出されない。結社せんとするものが多數であるから、最大多數の最大幸福の爲めにかく決定したと云つても、一應の說明は付くが、何故に勞働者に結社の自由を認めることが、彼等多數の幸福となるかと云ふ新しい問題に轉化する。結局勞働者は團結するに非ずんば幸福を圖りえない。何故なれば孤立してゐては弱者たるに過ぎないからと云ふことに歸着する、こ

こでも亦「十時間法案」と同じく勞働者は資本主義下に於て、資本家と平等ではないことが、暗々裡に承認されたのである。マルクスが「國際勞働者協會」に於て、「十時間法」と竝べて英國の勞働組合の活動を重要視した所以はこゝに在る。自由主義は結社の自由を自らの綱領に加へて、その内容を擴張したことはよい、然し結社の自由を承認したことは、經濟的自由主義の根據を薄弱ならしめた。のみならずかくして解放された組合は、個人の爲しえざる職能を果し、國家内の國家と云はれるほどに勢力を增大した。自由主義は個人の自由を尊重すると云ふことから出發して、組合と云ふ巨大な社會を成立せしめた。かくして成立した社會なるものは、自由主義の基礎たる快樂主義的個人主義の說明しえざる領域である。個人主義は自らより出發して、自らの足らざるを意識せしめた。結社の自由は自由主義の體系にいかなる地位を占むべきか、結社や團體はいかに說明さるべきか、之がミルの身邊に現はれた課題であつた。

勞働立法と勞働組合と竝んで、當時の注目すべき事件はチャーチスト運動であつた。ベンサムの社會的狀勢の所で述べたやうに、大革命以前に議會改革の要求が既に擡頭し、之が革命に對する反動に際して一旦屏息したが、再び擡頭して一八三二年の選擧法改正となつた。佛蘭西の大革命は主として第三階級の手になつて、プロレタリアの助力は數ふるに足りなかつた。所が英國では產業革命が夙に進行してゐたから、多數のプロレタリアが存在し、選擧權擴張の運動は、兩階級の共同運動であつた。然るに一八三二年の選擧法改正はブルジョアに選擧權を與へたに止まつて、プロレタリアは肝心の瀨戸際で打去られたのである。此のこと既にプロレタリアの憤激を買ふに充分であつたが、更に政權を握つたブルジョアジーは、マルサス「人口論」の趣旨に基いて、人口の增加を抑止する爲、三十四年「貧民法」(Poor Law)を改正して、貧民救助に嚴格な條件を加へた。こゝに於て勞働者階級は單に政治的自由を拒まれたのみでなく、政治の内容に於て自己に不利なる立法を見せ付けられた。彼等が結束して普通選擧權の實施を要求し、自己の欲する社會的改造を行はうと決意するに至つたのは、當然と云はねばならない。

彼等は「人民の憲章」(People's Charter)を起草し、成年男子の普通選擧權、平等なる選擧區、議會の每年開會、議員の財產資格の撤廢、無記名投票、議員の歲費支給の六項を要求した、之れ彼等がチャーチスト(Chartist)と云はれた所以である。その要求の條項だけから見れば、之れ純然たる政治的自由の運動である。然し普選實施の結果は必然に勞働者が多數を占めて、政權を獲得しうると見込み、社會組織の變革を想望したと云ふ點に於ては、單なる政治機構改革の運動でなくて、社會組織改革の運動である。之れ此の運動に社會主義的色彩が見出され、新時代の運動の萠芽が認められる所以である。チャーチスト運動の意義を過大視する學徒がないではない、例へばマックス・ベヤー(Max Beer)の如きロートシュタイン(Th. Rothstein)の如きそれであつて、こゝに英國に珍らしい共產主義類似の運動を認めんとするのであるが、私は之は自らの希望を投影するもので、運動の影を誇大視するものだと思ふ。然し此の運動が一八三八年から四八年に亙る十年間、英國上下を動かした事は事實で、マルクス、エンゲルスをして階級鬪爭の先驅と感ぜしめたに相違ない。チャーチストは合法派非合法派

と内部が分裂し、四十八年の二月革命の動亂に乘じて、最後の示威運動を試みて、遂に分裂瓦解して了つた。運動自體を解消して、恰も開始した英國資本主義の興隆期に臨んで、勞働立法と組合運動とに方向を轉じたが、勞働者階級が無視すべからざる威力たることは、充分に證明された。又彼等が現存選擧制度を以て滿足しえないことも、選擧權が社會組織の改革の爲に行使されることも、ブルジョアジーは認識すべく餘儀なくされた。「十時間法案」や勞働組合とは別に、資本主義の埒内に於てでなしに、資本主義自體の牙城に迫る運動が、既に後述の空想的社會主義やリカアド派社會主義の單なる思想から逸脱して、現實の大衆運動にまで轉化して來たことは、自由主義の範疇に育つたミルの無關心で濟まされないことであつたに違ひない。

チャーチストの政治的要求は、一旦挫折したものの、選擧法を一八三二年の狀態に停止しえないことは、最早社會一般の公論であつた。たとへ選擧權が都市勞働者に擴張されたのは、一八六八年であり、農村勞働者に擴張されたのは、一八八五年のことで遙かに後年のことではあるが、意識に於て要求に於て普選は既に確認されてゐた、問題は唯誰が何日實施するかと云ふことのみに在つた。さて選擧權が勞働者に擴張されるとしたら、いかなる事態が發生するか、こゝに自由主義者の關心に値する重大問題が湧いて來る。勞働者が政權に參與したら、彼等は經濟的自由主義に反對して、國家權力を擴張して自己に有利な立法を企てるに違ひない、之れ明かに經濟的自由主義の破滅である。否經濟的自由主義のみならず、その他の自由にも侵害の手を延ばさないとは云へない、例へば社會大衆は言論の自由や個性の自由への尊重を解しないとも考へられる。だが彼等に政權を閉鎖すること

は、政治的自由主義に矛盾する。政治的自由主義と經濟的自由主義等との對立が、こゝに於て前景に現はれて來る。自由主義はその内容に於て實質上の自由主義と形式上の自由主義（例へば政治的自由主義）とに分れるが、初期の自由主義に於てこそ、兩者は合致しえたが、やがて兩者は分裂し對立して、何れに優越性を與へるかと云ふ難問に逢着せざるをえなくなる。而して一八五〇年代に於て既に此の問題は姿を現はしたのである。ミルは之を雲煙過眼視することは出來まい。

之を總括して云へば、ベンサムは自由主義を單に思想として構成し主張することで足りた。然しその後の社會的狀態は與へられた儘の自由主義では、片付けえない問題を次々に提出して來たのである。自由主義の根本原理を反省することにより、具體的の問題に適用して片付けうる問題もあらう、だが從來の自由主義では片付けえない問題もありうる。之が爲には自由主義自體を根本的に再檢討し、必要な限りに於てそれを修正し改革せねばならない、そしてそのことは單に自由主義と云ふ社會思想に止まらず、やがてその根本前提たる哲學にまで遡る必要が起るかも知れない。そこまで來ると思想再構成の資料として、いかなる思想が當時に存在したかを展望せねばならない、こゝに於て私は思想界の狀勢に轉じよう。

（三）思想界の狀勢

十九世紀の前半を支配した哲學は、ベンサムによつて代表された自然主義の哲學である。今少し分けて云へば、ロックからヒュームに至る感覺論的認識論と、ベンサムに至つて大成された快樂主義の人間觀と、功利主義の道德哲學と社會哲學とである。ジョン・スチュアート・ミルを育てた雰圍氣も亦之であつた。だが之に對してたとへ少數派であるとは云へ、異る立場の哲學が孤軍を支へてゐないではなかつた、吾々は之を瞥見する必要がある。之等の哲學は或はミルに影響した點に於て或はミルの批判の對象となつた點に於て、ミルの思想中にその姿を見出してゐるから、重複を避ける爲に唯輪廓だけを描くに止めよう。

主として認識論上に自然主義に對立したのは、スコットランド哲學（Scottish Philosophy）である。此の學派の建設者はトーマス・リード（Thomas Reid）である。彼は、アダム・スミスがグラスゴー大學を去るや、その跡を襲つて道德哲學の教授となつた。彼も亦曾てはカントと同じくヒュームにより獨斷の夢を醒まされた一人であつた。彼はヒュームに書いて云ふ「私は形而上學に於て常にあなたの門弟と公言する。……あなたが『人性論』に於て導き出した結論が、私をして疑ひの念を起さしめる迄は、その原理に就ては曾て問題にすることすら思ひ及ばなかつた」と。だがヒュームが感覺論的認識論を說いて懷疑論に歸着するや、こゝに歩を止めて反省した、採るべき路はヒュームと同じく懷疑論に終るか、或はヒュームの立論の出發に遡つて之を再檢討するかである と。かくして彼はカントと等しく後者の路を選んだ。彼は云ふ、本來人間には先天的判斷力が與へられてゐる。その判斷力により人は科學を構成しうる、そして科學はやがて判斷力自體をも對象として、分析し說明することをする。然し始めに分析を試みる時には、明かに主體たる人間の判斷力の存在を前提としてゐたが、やがて分析が精緻となるに伴つて、その前提たる主體の判斷力を忘却するに至つたのであると。吾々には先天的に原理が與へられてゐる。此の原理を彼は「自然知識」「基礎理性」「常識」と稱したが、カントの悟性の範疇に相當するものである。リードがスコットランドに及ぼした影響は巨大であつて、その勢力は佛蘭西に及び、一八一六年から七〇年迄同國の大學の哲學は、スコットランド哲學を題材としたと云ふ。彼は自然主義全盛の時代に孤壘を守り、その哲學はたとへカントの精緻と深遠とに比ぶべくもないが、自然主義に對抗してゐた點に於てカントと共同の戰線に立つ、之れ後にセッス・プリングル・パチソンがその著「蘇國哲學」（A. Seth-Pringle Pattison: Scottish Philosophy, 1885, 3rd ed., 1898.）に於てヒュームに對する解答として、スコットランド哲學とカント哲學とを比較論評した所以である。

リードの影響を受けて同じくスコットランド哲學派に屬するものは、サー・ウィリアム・ハミルトン（Sir William Hamilton）である。彼はリードから受けると共に、一八一七年から二〇年に亙り獨逸に遊び、こゝにカント哲學の影響を受けた。かくて彼はカントの理想主義哲學とスコットランド哲學との連鎖を爲した。彼も亦先天的原理の內在することを主張し、一切の萬象は此の原理に照らして見たる吾等の印象に外ならないと云ひ、又カントと同じく知識の限界を述べて、信仰の世界を確立したのであつた。云ふ、絕對者に就て知ることをえないと云ふことは、吾々にとつて信ずることを否定することにはならない」と。かうして信仰を一段の高處に於て肯定

した、之を神學上に採用したのがマンセルであり、知識の限界を說いた方面を踏襲したのは、後年のスペンサーやハックスレーの「不可知論」(Agnosticism) である。彼が一八三六年から一八五六年の死に至るまで、エヂンバラ大學の教授として及ぼした感化は、、空前にしてその以後にも類例がなかつたと云ふ。彼れの地位がいかに重かつたかは、ミルが直覺說の代表者として彼を選び、之を打破することによつて自然主義は勝利を告げると考へたことに徵しても知ることが出來るであらう。此の外に同派に屬するものとして、アダム・ファーグソン、ヅガルド・スチュアート、トーマス・ブラウン、ウィリアム・ウヰーウェル等があり、殊にウヰーウェル (William Whewell) はケムブリッヂ大學の教授として、「歸納的科學の歷史」(History of the Inductive Sciences, 1837.) 「歸納的科學の哲學」(Philosophy of the Inductive Sciences, 1840.) 等を著はし、カントの先天的原理の上に立つて歸納法を說明したのであるが、ミルは彼から先天的原理の部分だけを除去して、歸納法に就ての說明の暗示を受け、その不朽の傑作「論理學體系」はウヰーウェルの刺戟なかりせば、書かれなかつたらうと云はれてゐる。

スコットランド學派も多少なりともカントの影響を受けてゐたが、本來は英國傳統の直覺說に根據してその埒內を脫しえなかつた。之に反して全的に獨逸理想主義の影響を受けて、正面に自然主義と對立し、遙に後年の理想主義時代を齎らした先驅者がある。先づ指を屈せねばならないのは、サミュール・テーラー・コールリッヂ (Samuel Taylor Coleridge) である。彼れの生涯こそ誠に數奇變轉の生涯であつた。彼は青年時代に自然主義に心醉し、ヒュームとハートレーとは最も傾倒した思想家だといふ。その子をハートレーと名づけ、ハートレーの著書「人間に關する觀察」を枕に藉いて眠つたと傳へられてゐる。その後ゴドウィンの「政治的正義」を讀んで感激し、サウシーと共に米大陸に共產村を建設せんとして、半途にして中止したが、之によつて青年時代の革命的情熱を示してゐる。一七九八年ウァーヅウァースと共に「抒情詩集」を出して、その詩は今も英詩界に第一流の地位を保持してゐる。後獨逸に赴きこゝで理想主義の哲學に觸れ、英國に於ける獨逸理想主義紹介の先鞭を着けたのであつた。彼は悟性 (Understanding) と理性 (Reason) とを區別すべしと云ひ、悟性とは自然界を見る力にして、理性とは精神の世界を見る力である、十八世紀思想の誤りは、人間に悟性の力のみを認めて、理性の力を認めず、自然界にのみ適用すべき悟性を以て精神界をも見ようとしたことに在るといふ。彼は社會哲學の方面にも貢獻する所が多かつた。ベンサム等によつて破壞と改革とを叫ばれて來た當時の社會制度の中には、確かに破壞と改革の必要があつた。だが咎めらるべきは國家自體でもなければ教會自體でもない、唯十八世紀の國家と教會とである。その時の偶然の缺陷とその制度の本質とを區別して、新しき眼を以て從來の社會制度を見返さしめたのは彼であつた。ベンサムは當時の社會制度がいかに眞理に背反するかを示した、コールリッヂは當時の社會制度の中にいかに眞理が籠れるかを明かにした。此のことから一面に於て保守主義に墮する嫌ひはある、だが自由主義が一應便命を完了した後に於て、國家や教會が再び權威を回復する進路を開いたことは爭へない。今にして彼れの著書を繙けば、唯斷片的にして無系統である。彼れその人は阿片喫煙者であり負債借倒しの名人であり、云はば一種の性格破綻者であつた。而も彼れの周圍に及ぼした人格的感化は素晴らしかつた。カーライ

ル、ラスキン、フレデリック・モーリス、ヘンリー・ニューマン、ジョン・スターリングの如きは、何れも彼れの影響を豪つた人々で、彼を措いて英國の理想主義を語ることは出來ない。之れジョン・ミアヘッドが英國理想主義史を編まうとて、先づ「コールリッヂ・詩人哲學者」(J. H. Muirhead: Coleridge as Philosopher, 1930.)を書いた所以であらう。

カーライルも亦コールリッヂと同じやうに、始めは自然主義の中に育てられた、だが神を認めず人間を生命なき機械と見る思想は、彼れの滿足する能はざる所で、懊惱煩悶すること久しく、ある時は絶對不眠の三週間を送つたこともあつた。遂に自我は嚴然たる權威を以て、自然主義の機械觀に「永遠の否定」を宣告した。だが之は彼れの云はば本能の聲が然らしめたのであつて、之に哲學的の基礎付けを與へたのが、獨逸理想主義の哲學であつた。之によつて彼は機械觀の限界を明かにし、靈界の權威を確保することが出來た、之が「永遠の肯定」であつて、彼れの自傳的作物「サーター・レザータス」(Sartor Resartus, 1833.)は、此の間の消息を語つてゐる。彼は「原因結果哲學」(Cause-and-effect-philosophy)で此の世界は解釋することは出來ないと云ひ、理窟に代ふるに想像(イマジネーション)の力を以てせよと云ひ、平凡の眼底に映じては此の世は混沌たる假現の世界である、然しより深き意味を眺める者にとつては、此の世は啓示の世界靈的原理の表象であると說いた。又快樂主義の人間觀が、人間を快苦計算器(Pleasure-and-pain-measuring machine)と見たことを攻擊し、功利主義が富そのものを以て價値あるものとすることを排斥して、富はそれ自體として尊いのではなしに、靈魂の成長の爲に必要なるが故に尊いのであり、物質的欲望に優越する神靈の威嚴を說いた。彼れの思想も亦組織的體系的とは云ひ難い、だがヴィクトリトア朝の中頃に於て、豫言者の如き風丰と文章とを以て、理想主義を說いた時に、コールリッヂの蒼白き人格を以てしては及ばない力强い衝擊を當代の人々に與へることが出來た。思想家の中には炬火を投じて暗夜を照らす種類のものと、丹念に精緻に體系を整備する種類のものとがある。理想主義の來るや、先づ必要とされるのは前者の思想家であつた、カーライルが正に之に當る。だがそれだけでは暗示の閃光を投じたに止まつて持續の力に乏しい、やがてその次に後者の思想家を必要とする、トーマス・ヒル・グリーンがそれであつた。若しグリーン先づ現はれたなら、人はその難解と複雜との爲に近づきえなかつたらう。カーライルの使命は理想主義の爲に進路を開拓した所に在る。彼に次でジョン・ラスキンの名が擧げられねばならないが、稍後代に屬するから、ここには省くこととしよう。要するにミルの前に理想主義の哲學が與へられた、彼は之に肯定か否定かの態度を決せねばならなかつた。

哲學から去つて社會思想に轉じると、一八三〇年代から約五十年間は、自由主義の全盛時代であつた。自由主義が始めて體系を整へたのは、十八世紀の末であるが、十九世紀の始めには大革命に對する反動として保守主義が起つたが、それと共に自由主義に對して既に社會主義が擡頭した。此の潮流が一旦退却して後、始めて自由主義の全盛期に入つたのだが、十九世紀初頭に姿を現はした社會主義に就て、一應視點を投じて置く必要がある。こゝに云ふ社會主義者とは、英國のロバート・オーウェン、佛蘭西のサン・シモン、シャール・フーリエ、ル

キ・ブラン等を指すのであるが、彼等は哲學に於ては何れも自然法の上に立つてゐた、從つて自然法の哲學が自然主義に一脚を置く限りに於て、自由主義者と地盤を共通にしてゐる。その故にオーウェンが「社會に關する新見解」(New View of Society, 1813—1814.) の中で、人間の性格に及ぼす環境の勢力の重大性を說いたのは、正に自由主義者たるジェームス・ミルとその子とが等しく持した考へであつた。だが自由主義が私有財產制度を神聖不可侵のものとしたのに對して、社會主義は資本主義の弊害を認識し、その原因が私有財產制度にあることを突き止めて、その制度の撤廢にまで往つた。こゝで自由主義と社會主義とは對立する。當時の社會主義はその思想構成の方法に於て、又實現を支配階級の手に求めたことに於て、マルクス、エンゲルスから空想的社會主義と名づけられ、彼等の科學的社會主義の前に光彩を失つたのであるが、資本主義への批判に眼を開かしめた功績は、彼等に歸せねばならない。空想的社會主義の外に、功利主義の社會哲學の上に立ち、リカアドの勞働價値論を援用して、資本主義の分析と批判とを企て、同じく社會主義の歸結に到達した一群の社會主義者があつた、所謂リカアド派社會主義者であるが、彼等はその哲學に於てその經濟學說に於て、自由主義と共同であり、その結論に於ては之と對立した。空想的社會主義とリカアド派社會主義とは、啻に思想としてのみでなく、チャーチストの運動の原動力として彼等の社會組織改革に影響した。ミルはチャーチスト運動に沒交涉でありえなかつたならば、當然に之等の社會主義を關心の對象とせざるをえなかつた。唯ミルは空想的社會主義に就ては、その「經濟原論」の中で多大の頁を費してゐるに拘はらず、リカアド派社會主義に就ては一言だも觸れてゐない。ミルを以て經濟學の權威と目した英國の學界は、之が爲にリカアド派社會主義の存在を忘却し、墺太利のアントン・メンガー(Anton Menger)、獨逸のマックス・ベーア　英國のフォックスウェル (H. S. Foxwell) が、彼等を地下より發掘するまでは、約半世紀以上彼等の存在は無視されて來たのであつた。

だがミルの關心を喚起したのは、社會主義者の私有財產制度批判のみではなかつた。別にサン・シモンの發展的見方が擧げられねばならない。元來自由主義者に共通であつたのは、物を靜止に於て不變に於て見る見方であつた、後年エンゲルスが稱した形而上的見方が之である。物を變化に發展に流動に於て見ることは、彼等に缺如してゐたのである。それなればこそ彼等は漫然として資本主義を古往今來永遠不易の組織として觀察したのである。發展的見方は獨逸理想主義者殊にヘーゲルの中に現はれ、後ダーウィンの進化論に現はれたが、全く獨立にサン・シモンの中に現はれた、之こそ自由主義者にとつて新奇の學說であつたに相違ない、同時に此の學說に接した時に、今まで知らざりし世界が前面に展開したであらう。此のことに就ては後に觸れよう。此の學說を提示したのはサン・シモンのみではない、その門弟アウグスト・コントも亦その一人であつた。コントのことは本來は哲學の部に述ぶべきであつたが、サン・シモンとの聯關の故に、社會思想の部に殘したのである。コントの「神學時代」「形而上學時代」「實證時代」の分類は、事物の發展的見方を敎へ、現在を永遠流轉の一節として觀ずることを示した。のみならずコントの實證主義は現代の用語を以てすれば、一種の科學方法論であつて、恰も自然主義の方法論に潛念してゐたミルにとつて、前揭のウィーウェルと共に多大の示唆を與へたので、その痕跡

を「論理學體系」に見出すことが出來る。だがコントの與へたのは之だけではない、彼によつて社會は發見された、今まで個人のみを眺めて個人に優越する社會の存在を氣付かなかつたミル等にとつて、之は思ひもかけない啓示であつた。ミルのみならず、コングリーブ、フレデリック・ハリソン、ビースレー、ルウォース、ブリッチス等の英國實證主義派（English Positivists）の一團を生じて、獨逸理想主義と竝んで自由主義の快樂主義的個人主義に側面的攻撃を加へ、次の社會主義時代を招來するに貢獻したのであつた。

哲學に於てスコットランド哲學、獨逸理想主義、社會思想に於て空想的社會主義とリカアド派社會主義、別にサン・シモン、コントより來る發展的見方と社會學說、之等は十九世紀の前半から中葉にかけて、自然主義と自由主義に對立して異彩を放つてゐた。それがいかにミルに影響したかを見る前に、暫らくミルの興味ある生立を語ることとしよう。

（四）生　立

（1）

ミルに就て多くの傳記が書かれてゐるが、彼自身「自叙傳」（Autobiography）を書いて、一八七三年その死後に出版された。此の自叙傳は必ずしも吾々が書いて欲しかつたと思ふやうな自叙傳ではない、自己の內面生活をより深刻に描寫したらと思ふ物足りなさはある、然しそれでもミル自身の思想の變化は此の中に物語られ、吾々はそこから單に一人の思想家の生立のみならず、十九世紀英國の思想史を瞥見することが出來るのである。私は自叙傳からの資料を中心として之に他人の傳記から得たものを併せて、此の人の興味ある生立を語ることとしよう。

ミルは一八〇六年五月廿日倫敦で生れた。父はジェームス・ミルである。父ミルはベンサムを知つてから、先生の爲に秘書的役割を務め、ベンサム主義普及の爲には最大の功勞者であつたが、一個の學徒としても看過されてはならない。經濟學者、政治學者又は哲學者としては二流三流にしか當るまいけれども、心理學者としては「精神現象の分析」（Analysis of the Phenomena of the Human Mind, 1829.）の著者として、今でも一流の地位を與へられてよい人であつた。此の家庭にはマルサスやリカアドやマッカロック等の人々が親しく出入し、ミル父子は先生たるベンサムの邸宅に頻繁に往來してゐた。ジョン・スチュアート・ミルは生れ落ちてから直ぐと、かうした自然主義と自由主義との雰圍氣の中に育てられたのであつた。

父ミルは若い時自己の運命を試さんが爲に、鄕關スコットランドを後に倫敦へ出た、そこで貧困の中から拮据黽勉、遂に社會的地歩を築きあげた人だけに、意志の强い努力奮鬪的の人物であつた。ミルは「自叙傳」の中で「プルータスが羅馬人の最後と呼ばれた如くに、吾が父は十八世紀の最後の人であつた」と語つてゐるが、こゝに云ふ十八世紀と云ふのは、理知の萬能を信じて情操を無視する傾向を意味するのであらう。彼は確かに、詩は

迷信である、感情は賤しいものだ、宗教は家庭の中に絶對に入れないと云ふ人であつた。ミルの母親に就ては「自叙傳」は一言も觸れてゐないから吾々は母に關しては何ものも知る所がない。要するに家庭の中では母親は無視さるべき地位に在り、父が絶對の勢力を揮つたのであらう。かうした父を持つことは頼もしいことではあらうが、嬉しい事ではなかつたに違ひない。威壓的な父の膝下に育てられたミルは、藝術に對する憧れや人に對する情操を殺して來た。ある程度まで此の家庭の空氣がミルを作つたが、ミルは終生此の空氣に甘んじうる人ではなかつた、それが叛逆して後年の思想の變化となり、又テーラー夫人との戀愛となつたのだと思ふ。

父はエルヴェシアスの言を信じて、人間の優劣の差は一に教育の如何に係ると考へてゐた。そこで吾が子に理想的教育を施さうと思つて、教育史上に有名な早教育を始めた。三歳で希臘語が教へられ、八歳で羅典語が教へられ、同時に數學が課程に入つた。十二歳にして論理學を教へられたが、之はミルが永く感謝してゐることで、物を正確に考へることの習癖が與へられたと云ふ。十三歳の時リカアドの「經濟原論」がテキストとなつて、經濟學の勉強に入つた。此の原論はつい三年前に出版されたのだが、父は之を平易に口授してミルがそれを筆記して編纂したのが、一八二一年の「經濟學要綱」(Elements of Political Economy) である。父は經濟學を教へて置いて、散歩の時には途中でそれに就て質問したり討論したりするので、ミルにとつて此の散歩はよほど苦しいものであつたらしい。リカアドが濟んでからアダム・スミスの「國富論」に移り、リカアドの立場に於てスミスを批判させることにした。

十四歳の時に父の監督の下に於ける勉學は一段落を終へて、佛蘭西にゐるベンサムの弟の所へ往つて約一年滯在してゐた。此の旅行は色々のものをミルに與へたやうである。峻嚴な父親から去つて異國ののびのびした生活、而も優しい社交的な佛國の空氣に浸つたことは、ミルにとつて救はれたやうな氣持を與へたらう。又之から彼は佛語を巧みにこなして、佛文を自由に書き佛國の文獻に親しむやうになつた。彼が後年サン・シモンやコントの影響を受けるやうになつたのは、その遠因は此の旅行にあると云へる。若し彼が獨逸に旅行したとしたら、異る示唆を當時の獨逸の思想界から受けたに違ひない。人間の行徑は偶然の事から案外大きな變化を起すものであるが、ミルの此の旅行の如きも亦その一例である。一八二一年七月歸國して、ジョン・オースチンと羅馬法の研究をしてゐた時に、父は之を讀めと云つてミルの手に一冊の本を渡した、それがベンサムの「道德及び立法原理の序論」であつた。元來ミルは搖籃の時から、父を通じ又直接ベンサムに觸れて既にベンサム主義者であつた。然し之は先輩の口から傳へられた主義たるに止まり、その限りに於て一片の傳統であり因襲に過ぎない。若しミルにして成長するならば、かゝる傳統に對して叛逆するか、或は無意識の傳統を化して意識的自覺的のものたらしめねばならない。而してベンサムの代表作を熟讀した時に、人の當然經過すべき此の段階に到達した。それでは彼は此の本から何を把握したのであらうか。

第一に彼を魅惑したのは、ベンサムが思想を構成した方法に在つた。社會現象を自然現象と同じやうに、因果關係を追窮しようとする自然科學的方法に在つた。彼は自ら「自叙傳」の中で云ふ。(本文の「自叙傳」からの引用

は大體今泉石田兩氏譯「ミル自叙傳」の譯文によつた。同書の譯は此の外に岩波文庫にある。）

かやうに私に深甚の印象を與へたのは、ベンサムが「自然の法則」「正しき道理」「道德心」「自然の正義」等の文言から演繹し來れる世間一般の道德及び立法に於ける推論法を批判し、此等は假面を被つた獨斷說で、堂々たる偉さうな言辭の蔭に隱れて、自己の感情を他人に押付けんとするもの、其の堂々たる言辭も實は其の感情に就て何等の理由をも擧げず、却つて其の感情を自己の理由とするのであると說破した章であつた。私は曩にはベンサムの原理が凡て此等の俗說をして存在の理由なからしめたとは氣が付かなかつたのである。是に於てベンサム以前のあらゆる道德說は仆れた、事實玆に思想上の新時代が初まつたのだと云ふ感じが勃然として起つた。……懲罰に付し得る諸の行爲と云ふ大きい複雜な問題に、行爲の結果の快樂苦痛と云ふ倫理學上の原理を指針として、科學的分類法が適用され、ベンサムが此等の問題に關して始めて用ゐた精細な方法で、徹底的に論及しあるのを看た時私は高所に連れ行かれ、其處から宏大な精神界の領域を通觀し、莫大なる智的成果が遠く天涯に延び連るのを見る事が出來た如くに感じた。

第二はかゝる方法を適用して到達したベンサムの結論が、彼を一溜りもなく魅惑した。彼は更に云ふ。

尙ほ讀み進んで行くに從ひ、此の智的明快に加へて人事の實際的改善の前途が眼前に開けて、私の熱心を喚起した。……彼は人間の意見及び制度法規が如何なるものであるべきか、如何にすれば其をして其の當にあるべき狀態になす事が出來るか、又現在それが如何に甚しく理想と懸隔してゐるかと云ふ事に就て、此の書の頁毎に一層晶明宏豁なる見地を開拓するが如くに見えた。私は此の書の最後の卷を讀み終つた時、別人となつた。ベンサムが理解し、さうして此の三卷を通じて適用した通りの「功利の原則」は、私の知識信仰の離れ離れで、斷片的な組成分を結合せしむる要石として適確に當嵌まつた。それは私の事物の考へ方に統一を與へた。私は今や獨自の意見を持つた。一の信條、一の教義、一の哲學を有つた。宗教と云ふ言葉の最善なる意味の一つに於て、一の宗教を有つた。

之を要するに彼は年齡十五にして、自然主義の哲學に感激し、それから來る方法論と、それから出る功利主義の道德哲學、社會哲學とを獲得した。今までもベンサム主義者であつた彼は、今やベンサム主義を無意識より意識に、潛在より顯在にまで化したのであつた。年少にして社會批判の基準を與へられ、學問研究の方法を體得す、此の少年の得意歡喜正に察すべきである。かくしてベンサムからロックへ、エルヴェシアスからハートレーへと、更にバークレー、ヒューム等に至るまで、思ふ存分に自然主義の哲學に潛念した。

一八二三年彼は同志と共に「功利主義者協會（ユーティリタリアンソサイエティー）」なるものを作り、隔週一回討論をすることとした。之は彼をして年長の友人と交はる機會を與へたと共に、獨りゐる時に曖昧になり勝ちな思想を正確に把握することに與かつたと云ふことである。翌年彼が十八の時、ベンサム一派が機關誌「ウェストミンスター・レヴュー」を刊行するや、その寄稿者の一人として、既に主義の爲に宣傳に從事するに至つた。だがかうした仕事は、彼れの職業ではなかつた。彼は一八二三年から生活の資料を得る爲に、職を東印度商會に奉じ、その餘暇を以て勉强し寄稿し著述してゐたのであつた。由來英國の思想家で大學の教授たるものは尠い、ベーコン、ホッブス、ロック、バークレー、ヒューム、コールリッヂ、カーライル等、何れも民間學者であつた。ミルも商會の書記を續けること一八五八年に至る三十五年間に及び、その餘暇に「論理學體系」も「經濟原論」も書いたのであつた。話は後年のことであるが、五八年東印度商會の印度に於ける權限が政府に移されて、印度事務院が創設されるや、ミルはその要職に就くことを懇望されたが、その時限り彼は退職して、その以後かなり巨額の年金を貰ひ、晩年それを以て

不足なく、專心才筆に親しむことが出來た。彼自身の云ふ所によると、東印度商會の生活は、彼をして通常一般の民衆が何を考へてゐるか、いかなる表現の方法が最も理解し易からしめるかを教へた。又他方では大事を成さんとするものは、小事に囚はれて爭ふことのないことが必要だと云ふことを悟らしめたと云ふことである。英國思想家が大學の象牙の塔に籠らずに、俗間の繁忙な巷に働くことが、一方では獨逸思想家に見るが如き深遠さと論理の鋭さとを缺かせてゐるが、又他方では理論人と實踐人とが一人格に調和し、思想の內容と表現の方法との何れもが、民衆に親しまれると云ふ好果を齎らしてゐる。英國思想を研究するものが、此の點を評價しないならば、英國思想の妙味を捉へることは出來ない。要するにミルの生涯の第一期は、ベンサム主義を體得し、それを脇目を振らずに信奉してゐた時代であつた。若し之のみを以て生涯を貫徹してゐたなら、彼は單なるベンサム主義者として、同志の中の一人たるに終つたであらう、だがやがて年少の時受入れたベンサムを再檢討する時が來た、此の經驗を持つたことによつて、ミルは特異な思想家として後代に名を殘すことが出來たのである。

（2）

ミルの第二期は憂愁の時代を以て始まる。彼が「自叙傳」第五章に「私の內的歷史に於ける危機」と題して述べる所をみよう。

千八百二十一年の冬、私が始めてベンサムを讀んだ時以來、私は眞に人生の目的とでも言ひ得られるものを有つた。世界の改革者たると云ふのが私の目的であつた。私自身の幸福に關する私の概念は全然此の目的と一致して居つた。……數年の間はそれで可かつた。何となれば其間世の中に行はれつゝある一般の改善と、私自身も他の人々と共に其の改善を促進する事に努力しつゝあるのだと云ふ意識が、興味ある潑剌たる存在を充すに足るが如くに見えたからである。然るに夢から覺めた樣に、此の幻覺から目覺める時が、遂にやつて來た。それは千八百二十六年の夏であつた。私は誰でも時折陷りがちな例の憂鬱よりした神經狀態に陷り、すべて享樂や愉快な感激を味ふことが不可能になつた。……こゝに於て、私の勇氣は俄に崩れた。私の生涯が其の上に建設された全基礎がが〻〻と崩れた。私の幸福は悉く此の目的の不斷の追求に見出さるべきであつた。目的が既に魅力を失つたのに、どうして手段にまたと興味が湧かうや。私は最早生きる爲の何物をも有たぬらしく見えた。……私は獨り呟いた、私はかうして私の航海の初に於て淺瀨に乘り上げたまゝ棄て置かれたのである。艤裝に申分なく舵もあるが、帆が一つも無いのであると。

此の憂愁は約一年間繼續するのであるが、憂愁の性質に就ては、由來ミル研究者の間に色々の異論がある。あるものは云ふ、丁度此の直前にミルはベンサムの仕事を助けて過度の努力をしつづけた、その精神的疲勞が神經衰弱を起したのであると。之は憂愁を生理的に解釋するのであるが、私は此の憂愁の由來は今少し深い所にあり、ベンサム主義なる思想が、當然に逢着せねばならぬ理論的弱點に氣付いた所にあると思ふ。ミルの內面生活の興味は此の一點に懸つてゐる。元來ベンサム主義では云ふ、人はすべて利己的である、之は如何ともすべからざる必然を以て決定されてゐるのであると、之がベンサムの快樂主義の人間觀である。又云ふ、最大多數の最大幸福が個人にとつて善であり、吾々が爲さねばならぬ窮極目標であると、之がベンサムの功利主義の道德哲學である。

ミルがベンサム主義者であると云ふ時に、彼は以上の人間觀と道德哲學とを併せて信奉してゐたのである。今まで只管ベンサム主義に心醉し、その普及の爲に宣傳して來たが、彼は今や停止して數個の疑問の前に立たねばならなくなつた。第一に若し人間が必然に利己的たるべく決定されてゐるならば、いかにして最大多數の最大幸福を圖りうるのであるか。善を爲すことが當然にその人に利益を齎すのでない以上、そして此の事は決して事實に該當しない以上、利己的たるべく必然に決定されてゐるものは、最大多數の爲に最大幸福を圖りえない筈である。若し又最大多數の最大幸福を圖ることが、當然に當事者に利益を持ち來すものならば、人は唯利己的たることを以て足るのであつて、敢て功利主義の道德哲學を說く必要はないのである。實にベンサムの快樂主義と功利主義との接續に無理があり、そこに理論的缺陷が潛在してゐたのである。ミルは此の事に氣付いたのではないか。第二にベンサムの云ふが如く、人は必然に利己的なのであらうか。ミル自身は自己を反省してみて、彼は最大多數の最大幸福を實現するやうに社會を改革することを以て、自己の最大の喜悅としてゐた。敢て自己に媚び諛らふことなしに、此の際ミルは決して利己的心情に支配されてはゐないのである。然るにベンサムは凡ゆる人が凡ゆる時に利己的なりと云ふ、之は彼自身の反省に徵してみて、事實に適合しない、ベンサムの快樂主義の人間觀は疑念を挿む餘地がないと云へようか。之が彼に浮んで來たのであらう。第三に、それでも人は決して利己的でないとは云へない。凡ゆる場合に利己的だと斷定することは誤謬だと共に、いかなる場合にも利己的でないと斷定することも出來ない。凡そ社會改革に從事するものは、その人が天性の御人好しでない限り、又は無反省の

瞞着者でない限り、必ずや自己の內に潛む利己心と社會改革との矛盾に出會するだらう。利己の爲に社會改革を斷念するか社會改革を續けるならば內なる利己心と鬪はねばならないだらう。ミルも亦社會改革に精進した一定の時期が濟んで、靜かに自己を諦視する時に、此の矛盾に氣が付いた。それでは改革者たるが爲に、心の中の利己心と爭鬪することが意味あることかと考へると、ベンサム主義に於て最高の價値あるものとは、最大多數の最大幸福であつて、最大多數の一部たる個人個人が最大の幸福を實現することである。所が心の中に於て利己心と抗爭し角逐することは、決してベンサムの云ふ幸福（快樂の意味）と云ふ概念には該當しない、正に不快な事に違ひないのである。さすれば此の內面的鬪爭はベンサムによれば、各人にとつて不必要でもあり又不道德の事にもなる。それにも拘はらずベンサムの云ふ最大多數の最大幸福を實現する爲には、人は此の不快な內面的爭鬪を經過せねばならない。之が矛盾でなくて何であらう。若し此の內面的爭鬪を是認するならば、それは內的鬪爭自體に價値を置く所の別個の道德哲學を借りなければならない、人格成長を善なりとする理想主義では、此の鬪爭を價値付けることが出來る、然しベンサムの功利主義ではそれは出來ない。かくて功利主義に忠なる限り、人は改革者でなければならない、と同時に又人は改革者たるべく自己を鞭撻することが出來ないと云ふ結論に到達し、功利主義の道德哲學は自己破滅に陷ると云ふ悲劇に終るのである、之にミルが氣付いたのではないか。若し私の解釋にして正しいならば、ミルはベンサム主義の正に氣付くべき缺點に氣付き、進退兩難のヂレンマに陷つたのである。若しミルほどの論理的の人でなかつたら、容易にベンサム主義を以て一貫しえたであらう、然し彼はある

理論を往くべき論理的歸結にまで追窮する能力を持つてゐた、かくして此の窮境に立つたのである。此の事は寧ろ彼にとつての誇りである、だが然し今まで信條として教義として疑ふことなかりしベンサム主義は、不動の權威を失ひかけた、彼が憂愁に沈んだのも當然の事だと云はねばならない。ミルが「內的歷史に於ける危機」に遭遇したのは、廿歲から廿一歲にかけての時期であつた。此の時期に人は屢々自己自身に立ち返つて、今まで自己を支配し來れる思想を再檢討し再批判する。多くの人にとつて從來の思想は暗々裡に無意識の裡に、唯傳統として因襲として受け容れられたに過ぎない。若し思想なるものが全人格を支配するものであるならば、かゝる思想は凡そ思想の名に値しないものである。大多數の人は傳統と因襲とをその儘に持續して墓場に至るのであるが、唯少數の者のみが、立ち止まつて從來の思想を客觀的の存在として、之を考察の對象とする。此の時自己なるものが分化して、從來の自己と異る自己が特出され、從來の自己を客觀視するのである。自己の中に自己が分化し、自己が自己を批判する、之を人は自覺と云ふ。かくして後始めて思想は傳統でなく因襲でなく、彼自身の人格的所有となる。ミルは早熟であつた、從つて彼はある意味に於て、一八二一年十五歲にして自覺の道程に入つて、ベンサム主義を受け容れたのであつた、然しベンサム主義は搖籃の時から彼を支配した思想であつた、從つて第一の自覺は唯從來のベンサム主義を確め强める作用をするに止まつた。今一度彼に自覺の來る必要があつた。一八二六年ミルは始めて來るべき自己覺醒にまで到達したのである。こゝにミルの「內的危機」が凡そ思想するものにとつての普遍的興味がある。更にミルによつて反省され批判されたのは、ベンサムの自然主義の哲學であつた。そして此の自然主義は遂にミルを滿足させえない弱性を暴露した。然し之は單にベンサムの自然主義のみの問題ではない、凡そ自然主義たる限り、それがベンサムのであらうとマルクスのであらうとも、同じ運命に逢着せざるをえないのである。自然主義の信奉者が自然主義の懷疑に到達したこと、こゝにミルの「內的危機」の第二の思想史的興味が存在する。

ミルの憂愁はやがてマルモンテルの追憶記を讀むに及んで漸次消散したのであるが、憂愁の一年は彼れの後來の生活に對して、色々の意味で重大の影響を與へた。先づ第一に彼れの興味と關心の對象が變化したことである。なるほど社會の改革は依然として彼れの關心事ではあつた。然し之にも劣らず、彼は內面的生活を豐富にすることに、關心が向けられた。此の以後彼は詩に對して愛好を感じ、ウァーヅウァースの詩を讀んで旱天に喜雨を迎へたやうな感じがしたと云ひ、音樂に對して魅力を感じ、又ゲーテの「多方面性」が彼れの憧憬の的となつた、父ミルの峻嚴なそして狹隘な家庭に育てられた彼は、別人の如くになつた。彼は之等のことを「自叙傳」の中で、次の如くに總括して云つてゐる。

> 私の意見が此の頃受けた今一つの重要な變化は、人生の福祉の最高要件の一として、私が始めて個人の內的修養(internal culture)に對して其の當然の地位を認めたと云ふことであつた。私は外圍の境遇を整理する事及び思索行爲の爲めに人類を訓練する事ばかりに、殆ど唯一の重みを置く事を止めた。……感情の陶冶と云ふ事が、私の倫理哲學上の信仰の最も基本的な點の一となつた。そして私の思想と趣味とは日に益々此の目的に役立ち得ると思はるゝすべての事に向つた。

第二に然しより重要なことは、彼がベンサム主義に不滿を感じて、その不足を補ふ爲に、廣く異る思想の世界を展望して、そこから豐かに受け容れようとしたことである。こゝで吾々は前項で述べた當時の思想界を回顧してみる必要がある。そこには獨逸理想主義の流れを酌むコールリッヂがあつた。ミルの所謂「獨逸コールリッヂ學說」(Germano-Coleridgian Doctrines) は、ベンサム主義と正面に對立してゐるので、彼は此の中から人間に內在する普遍我に就て、物に對する發展的見方に就て、更に又今まで破壞改革をのみ叫んで來た社會制度の中に、いかに眞理が潛めるかを敎へられた。又別に「蘇國哲學者」の一群がある、之も亦ベンサム主義と對立し、彼等のヒュームに對する批判は、ミルに自然主義の再檢討の必要を暗示し、人間には本來道德心なるものがあつて、利己心とは別個に發達したものだと云ふ彼等の人間觀も亦、ミルを動かしたに違ひない。更に又海峽の彼方に、サン・シモン、フーリエー、コント等の一群がゐた。之等の人々の著作に觸れて、自由主義に對する彼等の批判は、ミルに對して反省の契機となり、私有財產制度は人の世の有る限り永續するものと思つてゐた彼に對して、少くとも一度は懷疑の眼を此の制度に向けることを示した。殊にサン・シモンとコントの中に在る歷史の見方、コントの實證哲學、コントの社會の發見、人間の中に在る社會心の發見等は、ミルの後年の思想に一々その痕跡を認めることが出來る。彼に憂愁の時なかりせば、彼はベンサム主義の洞窟の中に一生を送つたであらう、之あることによつて、英獨佛の國際的思潮は彼に集中して、その思想を豐富にすることが出來たのである。

一八三〇年ミルはテーラー夫人と知り合ひ、爾來二十年の交際の後、彼等は結婚するに至るのであるが、此の戀愛は波瀾少き彼れの生涯に、光彩を與へたローマンスであつた。彼と彼女とは幼少の時に垣一重を隔てた隣同士であつた。それから二十數年を經て再會した時は、彼女はテーラー氏の夫人であつた。此の婦人の才能に就ては後に語ることとして、彼等の戀愛が發展するや、夫人は夫君に離緣して自己を解放して呉れるやうにと願つた。テーラー氏は夫人を滿足させるほどの能力ある人ではなかつたけれども、相當の敎養ある紳士であつた。そして夫妻の間には子供があつた。テーラー氏は夫妻の關係を一切淸算することには反對であつた、せめて名義上だけでも妻として永久に留めて置きたい、その代りに實質上には、自由の身と同樣に行動しても宜しいと云ふ讓步をした。それから後テーラー氏は、子供を相手に每夜寂しい晩餐を共にして、妻なき家庭を守つて來たさうである。その娘の一人がヘレン・テーラーと云ひ、後にミルの繼子としてミルの遺稿を整理したり、八〇年代の社會主義運動の復活に際して、ウィリアム・モリス等と共に活躍した才媛となつた。三六年ミルは病後の靜養の爲にテーラー夫人と共に大陸を旅行したりして、その行動が餘りに傍若無人だと云ふので親戚知人の非難を招くに至り、此の時から彼は全く社交から隱退して靜に讀書と執筆とに日を送るやうになつた。傳記者の云ふ所によれば、ミルと云ふ人は恐ろしく性的慾望の少かつた人ださうで、此の大陸旅行中もテーラー夫人とは決して肉體的に非議すべき關係はなかつたさうである。テーラー氏は寂しい晩年を送つて遂に死んだ。そして彼等は一八五一年結婚する段取に入つた。此の戀愛のミルに及ぼした影響に就ては、後に述べることとしよう。

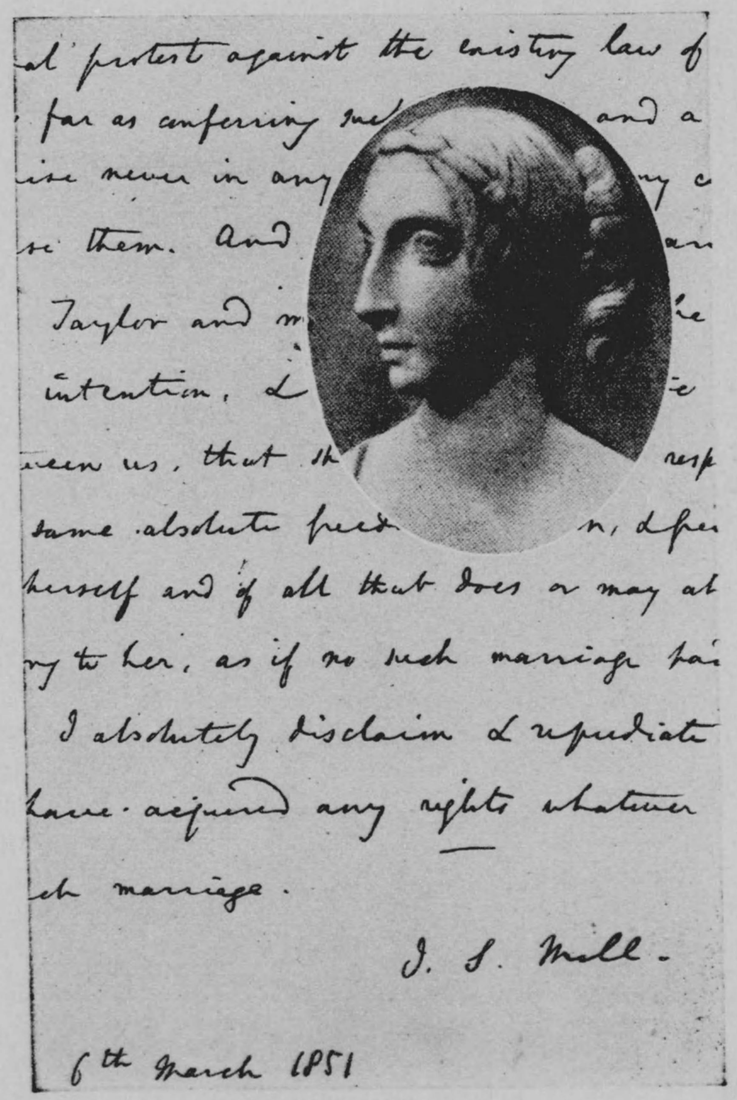
ミルの第二期は憂愁の時期を以て始まり、ベンサム主義への懷疑と、異る思想を豐かに受容することを以て終

始したが、然しさらばとて彼がベンサム主義を全く拋棄したと思ふならば、それは非常な誤謬である。彼は結局ベンサム主義者であつた、唯此の時期以後それの修正と補綴とが、彼れの著作の上に現はれて來たことは看過出來ない。此の時期を代表する著述は一八四三年の「論理學體系」(System of Logic) と一八四八年の「經濟原論」(Principles of Political Economy) とである。「論理學體系」は着手以來、十年以上の時を要した力作で、之にウヰーウェルとコントとが暗示を與へたことは前項で述べた。此の書は單なる形式論理の本ではない、その內容は自然主義の認識論であり、歸納法の上に立つ科學方法論である。アリストートルの論理學が演繹法の代表作とすれば、ミルの論理學は歸納法の代表作である。恐らくミルの著作の中で、最も後に殘るべきものは「論理學體系」であらう。之によつて彼れの哲學の根本立場は明かにされた、その後の作物はそれを夫々の問題に適用したに過ぎないと云へる、恰もマルクス、エンゲルスの「ドイッチェー・イデオロギー」に相當するものである。「經濟原論」は一八四五年から起草して、一八四七年卽ち二月革命の前夜に印刷に附された。正にマルクス、エンゲルスの「共產黨宣言」と似てゐる。スミスの「國富論」の出たのは一七七六年で、之を發展せしめ之を批判したリカアドの「經濟原論」の出たのは一八一七年であつた。それ以來三十一年の時は經過した。色々の社會的狀勢の變化は、再び正統派經濟學者によつて經濟原論が書かれることを必要とした、そしてその著者はあちゆる點からみて、ミルを措いてその人がないとは衆人の一致する意見であつた。此の輿望を負つて彼れの「原論」は現はれたのである。此の書一度市場に出るや、經濟學は之を以て集大成され、その後に發展の餘地なしとさへ考へられ、その中の斷案は權威の響きを持つてゐた。前項に述べたやうにリカアド派社會主義者の一群が半世紀學界から無視された原因は、一にミルの「原論」の中で言及されてゐないからであつた。今に至るまで英國の內外で教科書として使用されてゐる。經濟學の如き變化の多き學問の教科書が、九十年以前の刊行であることは稀有と云はねばならない。

「論理學體系」は自然主義哲學の本ではあるが、その中にさへ第二期の變化は窺はれるが、「經濟原論」に至つては更にその跡は顯著である。此の書は副題として「社會哲學に對し若干の適用を試みて」(with some of their Applications to Social Philosophy) と云ふ句を揭げてゐるが、此の表題既に經濟學に對する取扱の、從來と異ることを示してゐる。彼は之に就て「自叙傳」の中で次の如くに云ふ。

……此の書は單に抽象的科學の書でなくして、應用の書であり、經濟學を孤立の學問として取扱はずに、一の大きな全體の一斷片として取扱つたからである。卽ち經濟學は社會哲學の他の一切の分科と極めて密接に連結した一分科であつて、經濟學の結論はそれ特有の領域に於てさへも、唯制約的に眞であるのみで、直接に其の領域內に無い原因からの、絕えざる干涉と抵抗を受けるのである。又經濟學は他の種類の考慮と切離して、實際上の指導者たる資格あると云ふことは出來ないのである。

然し單に學そのものの取扱ひのみではない、此の書は生前に七版を重ねたが、一版每に社會主義に對する同情が增して往つた、前項に引用したウェッブの言の如くに、英國の若き世代は、ミルの「原論」と共に自由放任主義から社會主義へと轉向して往つたのである。だが第二期の變化の最も顯著に現はれてゐるのは、一八三八年の



テーラー夫人とミルの筆蹟

論文「ベンサム論」と、一八四〇年の「コールリッヂ論」であらう。彼はベンサム主義からの離脱は、父親を悲しませることを考へて、父の生前にはなるべく之を秘してゐた。父が一八三六年逝くや、今は斟酌の必要がなくなつたので、此の二篇を發表したのであるが、前者に於て先師ベンサムの短所と缺陷とに忌憚なき批判を試み、後者に於てコールリッヂに溢れるやうな推讃の言を寄せてゐる。之等の論文は論文集（Dissertations and Discussions, 4 vols. 1859—1875）第一卷に輯錄されてゐるが、私は此の二篇こそ自然主義と理想主義とを比較論評した好個の文獻で、思想の成長を望む年少の學徒にとつて必讀の文字であると思ふ。

（3）

ミルの思想史の第三期は、一八五一年テーラー夫人との結婚から始まつて、一八七三年の死にまで及ぶ。晩年の此の時期は、第二期を第一期の反動とすれば、第二期に對する再歸反動とも云ひうるので、再び第一期に戻つて自然主義と自由放任主義とを强調した時期である。かうした變化がどこから由來したかと云ふならば、ミル彼自身は、之をテーラー夫人からの影響に歸するが、私はその外に社會的狀勢の變化を擧げねばならないと思ふ。然しテーラー夫人との關係が重大な感化を及ぼしたことは疑はれない。二人の戀愛は既に第二期に始まつてゐたので、第三期に於ては結婚にまで、結末を告げたに過ぎないのであるが、こゝで此の戀愛に就て少し語ることとしよう。ミル自身は當然に此の婦人を高く評價する、その言葉の二三を引用すると、個々の人の中に見出すも珍

447541

らしとされる、あらゆる美しき性格は此の一人格に併有されたと云ひ、又詩人シェレーに比すべき人であつた、然しシェレーの生涯に於て達しえた成長の程度は、彼女に比すれば一介の小兒に過ぎなかつたと云ひ、又カーライルは詩人であつて、ミル自身は思索家であつた、而して彼女は二者を併せて尙より偉大であつたと云ひ、又抽象的哲理を實際に適用する頭腦に於ては、ミルは全く彼女の弟子たるに過ぎなかつたと云ふ。之等の言葉から描いてみると、テーラー夫人とは稀世の婦人だと云ふことになるが、他方ミルの周圍の人々の批評をみると、カーライルは「あいつは馬鹿だ」と例の一流の毒舌を浴びせ、當時才媛の名のあつたグロート夫人も亦ミルが馬鹿げた過重評價をしてゐると云ひ、ミルの母親弟達はミルの生活を攪亂したと云ふ不平も手傳つてはゐようが、非常に低い評價を爲してゐる。そこで私の推察では、ミルの評價と周圍の評價とは、何れも權衡を失してゐるので、眞相は兩者の中間に在つて、彼女は相當の優れた婦人であつたのだと思ふ。ミルが漠然として夫人を讃美した言葉を別としても、實際にミルに影響した思想上の形跡を辿つてみると、此の婦人が決して凡庸の人ではなかつたと思はれる節が多い。然し實質以上にミルが夫人を評價したのは何故かと云ふならば、それにはミルの性格に原因があると思ふ。元來ミルと云ふ人は、父親の嚴格な教育の下に育てられ、理知と意志との鍛練を受けたが、情操を孕み育てることなしに成人した。そして幼少の時代から受けた思想は、ベンサムの自然主義であつて、此の思想がミルの人を構成したと共に、大體に於てミルの人となりは此の思想に適合してゐたのだと思ふ。青年時代のミルを評してカーライルは「快樂の計算器」だと云つたが、之は酷評であるにしても當つてゐないことはな

い。啻に情操が成育してゐなかつたのみならず、單に頭腦と云ふだけから云つても、彼は天才と云ふべき部類の人ではなくて、努力によつて大成した部類に屬する。ある人はミルとスペンサーとを比較して、スペンサーは天才的であり構想忽ちに成ると云ふ風であつたが、ミルは考へ考へ漸くにして思ひ到ると云ふ方で、ミルの額にある澤山の皺は之を物語つてゐると云つたが、之はミルの才能の性質を穿つてゐると思ふ。彼は一つの前提から誤つことなしに論理を辿つて、歸結にまで到達する能力に惠まれてはゐるが、前提から歸結に飛躍する直觀の能力には缺けてゐた。かうした傾向の人は、元來戀愛と云ふことに關心もなければ、それに沒頭する熱意も持ち合はさないものである。所がこゝにミルの特異性とも云ふべきは、彼が自己の此の傾向に對して、自ら物足りないと云ふ不滿を持ち、此の不滿をどこかに漏らしたいと云ふ要望を抱いてゐたことである。之が第二期に於て第一期に對して叛逆を企てさせ、內的教養に關心を持たせるやうになつたのであるが、更に殘された情操の赴く所、遂にテーラー夫人との戀愛にまで到達した。此の戀愛はミルの中に情操の潛んでゐたことの證據であると共に、此の戀愛に於てミルは自己の中にある情操を意識した。彼は思ひもかけぬ戀愛よりして、吾れ自ら知らざりし吾を發見して歡喜したに違ひない。歡喜は感謝となり、感謝は對象への讃美となる。彼れの過重評價はこゝに一つの理由を持つと思はれる。だが情操の發露は必ずしも異性を相手とすることを必要としない。例へばテニソンが「インメモリアム」の中で描いたアーサー・ハラムとの友情の如く、美しい情操は同性に對しても考へうる、所がミルの場合には異性に情操の對象を見出した。元來男性が推理に長ずるとすれば、女性は直觀に秀でてゐる。そしてミルは推理に長じて直觀に乏しいと云ふ點に於て、最も代表的な男性であつたと云へる。人は自己の足らざるものを相手に見出す時に、ある場合に相手の能力を全く鑑識しえないと云ふことになると共に、又他の場合には相手の能力を一層過重に評價することがありうる。ミルの場合は後者の適例で、彼は自己に缺けた直觀の能力をテーラー夫人に見出して、男性一般として、又自己のみが特に直觀に乏しかつたことや、テーラー夫人の直觀が女性一般としてみれば、さまで優れたものでなくとも、すべてそれらのことを看過して、相手の直觀を否相手の全能力を、實質以上に評價したのであらうと思ふ。此のことはミルのみならず、多かれ少かれある種の有能の男性にありうることである。

テーラー夫人の能力が何であらうとも、ミルは此の婦人から色々の影響を受けた。第一に自己の戀愛の體驗から推して情操の人に對する重要性を認識したであらう、かくして人は常に自己の利益の爲のみに動くと云ふベンサムの人間觀を修正せざるをえなくなつた、此の點に於てコントが愛人クロチルドをえて實證主義から人道教に變化したのと似てゐる。第二に婦人に對する關心が加はり、婦人の社會的地位を引揚げることを促した、之が特に表はれてゐるのが一八六九年の「婦人の隷從」(On the Subjection of Women)である。第三にはテーラー夫人の實際持つてゐた色々の意見が、ミルの思想傾向に及ぼした變化であつて、自然主義と自由放任主義への復歸である。之に就て自叙傳には次の如くに書かれてゐる。

今や彼女のそれと併行するに至つた私の精神的進歩の第三期（まあ斯う名付けても可からう）に於ては、私の意見は廣

さ並に深さを增し、一層多くを理解し、以前に理解してゐたものは今一層徹底的に理解した。私は今や私自身のベンサム主義に對する反動に於て極端であつた點から全然舊に復した。私は其反動が頂點に達した頃には多くの點に於て、交際社會及び世間普通の意見と根本的に異る確信を持つ人間には似合はしからぬ迄、世間普通の意見に寛大となり、是等普通の意見中に起り始めた淺薄な改善を援助する事に滿足して居た。

當時私は私が今日是認する事が出來ない程、私の意見中の明に異端的な部分を壓へつけようとしてゐた。今では此の異端的な部分こそ、其を主張する事が社會を改新する上に、何等かの效驗を齎し得る殆ど唯一のものであると考へるのである。

又更に云ふ。

私の精神的發達の或る時期には、社會上並に政治上に於て、私が容易に干涉主義的傾向に陷り得た瞬間があつた。又或る時期には、反對の極端に走つた事の反動から、今程に徹底的な急進主義者及び民主々義者でなくなつたかも知れぬ瞬間があつた。他の多くの點に於けると同じく、此の二つの點に於ても、彼女は私を新しき眞理に導き誤謬を脱せしめると共に、私を正しき處に保つて吳れて、大いなる裨益を與へた。總ての人から學び、新舊相調和せしめて、私の意見中に新意見を容るべき餘地を作らんとする私の用意と熱心とは、若し彼女の堅實な感化が無かつたならば、私を誘拐して、私の初期の意見を餘りに多く變更せしめたかも知れぬ。彼女は各種の考慮の相對的の重要さに關する正しき判斷によつて、私の心的發達に最も價値ある寄與をなした。此の事は、私が最近に發見したばかりの眞理に對して、其の本來の價値以上に重要な地位を私の思想中に與へる過を屢々防いで吳れた。

ミルの著作の大部分は第三期に書かれてゐるが、此の時期の著作目錄を見ると、再歸反動の跡を歷々として指示することが出來る。一八五二年の論文「ウォーウェル博士の道德哲學論」は、功利主義に反對する學徒を追窮して、態度實に峻烈を極めてゐる。又一八六三年に「功利主義論」(Utilitarianism) を書いて、改めて功利主義の道德哲學を取り纏め、一八六五年には「サー・ウィリアム・ハミルトンの哲學の檢討」(Examination of Sir William Hamilton's Philosophy) を出して、蘇國哲學の代表者を捕へて、自然主義の爲に萬丈の氣焰を吐き、同年「アウグスト・コントと實證主義」(Auguste Comt and Positivism) を書いて、第二期のコント推讃に對する反動を示し、遺稿「社會主義論」は繼娘ヘレン・テーラーの序文を附して一八七九年二月から四月に亙り「隔週評論」(Fortnightly Review) 誌に掲載されたが、それでは「經濟原論」中の社會主義への同情に對して、稍退却の傾向を表はしてゐる。更に一八六一年の「代議政體論」(Considerations of Representative Government) では、代議政體を主張することは勿論だが、多數派の横暴を注意して、比例代表制度の必要を唱へた。だが第三期を最もよく代表するのは、一八五九年の好著「自由論」(On Liberty) であらう。此の書の由來に就て「自叙傳」は云ふ。

私の公職生活が終ると直ぐ前の二年間、私は妻と一緒に「自由論」を書いてゐた。最初千八百五十四年に、私は既に短い論文として之を計畫し書き上げてあつた。之を一卷に書き代へようと云ふ考へが始めて起つたのは、千八百五十五年の正月、羅馬のカピトルの階段を登りつゝあつた時だつた。私の著作の中で、之ほど注意深く書かれ、之ほど念を入れて訂正されたものはない。いつものやうに二回書き上げた後、私達は之を藏つて置き、時々引き出しては一言一句を讀み、考慮し批評し、結局全部を新規にやり直したものである。....

「自由論」は、私の名を冠してゐる何れの著作よりも、一層直接に且つ文字通りに私達の協力で物されたものである。....

「自由論」が世に出た時には、協力者たりし彼れの夫人は逝いてゐなかつた。之れ彼が此の卷頭に於て「私の作物の中に於ける最もよきもののすべての鼓舞者であり、又一部共著者である彼女、その人の高尚な眞理と正義の觀念は、私の最强の刺戟であり、その人の賞讃は私の重きを占めた慰藉であつた、あの友であり妻である彼女のいとしき悲しき思出に此の書を獻ぐ」と書いて感傷的な獻辭をその妻に送つた所以である。「自由論」がいかなる意圖を以て書かれたかは、「自叙傳」の次の一節がよく語つてゐる。

「自由論」は私が書いたどの本よりも(「論理學體系」は或は除外例となるかも知れぬが)永く生命があるだらう。何となれば、彼女の心と私の心との結合は、此の書を近代の社會に於て遞次に起りつゝある變化が、日に益々較著ならしむる單なる眞理の哲學的教科書たらしめたからである。其の單一なる眞理とは、性格の典型に各種の變化多き事と、人間の天性に完全なる自由を與へて無數の相衝突する方向に發展せしむる事が、個人及び社會にとつて重要なりてふ事之である。此の眞理の根柢が如何に深奥であるかを最もよく示すものは、皮相的觀察者には大して斯かる教訓の必要が有るべしとも思はれなかつた時代に當つて、此の眞理の解說が甚大なる印象を與へた一事である。社會的平等及び輿論政治の避くべからざる發達は言論と實行の劃一てふ壓制的拘束を人類に賦課しはせぬか、との吾々の憂慮は、將來の傾向よりも現下の事實に多く着眼する人々にとつては、容易に空想的とも見えたであらう。……

更に「自由論」の中の次の一句をみると、著者が何故に自由を强調したかが分る。

人生の目的卽ち漠然たる刹那の欲望に依るに非ずして、永遠不易の理性の命ずる人生の目的は、各人の有する能力をして完全充足の一體として、最も高度にして又最も圓滿なる發達を爲さしむるにある。故に人間として不斷に努力を傾けざるべからざる目的は、特に同胞の運命に影響せんと欲するものゝ絕えず眼を注がざるべからざる目的は、力と成長の個性である。而して之が爲には二つの事が必要である、一は自由にして、一は境遇の多樣性と云ふことである。此の二つ併せられて、個性ある力と多種の複雜さとが起り、此の二者結んで獨創の心を作る。

卽ちミルが第一期に强調した自由放任主義が再びこゝで力說された。殊に卷頭に於て言論の自由を說いた邊りは今に至るも熟讀に値する。ジョン・ミルトンの「アレオパヂチカ」(Areopagitica, 1644) ジョン・ロックの「寬容に關する書簡集」(Letters on Toleration, 1690.) と共に英國は否世界は「自由論」に於て言論自由に關する古典的文獻をえた。

こゝまで述べて來ると、當然に反問が起るだらう、若し第三期が再歸反動で第一期に復歸したと云ふならば、第二期はいかなる意義を持つてゐるのかと。私は第二期と第三期との對照を明白にする爲に、第三期が自然主義哲學と自由放任主義の社會思想とを强調したと云つたが、然し第三期に於て自然主義と自由放任主義とを述べた時には、その立論の論據が第一期と著しく異つてゐることが注意されねばならない、例へば讀者は一度前に引用した「自由論」の一句を顧みれば、自由が人格成長の爲に必要だと云ふ見地に立つてゐることが分るだらう、而して人格の成長と云ふ概念は、第二期に於けるコールリッヂから來た理想主義の影響なくしては考へられない。又「代議政體論」に於て議會政治を基礎付けるに際しても、之と類似の社會哲學の立場に自分を置いてゐる。等しく自由放任主義を述べながら、第三期と第一期との間にはかくの如き相違性が見出される。次に第三期の作物の主要點が自然主義と自由放任主義とに在つたとしても、色々の點に留保と條件とを附けて、反對思想への路を

開いてゐたことが看過されてはならない。之に就ては後に詳述することとして、例へば「自由論」は一面に於て自由を强調した代表的文獻であると共に、他面に於て自由の限界を明かにして、社會改良主義への發展を敎へた文獻でもある。すべてある思想は、之を根本にまで掘り下げて、奥深い所に基礎付けを求めるならば、當然にその思想は限界付けられ反對思想への路が開かれるものだが、此の事はミルの第三期の作物を繙いて、最もよく感得されるだらう。最後に第三期の作物は表面上は第一期の主張と類似してゐるが、自然主義と自由放任主義とを主張した時に、その對象とするものが第一期の時の對象と異つてゐるのが注目されねばならない。例へば第一期に自然主義を理想主義に對抗させた時に對象としたのは、シャフツベリー、ハチソン、バトラー、等の直覺說であつたが、第三期では之等の直覺說よりもより進步したより洗練されたサー・ウィリアム・ハミルトンを對象とした。第一期に於て自由を主張した時の相手は、貴族地主等の封建的勢力であつた、所が第三期では漸く勢力を獲得しつゝある勞働者階級が、自由を尊重することを知らず、徒に國家の干涉と輿論の迫害とを招來することを恐れたのであつた。「代議政體論」で彼が民意の代表を說いた時には、社會の多數を占める多數派の壓迫に對して、少數の人々の意志を尊重せよと云ひ、第一期に於て少數の封建的勢力に對して多數の意志を考慮せよと云つたのと異つてゐる。又「經濟原論」で同情した社會主義は、空想的社會主義であつたが、遺稿「社會主義論」で社會主義に對して警戒した場合の社會主義は、マルクス等の國際勞働者運動に表はれた社會主義であつた。第一期と第三期との主義の命題が同一であるに拘はらず、その對象を異にしてゐる、社會的狀勢の異るに伴つて、曾ての主義を再び新な問題に適用して、主義を闡明する必要を感じたのであらう。之を要するに、第三期は第二期に對する再歸反動だとしても、第二期の痕跡は到る所第三期の作物の中に指摘することが出來る、それを私は次の項で企てるであらう。

（4）

晩年のミルの靜かな學究生活を破つたのは、一八六六年に彼が倫敦のウェストミンスター區から選擧されて議會生活に入つたことである。之は僅かに三會期に過ぎなくて六八年の總選擧には敗れたが、彼は議會で勞働者に選擧權を與へることを主張し、たとへ雄辯家と云ふのではなかつたが、ミルの學識に對する尊敬から彼れの演說は全議會を傾聽せしめたと云ふ。始めの選擧の時、彼が候補者として主として勞働者を聽衆とする演說會の演壇に立つた時、一人の勞働者が起つてあなたは英國の勞働者は虛言者だと云つたさうだが本當かと質問した。此の時それを否定することは選擧の勝利の爲には都合がよかつたと思はれる場合であつた、滿場は固唾を呑んで彼れの返事を待つた、正直な彼は言下に「然り」と肯定した。所が滿場は破れる如き喝采を以て之に酬い、吾々は之だけの正直な人を議會に送りたいと云つて彼は遂に當選することが出來た。優れた人物を評價することの出來る英國勞働者の美點を物語ると共に、ミルの正直さを示す一挿話である。

彼が晩年英國に於て占めた勢力は素晴らしかつた。彼には他の思想家の如く特に之と云ふ門弟が擧げられな

い、然し當時の若い人々は擧げて彼れの門弟だと云つても過言ではない。倫敦で彼れの姿を見ることは、當時の青年の誇りであつた。ジョン・モーレーは云ふ「凡そ二十年間、精神的感銘を受容しうる者にして、殊にオックスフォード大學を出でたる者にして、彼れの感化を受けざるはない」と。又一八七三年その死を弔つて云ふ「吾等は今や偉大なる教師と智德の儀表とを失ふ、されど彼れの人格は永久に生きつゝある」と。又レスリー・スチーブンは云ふ「ジョン・スチュアート・ミルは余がその膝下に跪いたガマリエルであつた、その人の權威は余に對して絶對的であつた」と。フェビアン社會主義者の一人エドワード・ピースは云ふ「ミルの言は殆ど法則に等しい權威を持つてゐた」と。彼れの影響は英國のみならず、佛獨等の諸國にも及び、ベンサムが佛蘭西以外に餘り知られなかつたのと違つて、ミルは大陸の各國に於て自然主義自由主義の代表者として、夫々巨大な足跡を印刻した。日本でも明治初年に澤山の譯書が出て、ルッソー、ベンサム、スペンサー、トックヴィール等と共に、自由民權の思想を育成したことは周知の通りである。

夫人との同棲は永くは續かなかつた、一八五八年相携へて大陸を旅行して、南部佛蘭西を廻つてゐた時に、アヴィニョンで夫人は突如病の爲に仆れた。その遺骸を同地に葬り、彼自身も亦同地に葬られることを遺言して、彼は今アヴィニョンに夫人と共に眠つてゐる。彼は臨終の床で「私の仕事は爲し終つた」(My work is done)と云つたさうである。此の言葉は單に爲すべき事が結末に來たと云ふだけの單純な意味ではあるまい。六歳の時に此の子供をベンサム主義の承繼者としようと云つたベンサムと父ミルとの期待を裏切らなかつたと云ふ意味が籠められてはゐないだらうか。然り確かに彼は結局ベンサム主義者を以て生涯を貫徹した、だが彼はそれだけではなかつた。師父の殘した主義を徒に承繼したのでなく、之を發展せしめ之を修正した。先師を生かすことは、之を超克することだと云ふならば、彼は正にベンサムの好個の相續人であつたらう。あれほどの早教育を受けた人は、えてその思想が凝結し化石するものであるが、彼は晩年に至るまで新な思想から示唆を求め、自己を發展させることを忘らなかつた。その豐富な感受力と適應力とは、彼れの生立を顧みる時に、異例と目すべきである。鬢髮の霜を帶びるに及んでも、孜々として心の成長に倦まなかつた彼れの生涯は、後人をして肅然として襟を正さしめるものがある。彼れの男らしさは、新思想に阿附追從をさせなかつた、又彼れの正直さは、いつにても舊思想の誤りを正さしめた。彼は舊思想を集成して、その採るべきものを新時代に印刻せしめ、舊時代を導いて新思想への進路を開いた。その一脚を前時代に、他脚を新時代に置いて、圓滑に又自然に、新舊思想の更替を可能とした。彼あることにより、英國は新舊思想が徒に反撥し抗爭して、精力の浪費を爲すことなしに、新時代を迎へることが出來た。何れの國に於ても必要とするは、正に彼れの如き思想家でなければならない。

彼れの如く著作十數冊に及び、又彼れの如く思想の變化した思想家の思想を纏めることは至難ではあるが、私は可能の限りに之を試みて、いかに彼がベンサム主義を修正し補綴したか、而も結局ベンサム主義の破綻を救ひえなかつたか、トーマス・ヒル・グリーンの登場がいかに必至の運命であつたかを、次項に於て語ることとしよう。

（五）哲學

ミルはベンサムから自然主義を承繼し、結局終生之から離れなかつた。然し彼は先師の自然主義を口傳へしただけではなく、之をより深く洗練した。「論理學體系」や「ハミルトン哲學の檢討」や「功利主義論」その他の論文は、今でも充分に熟讀の値があると思ふ。だがこゝでは彼をして自然主義を語らせることが目的ではない、彼が承繼した自然主義の哲學が、いかに彼に於て修正され變化したかを突き留めることだけが目的である。

先づ第一に問題になるのは、ミルは何故に自然主義の哲學に執着したかと云ふ根據である。ベンサムの場合には、自然主義を採るのは、それが眞理であるからで、若し根據をと求められたなら、それが事實に該當するからといふことの外にはなかつたらう、所がミルの場合には何故にと云ふ問が許されて、之を採る根據が述べられてゐる。「自叙傳」の中で彼れの云ふ所を聞かう。

> さて此等兩哲學派卽ち直覺學派と經驗聯想學派との差異は、單に抽象的思辨の問題ではない。それは、實際上の結果に甚大の關係を有し、進步時代に於ける實際的意見のすべての大衝突の根柢に横つて居るのである。實際的改革家は强烈普遍の感情によつて支持される事物に、變革の加へらるべきことを絕えず要求し、或は既成の事實の外見的必然と不可抗とに疑問を挿まなければならぬ。そして此らの强烈なる感情は如何にして起つたか、此らの事實は如何にして必然にして打破すべからざるものと見ゆるに至つたかを示す事が、彼の議論の缺くべからざる一部分と成る事が屢々ある。それ故に感情及び道德的事實の、境遇及び觀念聯合に依る說明を阻害し、其等を人性の究竟的要素として取扱はうとする哲學、卽ち自ら好む所の眞理を直覺的眞理として誇張する癖があり、直覺を吾々の理性よりも更に高い權威を以て語る所の自然又は神の聲なりと考へる哲學と、實際的改革家との間には自ら相容れざる所が有るのである。特に私は早くから感じて居つた、人間の性格の顯著な差異をすべて天賦にして到底抹消し難きものと考へ、個人間、人種間、兩性間何れの差異にせよ、此等の差異の大部分は、會に事情境遇の差異によつて起り得るのみならず、起るのが自然であるとの不可抗的證據を無視する現在一般の傾向は、偉大なる社會問題の合理的取扱に對する主要なる障礙の一つであり、人間的改善の最大なる邪魔物の一つであると。此の傾向は十八世紀に對する十九世紀の反動を特徵づけて居る直覺的形而上學にその源流を置いて居る。そしてそれは、一般の保守的傾向並びに人間の懈怠心に取つて甚だ快適な傾向であるから、若し其の根柢を覆すに非ざれば、それは比較的穩健なる直覺哲學によつては、本當に正當視せられぬ程極端な點にまで、推及ぼされるに相違ないのである。

卽ちミルによれば、直覺學派（素朴な理想主義派と解して宜しいと思ふ）に反對して自然主義を採るのは、前者は永遠不易の先天的原理を認めるが、永遠的のもの卽ち變化せざるもの、先天的のもの卽ち經驗によらざるもの、を認めるといふことが、社會を變革することの障害になると云ふに在る。此の點を更に强調したのは、道德哲學に於ける自然主義たる功利主義を辯護した次の一節である（「論文集」第二卷）。

> 外的の標準に訴へんとする道德と、內的信念の上に根據を置く道德との爭は、沈滯の道德に對する進步の道德の戰である。單なる意見と傳統との神聖化に對する、理性と討論との戰である。現存秩序が自然の秩序なるが故に、之に對する革

新は罪惡なりとの學說は、物理學に於て社會政治の學に於て、今は誤れりと認められるが如くに、道德の界に於ても亦誤れりとされねばならない。

こゝでミルは哲學の正否を、社會改革に役立つか否かに標準を置いたことになる。之は功利主義者として卽ち「最大多數の最大幸福」を最高の價値あるものとする彼として勿論當然ではあるが、眞理の基準を實踐に求めたと云ふ點に於てマルクス主義と共通である。ミルは理想主義は保守主義であり、沈滯の思想であると云ふことを、疑ふべからざる前提としてゐるが、此の前提は果して正當であるかどうか、進步主義である理想主義が現はれたなら、彼は理想主義を採ることになるかも知れない。兎も角、自然主義受容の論議を問題にしたことは、ベンサムと異るミルの特徵でなければならない。

かうした論據から理想主義に反對した彼は、理想主義の最後の牙城が認識論に在つて、そこで先天的なものが證明されてゐることを突き留めた、稍長くなるが再び「自叙傳」の一節を引かう。

此の學說あればこそ、起源の記憶せられぬ凡ての頑迷な信念や、凡ての狂熱的な感情が、道理によつて自ら辯解する義務を免除され、それ自身で十全圓滿な理由であり辯證であるとされるのである。あらゆる根深き偏見を神聖化する爲に、是程便利な道具はまだ工夫された事がないのである。さうして道德、政治、及び宗敎に於ける此の僞哲學の重なる强みは、之が常に數學及び物理學の數學的部門の證據に訴へる點にある。之を數學物理學から追出す事は、卽ちそれを其の根城から追出す事である。……假令其が成し遂げられても、人間の偏見と依怙贔負とにしかく力强く根ざしてゐる考方から、其の思辨的支柱を奪ひ去つただけでは、それを克服する爲にほんの一步を進めたに過ぎない。けれども、たとへ僅に一步でも、是は全く必要缺くべからざる一步である。何となれば、結局偏見は唯哲學に因つてのみ打破し得るもの故、それが哲學の支助なきものである事が明示されるまでは、其の克服に向つて眞に步を進めるは永久に不可能である。

既に敵の所在を明白にした彼は、之に代るべき認識論を以て、いかに認識が經驗のみから成立するか、いかに先天的の原理の存在餘地がないか、を證明せねばならない。之を「論理學體系」と「ハミルトン哲學の檢討」で試みたが、終局まで經驗論的認識論を以て貫徹することが困難であることに氣付かざるをえなかつた。正直な彼は精神とは「終に說明しうべからざるもの」(final inexplicability) だと云ひ、又「私自身の自我とも稱すべきものが其處にある」と稱して、自己の立場の弱味を告白した。ミルの所謂「終に說明しうべからざるもの」「私自身の自我とも云ふべきもの」が、理想主義者の所謂先天的原理である。先天的原理の否定を目的として構成した認識論は、最後に先天的原理の存在を許容せざるをえなくなつた。之をミルの轉向と云はずして何をか云はう。

認識論上の變化はまだ顯著ではないが、次に彼れの人間觀を見ると、變化はかなり目立つて來る。ベンサムから相續した人間觀は、快樂主義のそれであつて、人は唯快樂を求め苦痛を避けると云ふ自然必然の衝動のみにより動き、之れ以外何ものも人を動かすものではありえないと云ふのである。然るに彼は「ベンサム論」の中で快樂苦痛以外に、別の欲求が人間に在ることを認めることになつた。彼は云ふ、

ベンサムは人間が靈的完成を目的として追求する事の出來るものとは認めなかつた。唯自己の內的意識より湧く善を希望し惡を恐怖すると云ふ心のみに動かされて、唯その事自身の爲のみに、人間が自己の性格を優秀の水準に引上げようと

云ふ欲求を持ち得るものとは認めなかつた。此の心は良心と云ふよりも廣い内容を持つたものであるが、良心と云ふ狹い形に於てさへ、人間性に此の大事實あることは彼れの注意を脱した所である。……自然の心と云ふ言も、又はその言に相應する觀念も、私の記憶する限りに於ては、彼れの全著作を通じて唯一回でも出て來ない。

更に「功利主義論」の中で、吾々が善を爲すは外部からの賞罰に對する快樂苦痛からではない、別に内部に存在する制裁があるからだと云ふ。

功利主義は他の道德の體系に屬するすべての制裁を持つ、又持てないと云ふ理由はない。その制裁とは一は外部より來るもので、一は内部より來るものである。外部よりの制裁に就ては、こゝに詳しく述べるの必要がない。……吾々の義務の標準がどうであらうとも、内部より來る義務の制裁は同一である、卽ち吾々自身の心に在る感情である。義務に反した場合に於て、强かれ弱かれ感ぜられる苦痛の感である。その感じが重大な場合に當つては、教養ある道德的性格をして、義務に反する行爲を爲すを不可能たらしめることがある。……その拘束力は一群の感情が内部に存することに在る、若し吾々が正義の標準に反する事を爲さんとするには、その感情を突き破らねばならず、又若しその標準に反するならば、その後に於て後悔の形に於て心の戰を爲さねばならぬからである。吾々が良心の本性や起源に就て、如何なる學說を有しようとも、以上がその内容を爲す要素である。

こゝまで來ればもう快樂主義の人間觀ではない、旣に理想主義の人間觀である。更に彼は人間の性格は環境により形成されるもので、之を認めればこそ環境を改善する社會變革の必要が肯定されるのだと考へてゐた。所がミル自身が自己の性格を鍛練し、自己の成長を圖ることを關心事とするやうになつてから、此の必然論と意志自由論との矛盾を感じて、此の解決を果さねばならなくなつて來た。若し環境の決定を認めるなら、意志の自由を否定し、自己の成長を放棄するの外はない、若し又意志自由論を認めるなら、環境の支配を拒否し、社會改革を斷念するの外はない、かくして社會改革に關心する誰でもが一度は陷る問題の前に立たされた。「自叙傳」に云ふ。

私の憂鬱が後になつて復た襲來してきた時、所謂「哲學的必然」の學說が夢魔の如く私の生存を壓迫した。私は過去の境遇の免るべからざる奴隷であると科學的に證明された如くに感じた。私の性格も他の凡ての人々の性格も、吾々の支配の彼方にある力によつて形作られたもので、吾々自身の力には全然及ばぬ如くに感じた。私は屢々獨言を言つて、若しも私が性格は境遇によつて作らるゝてふ學說を疑ふ事が出來たならば、如何に心安く感ずるだらうと。……私は必然の法則が他人の性格に關しては信奉され、自己の性格に關しては信ぜられなかつたならば、そは世の幸福であらうと言つた。私はこの問題に就て頭を惱ましたが、遂に漸く之を通して光明を見た。

それでは彼れの到達した結論はどうであつたか。

今日かくも根氣好く普及して、そして意地惡く此の偉大なる學說（譯者註必然論を云ふ）を誤解せしめた言葉によれば、人の性格は、彼に對して作らるゝもので、彼によつて作らるゝものではない、それ故にその性格が今とは異つて作られんことを欲するも、そは詮なき事である。彼は性格を變へる力を持たないのであると。然し之は重大な誤謬である。人は或程度に於て自己の性格を變化せしむる力を持つ。――性格は結局に於て彼に對して作らるゝものであると云ふ事は、間接に彼自身に依つて作らるゝ事があると云ふ事と矛盾するものではない。人の性格は境遇（其の中に體制を含めて）に依つて作らる、されど特別の方法にて之を改造せんとの自己の希望も亦、其の所謂境遇の一つである、而して境遇の中でも決して力の小さいものではない。

此の解決では、自己の意志を徒に環境の中に押し込めただけで、本當の解決にはなつてゐない、然し若しベンサムであつたなら當然に環境必然論で滿足しえたであらう、然るにミルに於てはそれで滿足し切れなくなつた。そして憂愁に驅り立てられるほど苦惱せねばならなかつたと云ふことは、偶々ミルのベンサムからの離脱を語るものであらう。

轉じて功利主義の道德哲學を見ると、彼は最大多數の最大幸福を圖ることが善であり、それこそ自己が生存する目的であると考へてゐた。卽ち「誰を」關心事とするかと問はれゝば「最大多數」と答へ、それでは最大多數の「何を」と問はれたら、彼等の「幸福」（快樂と同じ）と答へたのである。所が「內的歷史に於ける危機」を經過した後には、此の點に就て根本的の變化が醸された、卽ち此の以後彼れの生存の目的は、自己以外の最大多數の幸福を圖ることではなくて、自己の人間としての成長が、目的として置き代へられた。前項で引用した「自由論」の一節を引用すれば彼は云ふ。

> 人生の目的卽ち、漠然たる刹那の欲望に依るに非ずして、永遠不易の理性の命ずる人生の目的は、各人の有する能力をして完全充足の一體として、最も高度にして又最も圓滿なる發達を爲さしむるに在る。故に人間として不斷に努力を傾けざるべからざる目的は、特に同胞の運命に影響せんと欲する者の絕えず眼を注がざるべからざる目的は、力と成長の個性である。

更に「經濟原論」の中には次の一句がある。

> 人生の實務は、人の實際的敎育の主要なる一部を爲すものである。書籍と學校の訓導とは、大いに必要であり有益ではあるが、行爲に人を資格づけ、目的に對して手段を適應せしむるの働に、人を資格づけるには不足を感ずる。訓導は精神的發達の必要條件の唯一つのものたるに過ぎない。他のもの卽ち殆ど缺くべからざるものは、能動的精力を發刺として發揚せしむるに在る。勞働、工夫、判斷、抑制すべて之等のものに對する自然の刺戟は、實に人生の苦鬪難關である。

善が幸福（快樂）でなくて、人間としての成長にあるとすれば、功利主義ではなくて理想主義である。從つて彼れの功利主義は自ら變化せざるをえなくなつた、卽ち「功利主義論」の中で云ふ。

> 或る種の快樂は他のものよりもより望ましくより價値ありとの事實を認めることは、功利主義と全く相容るゝ觀念である。吾々が他のすべての物を評價するに、分量と共に品質を考慮に入るゝに拘はらず、快樂の評價に就てのみは唯分量のみに依るべしと思はるゝは不合理である。

而して優れたる快樂を求める者は、たとへ之を滿足しえずとしても好ましく、劣れる快樂を求める者は滿足しえた場合でも好ましからず、「滿足したる豚たらんよりも、不滿足の人たらん方よく、滿足したる人たらんよりも、不滿足なるソクラテスたらん方より善し」と云ふ有名な言葉を述べた。然し善とは何かと問はれて何々の快樂と答へるのが功利主義であるのに、快樂の中に善惡の區別を設けるのは、問に答ふるに問を以てする循環論法の誹りを免れない。理想主義を採りながら功利主義を淸算しえず、功利主義を採りながら理想主義を援用する矛盾が此の中に窺はれる。かゝる矛盾にまで來たことは、偶々ベンサムと異る證據である。

今まで最大多數の最大幸福の實現と云ふ、ある外部的狀態を構成することが、彼れの理想であつた。然し之は

自己の理想の發露する結果ではあらうが、自己の理想そのものではありえない。社會改革に熱心な人々は、屢々社會改革を以て自己の理想とする、然しその人に於ても眞實は別に自己の理想を抱いて、その結果としての社會改革を描いてゐるのである。その限りに於て、無意識の裡に自己の人格の成長を目標としてゐるが、意識の界に於ては道德哲學を缺如して、單に社會哲學を持つに過ぎない。社會哲學として社會の理想を持つことは一つの事である、然しその理想を自己の問題として取り上げて、之を自己の果すべき課題とすることは、別の事である。社會の改革を自己の任務として、之にまで自己を鼓舞し激勵するものが、道德哲學でなければならない。此の意味に於て自然主義者は一般に道德哲學を缺如してゐる、ベンサムもミルも亦さうであつた、然るにミルは「內的歷史に於ける危機」に於て、「若し此の世に於て最大多數の最大幸福がすべて實現された場合に於て、それは汝にとつて偉大な歡喜であり幸福であらうか」と自問してみた、そして彼れの抑ふべからざる自己意識は、之に對して「否」と答へた、卽ち此の時から彼は自己の存在の目的を、外界の變革から內界へと轉化した、かくして眞正の道德哲學を所持するに至つたのである。而して彼が新に置いた「自己の內的成長」とは、正に理想主義者の云ふ所と符節を合するものである。ミルの變化の中で最も特筆すべきは此の點に在ると思ふ。

既に善とは自己の人間としての成長に在つて幸福にないとすれば、社會改革者として實現すべき理想も亦「最大多數の最大幸福」ではなくならざるをえない。彼は「誰を」と問はれたなら、依然として「最大多數」と答へたらう、然し最大多數の「何を」と問はれたなら、「幸福」と答へずして「人間としての成長」と答へる。卽ちミルの社會哲學も亦道德哲學の變化と共に變化した。曩に引用した「自由論」と「經濟原論」中の一節は、一面に於て道德哲學を語ると共に社會哲學を語つてゐる。かくして社會制度を改革することは、曾ては新制度が幸福を與へるからであつた、今は人間の成長の爲に必要な條件なるが故であつた。同じく社會改革に精進しながら、改革の意義の根本的に移動したことを注意せねばならない。かくて自由の必要を高調するに就ても、代議政體を擁護する場合にも、婦人を隷從から解放するに際しても、その根據は全く更新された。次に述べる社會思想の變化の前提として、此の一事が看過されてはならない。

以上ミルの認識論、人間觀、道德哲學、社會哲學等の變化は、何處から來たかといへば、彼が「內的歷史に於ける危機」の後、今まで自己を育てたベンサム主義と異る思想を求めた時に、彼れの前に現はれたコールリッヂに代表される獨逸理想主義、蘇格蘭の一角を占めてゐた蘇國哲學、佛蘭西に於けるサン・シモン、コントの思想、及びテーラー夫人との交渉から來たのであらう。だが之等の思想は啻に以上の變化をミルに與へたのみではなかつた。特にコールリッヂとサン・シモン、コントとは、彼に今迄全く缺如してゐた發展的見方を暗示したのであつた。エンゲルスによれば、萬有の見方に形而上學的の見方と發展的の見方とがあり、前者は不動に於て靜止に於て死に於て見るが、後者は變化に於て流動に於て生に於て見る。所謂發展的の見方は、十九世紀の初頭に始めて現はれて、而も期せずして獨逸理想主義者とサン・シモン、コントと英國の生物學者とにより唱へられたが、それ以前に於ては全く知られなかつた、之こそ十九世紀に於ける最も偉大な變化の一つだらう。十七八世紀まで

の思想家は、自然も社會も不斷の進化を爲しつゝあり、現在は過去の結果であり未來に至る過程であるとは思はなかつた。ベンサムも亦此の例に漏れなかつた。正統派經濟學者も亦然りであつた。彼等の經濟學の缺點は、快樂主義の人間觀を採つたことではない、快樂主義は人間の必然の心理を斷定したものとしては誤謬であるが、經濟學の出發點としての假定としては誤謬ではない、經驗科學は常に何等かの假定を必要とし、人は自己の利益によつて動くと云ふことは、經濟生活の大體に於ては眞相であり、假定である限りに於て之を採つても差支へはない。寧ろ彼等の經濟學の根本的缺陷は、現在社會を永遠不易の社會として肯定し、進化の一過程として見ることをえなかつた點に在る、之れ卽ち發展的見方が彼等に缺乏してゐたからである。

ミルは上述の人々の影響を受けて、「存在」(Sein)を見るのみでなく、「成生」(Werden)を見ることを敎へられた。彼は「コールリッヂ論」の中で、所謂ゲルマノ、コールリッヂ派の歷史哲學に就て次の如くに云ふ。

過去半世紀の間に、歷史の上に投ぜられた輝ける光は、殆ど全く此の派より來れるものである。……ヘルデルよりミシユレーに至る偉大なる作家と思想家の一群によつて、今迄無意味の音響と狂亂に滿ちた、痴人の語れる物語と見られる歷史は、始めて原因と結果の科學となつた。彼等は過去の事實と事件とをして、人類進化の途上に於ける意味と明白なる地位とを持たしめた。歷史に與ふるにロマンスの如き興味を以てしたるのみならず、現在を產出し今も尙現在を保持する要素を開發することによつて、未來を豫言し指導する唯一の方法たらしめたのである。

今までもミルは歷史に興味を感じないではなかつた。然し從來は單に過去の事實を興味から觀察したか、或は現在に對する敎訓として觀察したかであつた。然るに今や歷史は「原因結果の進化の連鎖」と考へられるに至つた。彼がいかに大陸の「歷史哲學」に興味を喚起されたかは、論文集第二卷の數論文で窺ふことが出來る。發展的見方が加はつてから、彼にとつて過去は現在に到達する必然の過程であつた、かくして彼は過去を眺めるのに、曾てのやうに幼稚野蠻素朴と云ふことを非難しなくなつた、一切が現在に至る過程として寬容の眼を以て眺められた。此の事は動もすれば人を驅つて保守主義者とする危險がある、だが彼に多とすべきは、彼が現在を未來に亙る過程として、過渡的價値のみを認めることとなつて、保守主義者どころか、寧ろ却て現狀維持に反對して、未來を翹望する改革主義者たることを裏書きしたことであつた。かくして今まで永遠不易の社會秩序と認めて來た資本主義は、永遠の進化の一過程を占めるに止まり、曾て之と異る時代があり、將來に又之と異る時代のあることを想像した。彼以前の正統派經濟學者と異る點がこゝに在る。その時ミルの眼前に、私有財產制度と自由競爭制度なき社會主義社會が、髣髴として現出した、彼れの社會主義への變化は、發展的見方が大に與かつて力あることは注目されねばならない、そこで私は哲學から去つて、社會思想の變化に移らう。

(六) 社會思想

ミルがベンサムから相續した社會思想は、自由放任主義であつた。自然主義の哲學から結局離れなかつたと同じく、結局彼は自由放任主義の原則を根本的には捨てなかつた。然し前述した彼れの社會哲學の變化に伴つて、

彼れの自由放任主義を主張する論據は、最大多數の最大幸福の爲に自由が必要だからと云ふのではなくなつた、最大多數の人間の成長の爲に自由が不可缺だからと云ふことになつた。幾度か引用した「自由論」の一節の外に、「經濟原論」の中の次の一節が想起されねばならない。

> 凡ゆる個人の周圍には、一の圓周がある、こゝには政府――假令それが一人のものにせよ、少數のものにせよ、將又多數のものにせよ、――の侵入を許すべからざるものである。苟くも分別ある齡に達したる者には、何人の生活にも一つの部分があつて、此の範圍内に於ては、他の個人によりても又團體によりても、何等の制約を受くることなくして、その人の個性は支配を許さるべきものである。…
>
> 人が爲さんと欲することを妨げられ、自らよしとする判斷に從つて行動することを妨げられる事は、如何なる場合に於ても啻に煩累に堪へざるのみならず、夫れだけ受動的、又は能動的、肉體的又は精神的の能力の成長を枯死せしむるの傾向がある。而してその人の内部の良心が自然に外部よりの强制を伴ふ場合に非ざれば、强制は多かれ少かれ、奴隷の墮落を齎すものである。

社會思想の論據の變化と共に、彼はベン・サムの當時にまだ確定さを缺いてゐた新な自由を、自由放任主義の項目として追加した。それは團結の自由である。前々項で書いた如く、此の自由に就て自由主義者の去就は統一を缺いてゐた。實際的には一八二四年と二五年との勞働組合法で、從來の結社禁止法を廢止し、勞働組合を合法的存在としたのだが、此の自由を自信を以て自由主義の當然の内容とするには至らなかつた。ミルは積極的に團結の自由をば個人の自由の擴張だとして承認した。唯興味あることは彼が勞働組合を承認したのは、勞働者の自由を尊重すると云ふ立場からで、之によつて勞働者の賃銀が引上げられるからと云ふのでなかつたことである、即ち彼は「賃銀基金說」(Wage fund theory) を信じて、一定の時と一定の所では、賃銀の爲に支拂はるべき一定の基金がある、從つて賃銀を引上げようと思ふなら、勞働者が刻苦勉勵して基金の總額を增加するか、又は勞働者の數量を減じて、一人當りの基金の分配額を增加するの外はない。組合の威力によつて賃銀を引上げたなら、非組合員の賃銀を犧牲とするに過ぎないと云ふ。「賃銀基金說」は正統派經濟學者の牙城であつて、經濟學が陰鬱なる科學と云はれたのは主として之に依る。ミルは一八六九年ソーントンとの論爭に於て、遂に賃銀基金說を拋棄したが、それまでは勞働組合組織の自由は認めたが、組合の効果を認めたのではなかつた。團結の自由に關し此の點が附言される必要がある。

以上の如く彼は自由主義の原則に執着したが、本篇第二項に擧げた社會的狀勢は、彼をして幾多の修正を自由主義に行はしめ、自由放任主義を轉化して社會改良主義へと發展せしめた。即ち婦人少年勞働者に對する殘酷な勞働の强制に對する勞働立法の進展、解放された勞働組合の活動、一八三八年から十年間に亙るチャーチスト運動、別けても一八四八年の二月革命で巴里は一時ルイ・ブラン等の社會主義者が政權を握り、社會主義は單なる空論でないことを示したこと等は、彼れの敏感を喚起したに違ひない。之等の事件と共に彼に影響を與へたのは、サン・シモン等の空想的社會主義者が現存社會組織に加へた批判であつた。彼は「自叙傳」の中で云ふ。

> …私は…サン・シモン派のものとは絶えず接觸を續けて居た…私は一八三〇年にサン・シモン派の首領バザァル

及びアンファンタンに紹介された。そして彼等の教義宣傳と新信徒勸進とが續いて居る限り、私は彼等の述作の殆ど總てを讀んだ。普通に行はれて居る自由主義の學說に對する彼等の批評は、私の考へでは重大なる眞理に充ち滿ちて居る樣に思はれた。そして私の眼が舊經濟學の甚だ制限的一時的なる價値に目覺めたのも、一部分彼等の論文に負ふ處がある。蓋し舊經濟學は私有財產と遺產相續とを不可侵の事實と信じ、生產交換の自由を社會的改善の究竟語と考へて居るのである。……私は彼等の社會組織が實行可能であるとも、有用な働を爲し得るものとも信じなかつたが、人間社會の斯くの如き理想の宣揚は、現在の社會を或る理想的標準に近からしめんとする他の人々の努力に、有利なる指導を與へずんば止まらないだらうと感じた。

以上の影響が自由主義に與へた變化を要約してゐるのは、彼れの「自由論」であらう。彼は吾々の行爲を二種に分類して、一は自己のみに關する行爲であり、他は他人にも關係する行爲であるとし、前者の行爲に言論、團結等を包含せしめ、此の種の行爲は絕對的に自由でなければならないと云ひ、その中の言論の自由に就て剴切な論據を指摘し、今も尙古典的價値を持つてゐる、然し他人にも關する行爲は必ずしもすべて自由でなければならないとは云へない、ある場合には自由であり他の場合には强制を加へても止むをえないと云ひ、何れかを決定するのは別の論據に依らねばならないと云つた。所謂他人にも關係する行爲の一例として、少年勞働者の勞働契約を擧げ、之等の勞働者に關する措置は、資本家のみの意志に任せることは出來ない、政府は宜しく保護法規を制定すべしと云つた。此の意味に於て、自由への要求は他人にも關係する行爲に對しては絕對的たりえないとして、彼は自由に對する限界を附けたのであつた。吾々の行爲を彼れの如くに二分しうるや否や、又他人にも關係する行爲として彼が擧げた事例のみが適切なるや否やは、更に後に檢討する必要がある。然し「自由論」は一面に於て自由主義を從來よりもより深く基礎付けたと共に、他面に於て自由主義の絕對性を否定して、社會改良主義への進路を開いた。英國人は此の路を步んで、彼と共に改良主義へ更に社會主義へと進化したのであつた。

以上の如き概論の下に、彼はいかなる點に於て從來の自由主義の範疇を離脫したか、之を次の數項に分けて尋ねることとしよう。

第一は彼が經濟理論の中で、生產に關する法則と分配に關するそれとを區別し、前者は物理的法則の如くに不變であるが、後者は時の社會制度に依存するもので、制度と共に可變であると云つたことである。分配法則が可變であることから、然らばいかに社會制度を改革すべきかと云ふ問題が開かれる。此の事は以下一切の變化に對する出發點となる。彼は「自叙傳」の中で次の如くに云ひ、同一の事が「經濟原論」中の生產の篇に詳述されてゐる。

……普通の經濟學者は經濟學法則の名稱の下に此の二つ（筆者註、生產と分配とを云ふ）を混同し、人間の努力では破る事も變更する事も出來ないものと考へる。さうして吾人の地上の存在の不可變的條件に依憑する事柄と唯特定の社會組織の必然的結果に過ぎずして其の組織と併存するに過ぎない事柄とに、同じく必然性を認めて居るのである。一定の制度と習慣とを以てすれば、賃銀、利潤及び地代は、一定の原因に依つて決定せられる。然るに此種の經濟學者は、此の必須的豫想を忘れて、此等の原因は人力の如何ともすべからざる一の內在的必然によつて、生產物の分割に於ける勞働者、資本家及び地主の所得を決定するものと論ずるのである。拙著「經濟學原論」に此等の原因が其の豫想する條件の下に於て、

如何に作用するかの科學的究明をした點に於ては、從前の經濟學者の何れにも讓らなかつた。然し此の書は此等の條件を究竟のものとしては、取扱はぬ範例を示したのである。自然の必然法則に依らずして、之と現在の社會組織との結合による經濟上の一般法則を、此の書は單に一時的なもの、社會的改善の進歩につれて大に變革を來すべきものとして取扱つた。

第二は社會主義に對する同情である。彼は社會主義に對する從來の反對を一々反駁し、その實現の未來を仰望した。「自叙傳」は語る。

…併しながら、究竟の改善に關する私達の理想は遙かに民主主義以上に出て居て、我等を社會主義者と云ふ一般的稱呼の下に分類したであらう。私達は大抵の社會主義的組織が必然含むと推察される所の個人に對する社會の壓制に最も强く反對したけれど、私達は又望んで居た。社會が最早徒食者と勤勞者とに分割されざる時が、働かざる者は食ふべからずと云ふ規則が、啻に赤貧者のみならず凡ての人々に適用せらるゝ時が、今日大いに行はれてゐる如く勤勞の產物の分配が出生と云ふ單なる偶然事に依つて定められず、萬人公認の正義の原則に從ひ合意に依つて行はれる時が、單に自身のみの爲でなく、自分が屬する社會と共に相頒つべき利益を得る爲に、人類が奮鬪努力する事が最早不可能にあらず又不可能と考へられぬ時が來る事を。將來社會問題は、最大限の個人的行動の自由を地球上の生產原料の共有と協同勞働の利益に於ける萬人平等の參加とに如何に結合せしむべきかにあると私は考へた。

だが彼は社會主義が今直に實現しうるとは思はなかつた。彼れの前にある對立が、現在の資本主義と社會主義社會であつたなら、彼は異議なく社會主義を採つたらう、然し彼には此の外に改善された資本主義と云ふ對案があつた。「私有財產と自由競爭との上に建てられた社會」は尙存續するだらう、人間改善の現時の狀況に於ては、企圖さるべき目的は「個人所有の組織の廢止に非ずして、その改良に在る」と云ふ、卽ち彼は社會主義者とはならずして、社會改良主義者として停止した、然しベンサム、リカアドの門弟から、以上の如き言を見るだけで既に空谷に跫音を聞くの感があるだらう。

第三は所有權制度を批判し、相續に就て改革を提唱したことである。彼によれば所有權の制度とは「彼又は彼女が自己の努力によつて生產したもの、又は之を生產したものより暴力又は詐僞を用ゐることなくして、贈與又は正當なる合意により獲得したものを、排他的に處分する權利」を云ふ。かかる權利を認めることの趣意は、報酬を努力に伴はせることにより努力を刺戟し能率を增進し、結局全體の幸福を齎すからである。それならば現時の資本主義は果して、此の所有權の理念に該當してゐるか否かが問題となる。所有權本來の制度に照らして資本主義が改良されねばならない。その一は死者が遺言なくして死亡した場合に、遠緣の者に相續せしめることなく、遺產は社會の公有にすることであり、その二は遺言のあつた場合にも「快適なる獨立を爲しうる資力を供するに足る」以上の相續を認める必要がないと云ふことである。「經濟原論」の一節に云ふ。

…若しこの制限が實際に有效たらしめ得るならば、その利益は大なるものがあるであらう。最早少數の者を過當に富ましめる事に使はれざる富は、或は公共の有用の目的に獻げられるか、或は個人に與へられるとしても、より多數の者の間に分配せられるであらう。虛榮の爲か或は不當の權力使用の爲より外には、何人にも個人の目的の爲に必要なるべき筈のない巨大の富は、今より數の減ずると同時に、虛榮以外に富の與へ得る閑暇とすべての眞實の愉快とを持つた容易な境遇に、夥大の人々を置く事が出來るであらう。

第四は土地所有權に對して、特に嚴格な批判を加へたことである。土地は何人も生產したのではない、從つて

所有權一般に就てどう云はれようとも、土地所有權に就ては又特殊な批判が成立しうる。況んや英國は巨大な地主國であり、長子相續制によりその土地は分割されず、地主は不在地主として都市に安居して殆ど生産に關與しないから、土地所有權は特に英國に於て問題の種となる。彼は「經濟原論」の中に云ふ。

……私にとつて殆ど公理と見ゆることは、土地の所有權に就ては嚴格に解釋さるべき事である。疑ある場合にはすべて、所有者の不利益に解さるべきであると云ふ事である。動産及び勞働の生産物たるすべての物に對する所有權に就ては、之と正反對である。之等に就ては、使用及び排他の權利は、他人に對して積極的の樂害が之より生ずる場合を除いては、絶對的なるべきである。されど土地に就ては、積極的の利益を生ずるものとの證明あるに非ざれば、如何なる個人に對しても排他的の權利が許さるべきではない。共同の相續財産たる土地の一部は俄に排他的の權利を許すと云ふ事は、一部だけ所有せざるものの一方に存する以上は、既に一個の特權である。……特權即ち獨占は、唯止むを得ざる害惡としてのみ許さる。之に伴ふ利益が伴ふ以上は及ぶ時、それは正義に反する事となる。

第五は地代に對する彼れの態度である。地代がいかにして成立するかに就て、リカアドは有名な地代論で說明した。土地に優劣の差別あること、優秀な土地が有限なること、收穫漸減の法則の作用すること、人口增加、穀物需要の增加、穀價の騰貴等の現象は耕作限界を移動させ、優等の土地と劣等の土地との收穫の差額が即ち地代であると云ふのが、地代論に於ける說明であつた。リカアド自身は此の學說を以て地主を攻擊する意圖を持たなかつた。然しジェームス・ミルは既に地代論から演繹して、若しかくして地代が成立するならば、地代は一連の社會現象の結果であるから、地代は地主の不勞所得である、寧ろ宜しく社會の公有に移すべしと唱へ、ミルも亦之に從つて地代公有說を主張した。彼は「經濟原論」の中で云ふ。

……所有者に依つて何等の努力も犧牲も拂はるゝことなくして、絶えず增加する傾ある所得の一種がある。之等の所有者は自らは全く袖手傍觀しつゝ、自然の事情により累進的に富まさるゝ社會の一階段をなすものである。かくの如き場合に於ては、國家がその所得の生ずるに從ひ、增加したる富の全部又は一部を使用するも、私有財産の據て立つ原理に反するものではない。こは本來何人より何物をも奪ふ事ではない、そは唯偶然に依つて生じたる富をして特種の階級の富に不勞の增加たらしむる代りに、社會の利益の爲に沒收するものたるに過ぎない。

今や地代の場合が實際に之に當る。……地主は働く事なくして、危險を冒す事なくして、經濟を考ふる事なくして、云ばゞ眠れる間に愈々富む。社會的公正の一般原理に立つて、彼等は富の此の種の增加に對して、果して何の要求の資格ありや。

彼が嘗に地代公有說を唱へたのみならず、一八七〇年「借地改良協會」を組織して自ら會頭となり、地主の不當な要求に對し、反對運動を起した事は、論文集第四卷の數論文に明かである。地代公有を口にすること、既に自由主義者として異例であるが、此の後に於ける思想史上の發展を顧みれば、此の一事の影響は頗る大なるものがある。即ちミルの以後地代なる概念は、單に土地のみならず、資本企業勞働にも成立すると解釋され、地代公有說は一轉して、一切の不勞所得公有說となり、更に不勞所得發生の原因たる生産手段公有にまで轉化し、遂に英國社會主義を産むに至つたから、彼れの投じた波紋は重大なる意義がある。

最後に彼が少年勞働者の就業時間を短縮する保護立法の必要を認めたことである。自ら判斷しうる能力なき少

年に就ては、成年勞働者と同一に律すべきでないとして、一般の勞働者の勞働立法に關しては依然として反對したが、少年勞働者のみに就ては例外として贊成した。

以上の變化は、私の所謂實質上の自由主義の範圍に於ける變化であるが、實質上の自由を實現する方法としての形式上の自由、卽ち言論上の自由と政治上の自由は如何にと見るに、前者に就てはベンサム以來の主張を更に强硬に主張しただけで變化を認めえないが、後者に就ては少しく云ふべきことがある、卽ち一方に於てベンサム以來の傳統たる選擧權擴張を主張したことは勿論であるが、既に勞働者階級に選擧權が與へられることは唯時期の問題となつたので、之等の廣汎な社會層に政治的發言權が移るならば言論の自由を充分に尊重することを知らざる下層階級が、有識階級を多數の名に於て壓迫するかも知れないと疑ひ、之等少數の有識階級を保護する必要を感じ、一方言論自由の必要を高調すると共に、他方に「代議政體論」に於て比例代表制度を唱へ、以て少數者を大衆の壓迫から保護しようとした。此の制度は彼れの創見ではないが、彼によつて世人の注目を惹くに至つた。

之を要するに、ミルはベンサムから承繼した自由主義に對し、上述の如き轉換を加へて、自由主義を自由放任主義から社會改良主義へと發展せしめた。哲學に於ける自然主義から理想主義への變化と共に、ベンサム門弟として豫期せられない旋回を企てたのであつた。此の旋回が果して正當であつたか、又それで充分であつたか、之は彼に對する批判に任されねばならない。

（七）批判

ミルが自由放任主義から脫却したことは、正當な道行であつた。封建制度が殘存した時、又產業革命が進行を開始した當時に於ては、自由放任主義を採ることが、最大多數の人間の成長の爲に必要であつた、だがベンサムにとつて正當であつた自由放任主義は、十九世紀の中頃のミルにとつて合理的ではなくなつた。自由放任主義はそれを正當付けた根本原理に照らして、自らを殺して生きんが爲に、別の社會思想に發展せねばならない、唯問題は社會改良主義で停止してよいかどうかである。改良主義が果してミルの云ふが如く、社會主義に對立してよりよきものであるか否か、こゝに重大な疑問が殘る、だが私は此の問題はグリーンの所で觸れることとしよう。假りに改良主義で停止するとしても、彼が提案した改良策で充分であるかも亦檢討されねばならないが、之は餘りに微細な點に立入ることになるから、こゝでは云はないこととする。

彼が「自由論」の中で自由なるべき場合と必ずしも自由を要求しえない場合とを區別したことは正しい。然し彼は行爲を自己のみに關係する行爲と他人にも關係する行爲とに分類したが、先づ彼自身果して此の分類を以て一貫してゐたらうか。例へば遊蕩をする人間の行爲は、自己のみに關する行爲だから、自由に放任せよと云ひながら、朽ちかかつてゐる橋を渡らうとする人間を强制して引き留めることは正しいと云ふ、何故なれば若しその

人が橋が朽ちかけてゐることを知つたならば渡らないであらう、彼れの眞實の意志は橋から落ちることではないからであると。然し自己のみに關する行爲は自由に任せよと云ふならば、此の場合にも放任せねばならない、何故なら橋から落ちることは唯彼自身のみに關する事だからである。若し落ちることが眞實の意志でないと云ふことを以て强制が許されるならば、遊蕩することも人間のあるべき眞實の意志でないから、强制されてもよいこととなる譯である、卽ち彼は此の分類に於て終始一貫してはゐなかつた。更に一歩を進めれば、抑々吾々の行爲の中に、唯自己のみに關係する行爲なるものがありうるであらうか、何等かの意味に於て他人と關係なき行爲はありえない。若し假りにあつたとすれば、かかる行爲はいかなる意味でも他人と沒交涉である、それならば他人は何故にかかる行爲に自由を尊重する義務を負ふのであるか。義務を負ふと云ふことは、既に彼が自己と何等かの交涉あることを前提とする。全然風馬牛なる他人に對しては何等の權利義務が發生しえないのである。吾々の考によれば、あらゆる人の成長は吾々同胞の關心事である。その故にその人の成長の爲に必要な自由を尊重する義務が生じて來るのである。ミルも亦人間觀に於てベンサムから離脫して、善そのことの爲に善をなす要求を人間の內部に承認した、それならばその意味ですべての人は內面的に交涉があるので、他と隔離した自己のみに關する行爲はありえない譯である。結局彼は人間觀を訂正したに拘はらず、それを以て統一しえないで、自ら識らざる裡にベンサムと同一の人間觀を前提として、かかる孤立した人間を考へたのである。然らば各人は吾々と沒交涉の存在となり、社會に於ける權利義務の關係は成立しない。此の點は彼れの人間及び社會に關する哲學の曖昧さから由來するので、事は單に社會思想の問題に非ずして、哲學の問題に關する缺陷である。かくて私は轉じて彼れの哲學の變化を批判しよう。

彼が「內的歷史に於ける危機」を經過した後に、自然主義の缺陷に氣付いて理想主義に傾倒したことは正當であつた。之れ正に自然主義の必然に到達すべき徑路であつて、此の一事によつて自然主義は理論によつて克服されずして、現實の生きたる人の而も代表的な自然主義者の體驗により克服されたのである。自然主義はミルによつて弔鐘を敲かれた、ミルの生涯の最も意義あるは、此の一點に在る。今も尙依然として自然主義に——それが功利主義であらうと、又それがマルキシズムであらうとも——安住するものは、ミルの自叙傳を繙いて再思し三省せねばならない。だが問題は、彼が果して往くべき路を過つことなしに進んだかと云ふことに在る。最大多數の人格の成長を社會の理想とする社會哲學と道德哲學とを混同した功利主義の誤謬を脫却して、道德哲學に於て自己の人格の成長を目的と認めたことも妥當である。唯彼は理想主義の道德哲學に傾きながら、依然として功利主義の纏はりから離脫しえなかつた、その故に快樂に品質の差等を認めると云ひながら、尙功利主義者を以て自任し、ウォーウェル博士の功利主義の批判を再批判し、功利主義擁護を試みてゐる、だが若し彼れの如く人間の成長を目的とするならば既に功利主義者ではない、何が故に舊態依然として、功利主義に執着する必要があるのか。理想主義と功利主義とを左右に眺めて、情緖纏綿として何れからも去り難きことが、彼れの道德哲學に醜き混亂を露出させてゐる。進んで人間觀に轉ずると、既に快樂苦痛の必然の衝動

の支配を脱却して、善その事の爲に善を爲すと云ふ欲求の存在することを承認した點に於て、快樂主義を脱して理想主義を採つてゐる。それにも拘はらず、彼は人間の内部に利己的のものと利他的のものとが、漫然として對立することに放任して二元的說明に了つた。固より通俗の說明としては、利己と利他とが内心に於て對立し抗爭すると云ふだけで充分である。然し嚴密に云へば、此の場合全く沒交渉の二つの分子が漫然として併立してゐるのではない。理性の作用する利他的欲求を認めながら、他方理性の毫も作用しない利己的欲求の存在することはありえない。かかる場合の利己的欲求は既に通俗の意味に於ける利己心ではない。理性の作用を受け理性の上に利他心と併存する利己心である。一線の路上に兩者を統一し、漫然たる二元的存在を克服することが爲されねばならなかつた。若しそれ自由と必然との調和に苦心したことは、問題を取り上げただけで既に正當である。だが自由なる意志を徒に境遇に追ひ込むことによつて、此の問題は解決されはしない。抑々必然とは何か、いかにして因果必然の關係は成立するか、を根本的に檢討することから始めねばならない。必然の關係も亦自我の所產である。自我の所產たる必然の關係は、自我自體に適用しえない、故に自我は自由でなければならないと云ふ觀念論的認識論を採ることのみが、自由と必然との問題を解決しうる。然るに彼は認識論に於て感覺論を清算しえなかつた。その限りに於て自由と必然との關係は、依然として彼にとつて夢魔でなければならない。それでは彼は感覺論に於て貫徹しえたかと云ふに、究局に於て自己の弱味を告白して、觀念論を仰望せねばならなかつた。

感覺論的認識論は、啻に認識自體に於ける誤謬たるのみならず、その歸結は彼を自ら意識せざる結果にまで驅り立てるだらう、感覺論は一切の認識を感覺に歸する、だが一般的概念に相當する感覺は存在しないから、感覺論から一般的概念は有りえない、それならば一般的概念を必要とする科學は成立しない。又認識が感覺と云ふ經驗から成立するなら、經驗がいかに集積しても分量の增加に止まつて、それから必然と云ふ斷定は成立しない。それなら科學には蓋然性があるだけで必然性はありえない。かくてミルが終始努力した社會科學も自然科學も崩壞する。又感覺論に於ては認識の眞僞を判斷する基準が成立しない、何故なれば眞といふ概念に相當する感覺はありえないからである。それならば自然主義の哲學が眞理だと主張する根據を失ひ、理想主義が誤謬だと反對する根據も失はれ、自己自身の破滅となる。同じ說明によつて感覺論からは善惡を判斷する基準が成立しないから、道德哲學の成立の根據を失ひ、實踐を基礎付けえなくなる。かくして社會改革の爲に必要だと云ふ根據で自然主義の哲學を選んだのに、社會改革それ自體の基礎が崩壞すれば、自然主義の哲學を選擇した論據も失はれ、自然主義は宙空に迷ふだらう。

ミルは自然主義は十八世紀の哲學であり、理想主義は十九世紀の哲學であり、前者に對する反動であるとして、何れも眞理の盾の一面を代表する、その故に盾の兩面が必要だと云ひ、自然主義と理想主義との双方を採らうとした。だが先天的原理を認める理想主義と、それを否定する自然主義とは互に對立し矛盾し抗爭する哲學であつて、盾の兩面として併立さるべきものではない。一脚を自然主義に他脚を理想主義に置き、何れをも捨てえなかつた彼は結局過渡的思想家であつた。若し自然主義を採ることが上述の如き歸結に到達するならば、此の歸結を

甘受して自然主義に執着するか、此の歸結を甘受しえないなら、決然として自然主義を捨てるの外はない。そして理想主義に一路邁進するのみである。自然主義は既に彼自身により矛盾を暴露し行詰りに逢着した、それなら殘された路は理想主義あるのみである。かくてベンサムはミルにより補完されなかつた。こゝに於てトーマス・ヒル・グリーンの登場が、思想史上必至の運命となる。

第三篇　トーマス・ヒル・グリーン

（一）はしがき

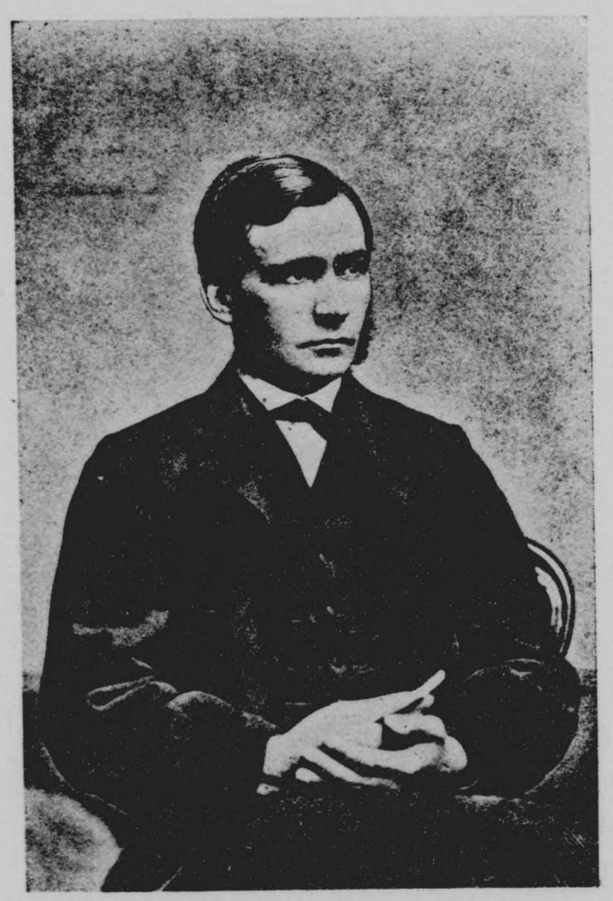
一八七五年グリーンは云つた、今や年齡廿五歲未滿の青年は時代錯誤のミル、スペンサーを拋つて、カント、ヘーゲルを繙かざるべからずと。此の年を以て英國に理想主義運動が始まつたと云はれてゐる。

その以前約半世紀英國思想界を支配したベンサム、ミル等の自然主義（經驗主義）の哲學と、自由放任主義の社會思想とに更替して、一九一〇年代に至るまで約三十餘年間、思想界を風靡したのは、理想主義の哲學と之を基礎とした社會改良主義の社會思想とであつた。英國理想主義運動の發祥地はオックスフォード大學である。此の大學――過去に於てジョン及びチャールスのウェスレー兄弟のメゾヂスト教會運動、ヘンリー・ニューマンを中心としたオックスフォード高教會運動の策源地であつた――にトーマス・ヒル・グリーン（Thomas Hill Green）とエドワード・ケヤード（Edward Caird）とは成長し、やがてグリーンは同大學に於て、ケヤードは兄ジョン・ケヤードと共にグラスゴー大學に於て、一大思想運動を起し、その門弟として秀才續々として輩出し、英國本國

及び植民地の大學の教壇にして、此の學派の教授によつて占められざるはないと云はれ、その影響は米國に及んで、ハーバード、エール等の主要な諸大學も亦此の派の中心地となつた。筆者は數年運動の首領グリーンの思想體系を研究し、此の運動に多分の關心を持つてゐたので、一九二三年から二四年にかけて英國に留學した時、曾てグリーンの門弟たりし哲學界の元老を訪問して、運動擡頭當時の模樣を尋ねたら、此の運動はあらゆるものを燒き盡さずんば止まざるほどの物凄い勢を持つてゐたといふ。

だが英國理想主義運動は單に思想界の運動ではなかつた。今までベンサム、ミルの功利主義を信條としてゐた英國自由黨に浸透して、當時進退兩難に窮してゐた自由黨に起死回生の妙藥となり、新たに黨の往くべき方向を指導した。一八九一年ニューカッスル・オン・タインに開かれた黨の例年大會は、自由黨にとつて劃期的の大會であつたが、その時から自由黨は明確に過去の自由放任主義と絶緣し、社會改良的立法を自己の課題とするやうになつた。一九〇五年末に成立した自由黨內閣がいかに大規模の社會政策を實施したかは周知の如くであるが、その源はニューカッスル・オン・タインの大會にあり、更にグリーン等の理想主義の影響にある。人は今に至るも自由黨の指導原理はグリーンの思想であると云ふ。ベンサム、ミルの功利主義が空に浮ぶ單なる思想でなかつたやうに、グリーンの理想主義も亦政治界にその威力を及ぼして、前世紀後半の英國の社會を決定したのであつた。

自然主義と理想主義、之は哲學界の陣營を分つ二大體系である。人類の思想史を回顧すると、此の二大潮流が

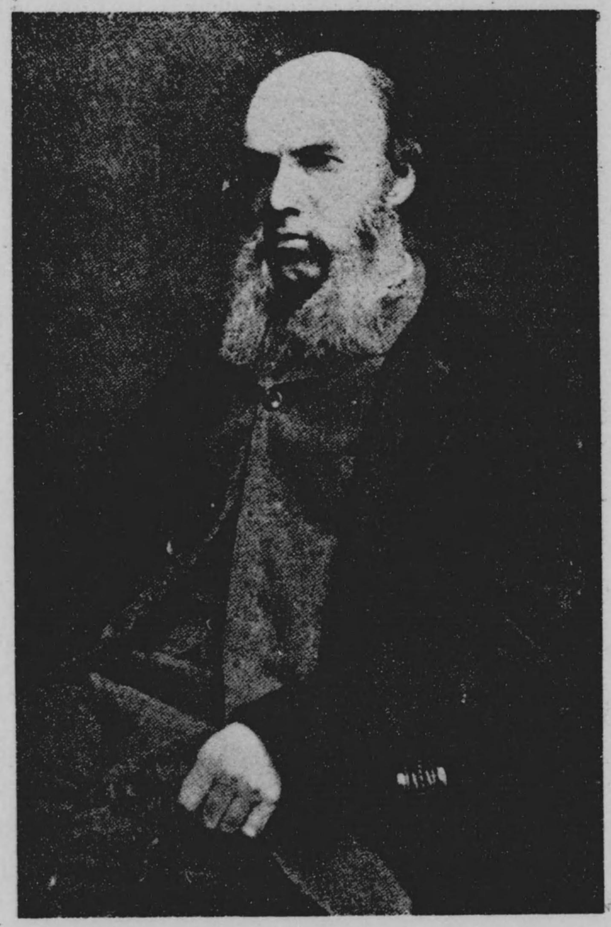


トーマス・ヒル・グリーン

常に一波一瀾を起して去來してゐたことを見出す。古代希臘に於ける詭辯學派とソクラテス、プラトー、アリストートルとの對立、ギリシア末期に於けるエピキュリアン派とストイック派のそれ、中世の理想主義に對する近世初期のホッブス等の自然主義、それに對立するケムブリッヂ・プラトーニスト、その後の佛蘭西革命に至る啓蒙哲學に對するカントを以て始まりヘーゲルに至る獨逸理想主義、ヘーゲル死後に於ける唯物論に對する新カント派、ベンサムを代表者としてミルを過渡的人物とする功利主義と、今吾々が語りつゝあるグリーン等の理想主義。若し吾々が起つて高處から、人類思想發展の跡を俯瞰するならば、自然主義と理想主義とは或は經となり或は緯となり、人類思想の布を織りなしてゐることを見出すであらう。

それでは過去永きに亙つて去來した理想主義の中に於て、十九世紀後半のグリーン等の英國理想主義はいかなる特異性を持つのであらうか。私はそれを次の三點に求めることが出來ると思ふ。第一は此の理想主義に先だつ自然主義が、力强大にして期間永きに亙つた、從つて之に次で現はれた理想主義は規模の雄大さに於て、從來のそれに比して群を拔いてゐることである。すべて一つの思想は、それに對立するその前の思想によつて影響されるものである。曾てエドワード・ケヤードはプラトー及びアリストートルの思想が近代哲學に比して缺ける所のあるのは、彼等に先だつ詭辯學派の力の弱かりしことに在ると云つたが、カントの思想が一層大規模であつたのは、近世以來の啓蒙思想の力の强かつた爲である。英國理想主義の場合には、ベーコン、ホッブス、ロック以來の啓蒙思想のみならず、ベンサム、ミルの功利主義と、コントの實證主義とダアウィン、スペンサーの進化論と

が附け加はり、いかなる理想主義もかほどの規模の大きい自然主義に對抗したことはなかつた。對立物に對應しそれを克服し止揚すべき理想主義も亦、その內容が複雜にして規模大ならざるをえなかつた。第二に英國理想主義は本體論認識論から道德哲學社會哲學、更に社會思想に至るまでを網羅し、一切が渾然たる體系を構成し最高原理から末梢に至るまで、一筋の金線を以て貫徹されてゐる。プラトー、アリストートルにも社會哲學がある。然し彼等は當面の社會に適用した社會思想を缺いてゐる。カント、フィヒテ、ヘーゲルも亦社會哲學を持つが、社會思想に於ては充分ではない。英國理想主義者は哲學を持つのみならず、その哲學を眼前の社會にいかに適用して、個々の立法に具體化すべきかをも教へた。之はベンサム、ミルの功利主義がかかる實際的のものであつただけ、之に對立した理想主義が反對派の特質を自らも抱擁する必要があつた爲であらう。然しそれよりも有力な理由は彼等が始めより社會改造を念とする實際的情熱を所有し、その情熱に適應する思想を求めて理想主義に到達したと云ふことにあらう。ウィンデルバンドはプラトーを評して、彼は決して冷靜な學究とか無心の思想家の類ではない。彼は眞理を實現せんが爲に眞理を知らんと欲する人々の一人であると云つたが、此の言は正にグリーン等にその儘に妥當する。第三に英國理想主義が進步的であつたことである。前篇でミルが理想主義に反對する理由を述べたが、先天的な從つて普遍永久の原理を認める理想主義は、動もすればある時ある所と云ふ特殊に關心が薄い爲に、當面の社會狀態に對して超然として沈默を守ることが多い。之は自然主義が特殊のみを重要視して普遍を否定する爲に、その後に現はれる理想主義は普遍を肯定するに急にして、その餘に力が及ばないと云



エドワード・ケヤード

ふことなので、理想主義はその本質上當面の社會に冷淡であるべき必要性はない。然し沈默は往々にして結果に於て保守的の役割を演ずる。之が從來理想主義と保守主義とが聯想され、ミルをして理想主義に反抗させた理由であつた。然るにグリーン等は前述の如くに社會の現狀に就て積極的の關心を持ち、而も啻に保守主義に陷らなかつたのみならず、進歩主義でさへあつた。マーク・パチソンはその「追憶錄」(Mark Pattison: Memoirs,1885.)に於て、先天的哲學が急進主義者グリーンによつて唱へられたことを驚愕したが、英國理想主義者は勞働立法に肯定の論據を提供し勞働者教育に先鞭をつけ、國民教育と普通選擧とを叫び、當時に於て最も急進的であつたのみならず、後に理想主義は社會主義と結合して、現勞働黨の指導原理となり、唯物辯證法を以て立つマルクスの社會主義と對立して、理想主義を以て立つ英國社會主義は、世界の社會主義界を二大別してゐるのである。要するに理想主義と保守主義とは決して必然的に結合するものでないと云ふことは、英國理想主義が好個の證明を提供してゐると思ふ。

こゝまで英國理想主義の特異性を述べて來ると、讀者は直に問題を出すかも知れない。英國理想主義と獨逸新カント派の理想主義とは、どの點に於て差異があるかと。一八六五年オットー・リーブマン(Otto Liebmann)は「カントとその亞流」(Kant und die Epigonen.)を公にして、各章の末尾に「かくて吾人はカントに返らざるべからず」と唱へ、翌年、アルベルト・ランゲ(F. Albert Lange)は「唯物論史」(Geschichte des Materialismus.)を著はして、存在と價値とを區別した。爾來コーヘン、ナトルプを中心とするマールブルヒ學派と、ウィンデル

バンド、リッカートを中心とする西南學派とは、併せて新カント派運動を起し理想主義を標榜して自然主義に對抗した。英國理想主義者と獨逸の新カント派とは、理想主義を採ることに於てその揆を一にするが、兩者の間には何等の連絡なく互に獨立して勃興し、その間には無視すべからざる次の如き差異がある。之を明かにすることは、英國理想主義の本質を明かにするに役立つであらう。

元來カントの業績は二つの方面に分ちうる。即ち認識成立の根據を檢討して、その限界を明かにして、一は前時代の獨斷的の形而上學を排擊すると共に、認識の客觀妥當性を確立して、正に崩壞せんとする科學を基礎付けた。此の點に於てカントは反形而上學的であり、又自然科學の救濟者でもある。所が認識の限界を明かにして、道德、藝術、信仰等に科學的認識の及ぶべからざることを說いて、こゝに必然性を脫却する自由なる世界を確立させた。此の點に於ては反科學的であり、又從來と異る立場に於ての形而上學成立の基礎を据ゑたとも云ひうる。カント以後フィヒテ、シェリング、ヘーゲルへの發展は、カントにより排擊された形而上學を、いかに再び別の立場に於て再興するかの跡に外ならない。その發展はヘーゲルに至つて頂點に達し、大規模な形而上學的體系が建設された。所がヘーゲルの哲學體系の中には自然哲學を包含しその部分は自然科學の發達によつて暴露さるべき弱性を持つてゐた。更にヘーゲルの相對的價値觀は一轉して沒價値的見方に移る危險性を包含してゐた。一八三一年のヘーゲルの沒後、自然科學が發達してヘーゲルの自然哲學が破綻を招くや、局部の破綻は直にヘーゲルの全哲學の不信となり、ヘーゲルの相對的價値觀は自然科學と峻嚴に對立する譯でないから、自然科學的見方を抑止する作用を營むことが出來ない。かくして理想主義の沒落と共に、自然主義――フェヒナー、ヘッケル、フォイエルバッハ、マルクス、エンゲルス等を含む――は獨逸思想界を風靡したのであつた。此の時代の特徵は、反理想主義である中でも、特に反ヘーゲルと反形而上學とに重點を置いてゐた。かかる自然主義に對立して「カントに返れ」と叫んで起つた新カント派の運動は、自然主義に反對する理想主義を揭げたが、反ヘーゲルと反形而上學と云ふ點に於ては、當時の自然主義から傳統を繼承した。彼等は嚴格にカントとヘーゲルとを對立させ、新カント派とはヘーゲルに對立してカントを復興させることであり、形而上學を排擊するカントを喚起することであつた。更にカントのいかなる部分を復興させるのかと云へば、カントの自然科學を崩壞から救助せんとするあの部分である。いかにコーヘンやナトルプやウィンデルバンドまでが、自然科學を高く評價したであらう、從つて復活したのは主としてカントの認識論であつて、理想主義の全體系ではない。カントは前述したやうに、一面に於て科學の基礎付け者であると共に、他面に於て科學の限界を宣告して、道德藝術宗教への不當な侵入を排擊したのである。新カント派は後者よりも前者に重要さを置いた。從つて新カント派は認識論を中心として、たとへ道德哲學社會哲學に及ぼうとも、社會思想には及びえなかつた。遙かに後にフォアレンダー(Karl Vorländer)やマックス・アドラー(Max Adler)がマルクス主義の影響を受けて、或はカントの道德哲學とマルクスの社會主義とを結合し、或はカントの認識論とマルクスの社會主義とを調和しようとしたが、何れも木に竹を接いだやうなもので、一元性を以て全體系を貫徹することは出來なかつた。之を要するに獨逸新カント派の特徵は、反へ

ーゲル、反形而上學、自然科學への同情、認識論の重要視、網羅的な體系の缺如と云ふことにある。

英國理想主義は新カント派の理想主義とは顯著な對照を爲してゐる。次項で語るやうに、一八七〇年代の英國が要求したこと、此の要求に適應した理想主義の課題は轉換期に瀕した社會の動向を確立することであり、道德藝術信仰が科學の侵入によつてその存在を脅威されたのを、いかにその存在を肯定するかであり、更に崩壞に瀕した科學をば狂瀾を既倒に回すことであつた。從つて彼等が最も必要とする所は、單に認識論のみではない。道德哲學社會哲學から社會思想に及ぶ渾然たる全體系である。よし認識論だけの範圍に於ても、科學を基礎付ける認識論の部分のみならず、科學の限界を宣告する認識論の部分を重要視せざるをえない。こゝに於て英國理想主義者が牽引されるのは、カントのみならずヘーゲルであり、認識論のみならず形而上學である。之が新カント派の反ヘーゲル、反形而上學と異る點である。彼等は獨逸に於けるが如く、カントとヘーゲルとを反撥的對蹠的の地位に置かず、カントの立場に於て自己を發展せしめたのがヘーゲルであると解し、カントとヘーゲルとを發展の一線に置き唯その段階を異にするのみと考へた。獨逸に於て最近カントに對立してヘーゲル復興の聲があつたが、英國では同時にカントとヘーゲルを經過したのであつた。かかる短期間にカントよりヘーゲルへの展開を經過したのは、伊太利の哲學史家ルッギエロを驚嘆せしめたのであつた（Guido De Ruggiero: Modern Philosophy, English translation, 1921. p. 261.）。然し英國理想主義は單にカントとヘーゲルとを輸入し之に追隨したのではない。いかに彼等は此の二者と異り、創見を現はしたかは、本文の次々が語るであらう。

前世紀の後半から今世紀にかけて英國を支配した理想主義は、凡そ理想主義の陣營に於てかかる特異の傾向を持つ、此の派の中心人物トーマス・ヒル・グリーンの風貌と思想體系とは、思想する後進にとつて充分の興味と關心とに値するだらう。

（二）時代の要求

一八七三年は英國經濟史上の轉機である。一八四六年の穀物條例廢止を以て始まる自由貿易により、爾來躍進を續けて來た英國の輸出貿易は、此の年を以て俄然として停止し、七九年に至り下落の最低點に達した。その原因は色々あるが、最も重要なことは獨逸米國と云ふ競爭國が國際戰に現はれ、何れも保護貿易主義を採つて英國品の輸入を防止したからであつた。七三年はウィーンとフランクフルトとから始まりやがて全世界を震撼した大恐慌の年であるが、此の恐慌が英國を襲つた程度は他國に比して小さかつた。若し單に此の年が恐慌の年と云ふだけの事なれば、やがて好景氣に變化する景氣變動の一幕だと云ふことになる。然し此の年は英國にとつて國際貿易上の地位が一轉機に到達したと云ふ點に於て、特筆さるべき年であつた。今まで自由放任主義は原則として採られて來た。たとへ勞働法規は制定されたとしても、まだ自由放任主義の例外として說明されて、資本家階級のみならず、勞働者階級も亦資本主義の埒內に於て滿足し、敢て資本主義自體を問題とすることはなかつた。然る

に七三年に英國の貿易が停止點に到達し、回復の望が前途に考へられなくなつて、賃銀が低落し失業が增加するに及び、始めて資本主義自體が批判の對象となり、一方では遙に後に資本主義が社會主義の對立を惹き起し、他方では外國が保護政策を採る時に英國獨り自由貿易を續ける必要がないと云ふ意見が現はれ、所謂「自由なる貿易」（Free Trade）に代へるに「公平なる貿易」（Fair Trade）を以てせよと云ふことが唱へられた。此の說が後一轉して、外國に對しては保護政策を採り、英領植民地と本國との間には自由貿易を行ひ、兩者の關係を密接にしようと云ふ帝國主義にまで發展した。

資本主義が批判の俎上に上つた時に、社會主義と云ふ對案が現はれたのは少し後のことである。先づ始めに現はれたのは資本主義の否定ではなく、その埒內に於て勞働者階級の幸福を圖らうと云ふことであつて、結局社會改良主義に歸着するのであるが、從來實施して來た社會政策は、一つ一つ唯孤立的に濟し崩しに實施したので、一定の社會改良主義と云ふ原理の上に立つて、それに基づいた社會政策ではなかつた。今や始めて原理は要求されるに至つた。之を以て資本主義の自由放任主義に代置さるべき主義が要請されるに至つたのである。從來保守黨と對立して進步的政黨として任じて來た自由黨は、自由放任主義を採ることを標榜して、之が進步的の原理と考へて來た。所が勞働問題なるものが現出するや、保守黨は自由放任主義に囚はれる因緣がないから、勞働法規制定すべしと云ふ意見を唱へることが出來た。又之が自由黨に屬する生產資本家を攻擊する恰好の武器でもあり、地主黨たる保守黨にとつて自らに何の害なく敵を打つことが出來ると云ふ政黨戰術上誠に有利であつた。保守黨が馳突自在の地位に在るに反して、自由黨は自由放任主義の原理に囚はれて、勞働法規の制定に反對せざるをえない、之が勞働者階級の憤慨を招くが爲に黨の戰術上は不利である。若し又勞働者の爲に勞働立法に贊成すれば、多年主張して來た自由放任主義の原理に矛盾するを如何せん。進まんとせば原理を拋棄し、退かんとせば、勞働者に對する同情心に背き、彼等の不興を招かざるをえない。かくて自由黨は進退維谷まると云ふ窮境に陷つた。自由放任主義は飽くまでも固持するに値するか、進步的政黨の往くべき路は奈邊にあるか、抑々又勞働立法と自由主義とは必然に矛盾し對立するものなのか、之等一聯の問題に明瞭な答解が、自由黨にとつて待望されてゐた。

此の待望に副はんが爲に現はれたのが、一八五九年のジョン・スチュアート・ミルの「自由論」であつた。之によつて他人にも關係する行爲は、絕對には自由なることを得ないと云はれ、自由主義の代表者によつて、自由の限界は宣告された。之は確かに自由黨にとつて蘇生の活藥であつた、だが前篇で述べたやうに「自由論」はそれ自身に於て矛盾を含み論旨一貫を缺くのみならず、その中の理想主義的立場は完全に從來の功利主義から離脫するに至らないで、遂に過渡的著作たることの弱點を隱蔽することは出來なかつた。かくして「自由論」に次で、之に代はるべき著作が待望された。此の渴望を滿たす爲に現はれたのが、グリーンの「自由主義的立法と契約自由」と云ふ劃期的論文であつた。

だが當時の課題は資本主義の全部的肯定かその改造かと云ふ社會思想上の選擇だけではなかつた。更により根

本的な課題があつた。ロック、ヒュームからベンサム、ミルに至るまで、自然科學に使用された因果關係を追窮する方法はあらゆる方面に適用され、一切の現象はすべて因果必然の法則に支配され、自由と稱されるものの存在する餘地がないと考へられた。所が吾々に善か惡か美か醜かの問題があり、神に對する信仰の念がある。吾々は善を爲したる時に滿足し惡を爲した時に悔恨し懺悔する。然し若し因果必然の關係のみあつて、凡そ自由と云ふことの餘地がないとすれば、道德を許容する餘地がない。何故ならば道德は選擇の自由を前提とするからである。同一のことは美醜を問題とする藝術に就ても起るであらう。又若し一切の現象は必ず原因を有するとすれば、神の存在は抹殺されざるをえまい。何故なれば神とは一切の原因にして無條件的無制約的絶對的終局的のものだからであり、それ自身に先行する原因を認めることは、神の本質と矛盾するからである。こゝに於て科學と道德藝術宗教とは對立の地位に置かれ、若し科學を容認すれば道德等を抹殺せざるをえず、然し之は日常生活の要求に矛盾する。若し道德等を容認すれば科學を否定せざるをえず、然し之は近世科學の擧げた一切の功績を抹殺することとなり、到底堪へることは出來ない。かくして科學か道德かと云ふ二者擇一の窮境に陷つて、人はその去就に迷つた。抑々科學と道德等とは、必然に對立し矛盾し反撥するものなのか、或は各々が安住する領域を有してその一を認めるも他を否定せずして濟みうることなのか、之を解決することは當時の思想する人々にとつて、焦眉の急を要する重大な課題であつた。所が課題はまだ之を以て盡きてはゐなかつた。以上の科學か道德かと云ふ對立は、科學の成立を當然の事と前提してのことであるが、少しく根本的に思索するものにとつては、科學そのものが、崩壞の危機に瀕してゐたのである。此のことの詳述は後の項に讓らねばならないが、近世當初自然科學の研究が勃興し、華々しい業績を擧げるや、人は科學的方法卽ち因果關係を追窮することを、單に自然に對してのみならず、人間及び社會に對しても適用せんとして、こゝに自然主義なる哲學的立場が生れたことは、ベンサムの條で述べた通りである。當時科學卽ち普遍妥當の法則の體系として科學が成立することに關しては何の疑問を挿まなかつた。然るにロックが「人間悟性論」に於て先づ科學的方法を認識に適用して、いかにして認識するかの因果關係を辿ることを試みた。然るに「一般概念」とか「必然性」「因果關係」とかが、いかにして成立するかの說明に困窮し、科學の成立を當然の事として前提して、科學的方法を認識論に於て適用した結果は、却て科學の成立に疑問を生ぜざるをえなくなつた。後ロックにより挿まれた疑惑は、ヒュームの「人生論」に於て確認され、科學の中の因果必然の法則は成立しえないこととなり、科學的方法を適用した結果が、逆に科學自體の崩壞と云ふことに到達した。之がヒュームの懷疑論と云はれるものである。尤もヒュームは書齋に於て瞑想思索する時は科學の成立を否定せざるをえないが、一度街頭に出づるや何人も科學の成立を疑はない。此の矛盾を如何せんとの惱みを持つたが、若し科學的方法を認識論に適用するならば、論理の歸結は科學成立の否定に到達せざるをえないことは、ヒュームにより明かにされた。若しヒュームの如く論理的に歸結を辿らざるものか、或はその歸結に達することを回避して、半途彷徨するものは格別であるが、その頭腦が論理的明確さを持つか、その歸結を回避せざる良心の大膽さを有する限り、遂に此の歸結に直面せざるをえない。之がヒュームの「人生

論」の投じた哲學界の爆彈であつた。多數の人はロックを知らずヒュームを知らない。從つて彼等が齎らした疑惑を想ひ浮べない。その故に科學的方法を喋々する、然し一度ロックやヒュームを熟讀するならば、出發の前提を彼等と共にする限り、その結論を回避することは許されない。だが此の歸結に直面して、科學の崩壞を甘受するか、之を甘受しえないとすれば、いかにせば此の歸結に到達せずして濟みうるかを苦しみ惱んだ先人が、哲學界に一人あつた、それがカントであつた。カントの認識論——卽ち「純粹理性批判」に現はれた觀念論的認識論こそ、科學の崩壞を救はんとする回天の偉業であつた。自然主義より科學が崩壞し、理想主義よりして科學は崩壞より救濟される。ベンサム、ミルによれば却て科學は崩壞する、だが然し人は此の事に思ひも及ぶことなしに、自然主義の哲學と科學の成立とを結合して怪しまない。最も重大な課題がこゝにあつた。自然主義か科學の崩壞か、理想主義か科學の成立か、此の二者擇一の問題は嚴密に思索する者の前に置かれた。

之を要するに資本主義か社會改良主義か、科學か道德か、自然主義か科學の崩壞か、之を解決すべく英國理想主義の擡頭が待望されたのであつた。

(三) 思想界の狀勢

グリーンは一八三六年に生れたから、此の人が思想的に成長した時は、五十年代と六十年代とであるが、此の時分の英國思想界を支配してゐたのは、ベンサム、ミルの思想であつた。之に就ては前に度々說明したから、こゝで又繰返す必要はあるまい。然しベンサム、ミルだけが當時の自然主義を獨占してゐたのではなかつた。佛蘭西のオーギュスト・コントを英國に紹介したのは主としてミルの功績であつたが、コントを祖述する一派があつて、之が「英國實證主義者」と呼ばれ、その中にはフレデリック・ハリソン、コングリーブ、ビースレー、ルウキース、ブリッヂス等の人々が屬して、思想界の一方を占領してゐた。コントは個人に對立して社會を發見したと云ふ點では、ベンサム、ミル等の個人主義と異るとも云へるが、認識可能の世界を現象に限局し、吾々の任務は現象間の因果關係を辿る科學にのみ存すると云つて、哲學の存在を否定した。此の點に於て自然主義と同一の戰線にある譯である。まだ此の外に進化論者がある。一八五九年に出たダアウィンの「種の起源」は、單に生物學界を震撼させただけではなく、直に人間及び社會に對しても進化と云ふ思想が適用され、スペンサー、ルウキース、ハックスレー等によつて、從來自然主義によつて說明されえなかつた點が、進化とか遺傳とかで補足され、自然主義はこゝに一大援軍を惠まれることとなつた。ベンサム、ミルを以てしても自然主義の陣營は鞏固であつた。況んや之に實證主義と進化論とが加はつた。若しこゝに自然主義に對抗せんとするものがあつたとしたら、その人は餘りにも敵陣の巨大なことに恐怖を抱いたであらう。だが若し新思想の規模は現存思想の規模に正比例するとするならば、グリーン、ケヤードは正に天運に惠まれてゐたのであつた。對立し克服し止揚すべき自然主義が巨大であつただけ、英國の理想主義はその體系が大規模に又網羅的ならざるをえなかつたからである。

すべて新興思想が擡頭する前には、幾人かの先驅者がなければならないものである。新興思想の負擔者は、その青春の感受力の強い時に、之等の先驅者から影響を受けて、以て後年の思想の萠芽を開いて貰はなければならない。又その先驅者としても、その時の思想界では寂しい少數派として孤立してゐるのだから、せめて自己に共鳴して呉れるものがあるとすれば、まだ現存支配的思想に感染しないで、新らしいものを受け容れられる青年――次の世代の人々――に期待を抱く外はなからう。かうした理想主義の先驅者として、ヘンリー・ニューマン（Henry Newman）ジョン・グロート（John Grote）、フレデリック・フェリアー（Frederic Ferrier）等を擧げることも出來よう、然し之等は少し學究に偏する。たとへ著作としては纒まつた體系を爲してゐなくても、青年に影響するには差支ない、別に若者を魅了するものがあれば充分である。此の要求を滿たしたのが、カーライル、ラスキン、マシュー・アーノルドであつた。彼等はその文章に於て風丰に於てその教養に於て青年を牽引した。エドワード・ケヤードの後年の「文學哲學論文集」(Essays on Literature and Philosophy, 1892.) を讀むと、その中にカーライルに關する一文があるが、その中で、それ以來多くの事が起つた、然し先づ始めにカーライルによつて思想の歩みを始めない青年はなかつたと云つてゐるが、會々自らを語つてゐるものであらう。若い青年が思想し始める時に、何れに往くべきかと云ふ方向を與へて呉れる教師の影響は、いかに高く評價しても高きに過ぎることはありえない。たとへその後にその時受けたものだけでは物足りなくて、自らの手で組織化し體系化しなければならないとしても、西か東かの行路の分岐點に立つた青年に、理想主義への方向を指示したのが、之等の三人殊にカーライルであつた。

だが先師の方向付けは必要ではあるが、それだけで充分ではない。學窓を出でて實際界に活動する人々にはそれでも充分かも知れないが、學窓に殘つて思想界に生きんとするものにとつては、先師の與へた暗示を捉へて、之をより洗錬しより深く基礎付けを爲さねばならない、それには未來の體系を構成するが爲の、資料となるべき學の寶庫が開かれる必要がある。それではグリーン、ケヤードの爲に開かれた寶庫は何であつたらうか。それが希臘の思想と獨逸の思想とであつた。ソクラテス、プラトー、アリストートル、此の偉大なる三人は、詭辯學派に對抗して理想主義を確立した先人であつた。又カント、ヘーゲルは佛蘭西革命前の啓蒙哲學に對して、再び近世に於て理想主義を確立した先人であつた。此の希臘と獨逸との偉大な先人の思想は、たとへ理想主義を採るのでないものにも、苟くも思想するものに、深い示唆を與へるに相違ない。況んや彼等は時代に於て場所に於て異らうとも、何れも理想主義の戰列を布いた古將軍であつた。既に理想主義の洗禮を受けた若い學徒にとつて、彼等は就いて學ぶべき恰當の先師であつた。オックスフォードは中世以來、歐洲でも有數なプラトー、アリストートル研究の中心地であつた。だが十九世紀中頃の大學に於てプラトー、アリストートルは文學のテキストとして用ひられたが、思想の糧をそこから摘むものとしては教育されてゐなかつた。又哲學の講座は神學の講座と同一視されて、主として僧侶によつて占められてゐた。哲學の講壇からプラトー、アリストートルが語られることはなかつた。そこでグリーン、ケヤードを希臘の世界に導くには、特別の人がなければならなかつた。尤もカーラ

イルは獨逸思想の影響を受け、ラスキンはプラトーの研究者であり、アーノルドは希臘思想と獨逸思想との讃美者であつた。此の三人はそれ自身の思想を以て青年を動かしたのと同時に、青年の眼を希臘と獨逸とに注がせる媒介者でもあつた。然しベンジァミン・ジョウェット（Benjamin Jowett）あることによつて、グリーンとケヤードとは始めてプラトー、アリストートルに導かれ、更にカントとヘーゲルとに紹介されたのであつた。

ジョウェットはオックスフォード大學の希臘語の教授であつた。彼は始めて古典文學者としてでなしに、思想するものとして、希臘の哲人の門を敲いた。そして又同じ希臘哲學の研究者たるヘーゲルを知つた、そして又ヘーゲルを解するにはカントを通過せねばならないことを知つた。彼れのプラトーの「對話篇」五卷は、餘りにプラトーを通俗化したと云はれるが、プラトーを英譯し之に長文の序說を附けて、英國人をプラトーに親しませた功績は顯著であつた。彼は又行政的手腕と教育的能力とに惠まれてゐた。後に大學のベリオル・カレッヂのマスターとなつて、二十餘年間子弟の教化と經營の才能とを以て、ベリオルのジョウェットかジョウェットのベリオルかとまで云はれ、ベリオル・カレッヂの名聲を九鼎大呂の重きに置いたのであつた。彼はそれ自身に於て深い思想家ではなかつた、然し彼には青年學生をして自らも知らざる問題を意識せしめ、問題を解くべく人を刺戟し鞭撻し、更に問題解決の爲に就くべき先人の思想に導くことの能力に惠まれてゐた。而して之こそ正に教育家として缺くべからざる要件であつた。グリーン、ケヤード等のベリオル・カレッヂの秀才は、此の天成の教育家の下に於て、希臘思想への手懸りを與へられ、次で希臘思想研究の第一人者としてのヘーゲルに導かれたのであつた。

マシュー・アーノルドの令嬢として、又閨秀作家として有名なハンフリー・ウォード夫人（Mrs. Humphry Ward）の後年語る所によると、當時のオックスフォードには三派の傾向があつたさうである。一はリッドンに代表された嚴格な宗教信者であり、二はマーク・パチソンに代表された科學者であり、學問は宗教の爲にも政治の爲にも存するのではない、學問は學問自身の爲に存するのであると云ふ。三はジョウェットに代表された人格主義者社會改革者であつて、人生の最高の目的を人格の完成に置き、之が爲に宗教も科學も役立つであらうとし、人格の完成は必然にその內容として同胞の爲に社會制度の改革に往かざるをえないと云ふ。リッドンから見れば、パチソンの科學至上主義も、ジョウェットの人格主義社會改革主義も、異端であり邪道であつた。パチソンから見れば、リッドンは固陋頑迷であり、ジョウェットは俗物であり科學を冒瀆するものであつた。ウォード夫人の云ふ所によると、時の經過は、此の三派の勝敗を決定し、ジョウェットが遂にオックスフォードを支配したのであるが、リッドンとパチソンとジョウェットとの此の三派の鼎立は、當時のオックスフォードのみならず、今でも到る所に見受けられる對立ではあるまいか。グリーンはかゝる雰圍氣のオックスフォードに於て、ジョウェットの人格主義と、それから必然に歸結する社會への關心とを、注ぎ込まれたのであつた。

プラトー、アリストートルの寶庫の鍵が開かれたとしても、カント、ヘーゲルへの連鎖は、ジョウェットだけでは不充分であつた。その時一八六五年ジェームス・ハチソン・スターリング（James Hutchison Stirling）の「ヘーゲルの祕密」(The Secret of Hegel) が刊行されたことは、英國に於ける獨逸哲學の研究にとつて、誠に

劃期的とも云ふべきことであつた。スターリングは元來は醫師であつたが、啓蒙哲學の消極的破壞的なことに常に不滿を感じてゐた。そしてヘーゲルが啓蒙哲學の克服者であることを傳へ聞いて、自ら大陸に渡つてヘーゲルの研究に沒頭したのであつた。彼によると、啓蒙哲學の特色は、「個人の判斷」を重要視したことに在るが、實際に重んぜられたのは「個人」であつて、「判斷」ではなかつた。然し眞に重要なのは、「個人」よりもいかに「判斷」すべきかに在る。カントは啓蒙哲學に對して抗辯した一人であるが、尙啓蒙時代の傳統を脫却することが出來なかつた、之を果したのはヘーゲルである、然しヘーゲルを解するにはカントの關門を通過することが必要だとして、カントとフィヒテを經て始めてヘーゲルに赴くべしと敎へた。彼れの「ヘーゲルの祕密」は、決して難解なヘーゲルの祕庫を開くことの役には立たなくて、難解なヘーゲルは之によつて却つて難解を加へたと云はれた。だが英國でヘーゲルに獨自の解釋を試みたのは彼を始めとし、英國に於て獨逸哲學への關心を喚起した功績は實に顯著であつた。當時獨逸のヘーゲリアンであつたローゼンクランツは、その著「國民的哲人としてのヘーゲル」(K. Rosenkranz: Hegel als Nationalphilosoph, 1870, SS. 295-296.) に於て、スターリングの業績を賞揚したのであつた。

青年グリーンはベンサム、ミル、コント、ダァウィン、スペンサー等の自然主義の支配橫行を眺めながら、カーライル、ラスキン、アーノルドから理想主義の眼を覺まされ、更にジョウェットを通して希臘の世界に、スターリングによつて獨逸の世界に、思慕すべく導かれた。往くべき方向は決定され、示唆を化して體系とするに必要な豐富な資料は與へられた。かくてカーライルが爲しえざりしこと、卽ち理想主義を渾然たる體系にまで構成することの準備は完成した。英國理想主義運動の首領の登場は、唯時間の問題であつた。こゝで私はグリーンの生立の記に移らう。

(四) 生立

トーマス・ヒル・グリーンは一八三六年四月七日ヨークシァ州のウェスト・ライヂング地方に生れた。母は生後一年に死んだので、彼は父親一人の手で育てられた、父は地方の牧師であつた。英國の哲學者の多くは、牧師の家庭から現はれたが、それは宗教が子供の頭の中に、罪とか來世とか神とかの問題を與へて、普通の子供よりも形而上的の思索を促すからであらう。グリーンは一八五〇年にラグビー校に入學したが、此の少年は決して優等生ではなかつた。彼は競爭心や優越慾で動かされることは、絕對に嫌ひなのであつた。然し後年彼を特徵付けた性格は、少年の當時に旣に現はれてゐた、卽ち精神的獨立性(メンタル・インデペンデンス)とも云ふべきもので、同友が無暗に讀書して亂雜に頭につめ込む時に、彼は自らの足の上に立ち、自らの頭で考へようとした。彼が好んで繙いた本は、カーライル、キングスレー、モーリス等のそれで、十六の時に友達と散步してゐる時、橋のことを話題として、吾々の各々は異る橋を見たのだと云つて、認識論で友達を驚かしたと云ふことである。

一八五四年彼はオックスフォード大學に來た。これで終生離るべからざる因緣が、彼とオックスフォードとの間に結ばれたのだが、彼は決して始めから多大の期待を抱いて來たのではなかつた。ラグビーに於けると同じやうに、學校や教師に望みをかけずに、一生懸命に勉强さへすればよいのだと云ふ積りであつた。精神的獨立性を保持して濫に周圍に雷同することを好まず、內に充分に能力を抱いてゐるに拘はらず、外に成績などでそれが現はれない學生は、何處にもあるものである。かうした學生は獨り放任して置くと、その能力が充分に伸びずに終り勝ちである。若し彼を認識し彼に愛を感ずる教師がゐるならば、彼は偏せずにすくすくと伸びるに違ひない。所がグリーンはラグビーでは不幸であつたが、オックスフォードでは幸運であつた、それは先生としてベンジャミン・ジョウェットとコニングトンとバーカーとの三人を持つことが出來たからであつた。

舊き英國大學、オックスフォードとケムブリッヂとに特異なのは寮生活（カレッヂライフ）である。こゝで學生は先生と先輩と同友と、共に臥し共に食ひ、共に讀み共に散步することが出來る。殊に羨ましいのは、個人教師（チューター）の教授制度である。多數の學生が大きな教室で講義を聽く外に、學生は各々個人教師に就て、差し向ひで教師と讀書し討論することが出來る。こゝに伸びんとする學生がゐて、伸ばすことの出來る教師がゐるならば、學生は唯智識をつめ込むのでなしに、自らの個性の上に立つて人自身が伸びるに違ひない。前に擧げた三人殊にジョウェットは、丁度個人教師として恰當の人で、その感化の下にグリーンは急速度に成長して往つた。殊にジョウェットによつて、プラトーとアリストートルに、又カントとヘーゲルとに導かれたことは、彼れの生涯を決定的に動かしたことであつた。

大學時代の彼が學外で愛讀した本は、ウァーヅウァース、カーライル、モーリス、フィヒテ等であつて、彼が最も嫌つた人物は、國內でバーマストン卿で國外でナポレオン三世であつた。前者は自由黨首領でありながら、常に進步的改革に反對であり民衆を壓迫したからで、後者はクーデターで帝位に卽き帝國主義に焦慮してゐるからであつた。彼れの最も好んだ政治家は、ジョン・ブライトとリチャード・コブデン、殊にブライトであつた。外國に對する國民の道德的責任を高調することに於て、民衆の自由を伸張する熱心さに於て、非敎會的の敬虔さに於て、その氣高いさうして煽動的でない雄辯に於て、ブライトはグリーンにとつて正に典型的の政治家であつた。大學學生の討論會で、ジョン・ブライトを禮讚する動議が提出された時に、之に贊成するものが僅二名であつたのを見て、彼は「かかる暗黑の狀態に在る此の大學に所屬することを恥辱とする」と憤然として叫んだと云ふ。それはブライトが英國の帝國主義的野心を詰責して、國民の反感を買つた時であつた。その時分學生グリーンの書いた論文に、「國民生活」「政治的理想主義」と云ふのがあるが、何れも社會制度を理想主義的に說明しつゝ、而もその理想主義に立脚して制度を改革すると云ふ、後年の彼れの思想的特徵は旣に片鱗を現はしてゐた。グリーンと同時代の學生であつたジェームス・ブライス（James Bryce）は、當時を追憶して次の如くに書いてゐる。

> グリーンの容貌は凡人と著しく異る所があつた。で彼を個人的に知らないものに到るまで、直に眼を止めると云ふ程であつた。彼の黑い濃い髮や、黑味を帶びた顏の色や眞黑の眉、一種特別なじつとした見方をする茶褐色をした窪んだ双眸は、ひとたび彼に逢ふたものには忘れることの出來ない印象を與へた。さうして之等と共にその容貌に嚴肅な所があり、

俗人と同じからざるうちに潜める勇氣を持つて居た。

一般の學生は假に云へば、風に吹かるゝ柳絮の如く、こちらで新しい思想に逢ひ、あちらで新らしい學說に逢ふと、それを取ることは取るが、それを今自分の考と如何やうにして調和すれば可いかと云ふ事を知らずにむやみに詰め込むのであつた。グリーンは既に荒筋とは云へ哲學の系統を作り人生を統一あらしめ、又完全ならしめんとする考を取つて居た。彼れの思想は青年時代から間に合はせ、又は散漫と云ふやうな點は少しも無かつた。…彼は內省的であつた。故に彼れの胸中には常にナチュラルマンとスピリチュアルマンとの爭があつた。此の心內二つの衝突は恰も聖書にある「羅馬人に與へた手紙」に寫されたやうであつた。

大學を卒業して間もなく、一八六一年十一月彼はベリオル・カレッヂのフェロー（Fellow）に選ばれた。此の地位は彼が永く切望して措かなかつたのであつた。かうして一方で講義をし個人教師をすると共に、他方に研究を續けることが出來た。けれどもフェローは必ずしも教授（プロフェッサー）を約束する地位ではない、現に彼が教授となるまでには十八年の時間を必要とした。從つて將來の職業問題は依然として彼れの解決すべき懸案であつた。六三年に彼は眞劍に職業を決定する必要に迫られた。その時彼れの前に現はれた候補が四つあつた。一は新聞雜誌記者となることであり、二は教育行政に携はること、三は牧師たること、四は大學教授たることであつた。結局彼は第四の職業に決定して、教授の地位の空くのを待つこととなつたが、大學の教授となる通常の人に起らないかうした各種の職業が、一度は彼れの候補として現はれたことに、グリーンの性格と能力とが窺はれる。卽ち新聞雜誌記者とならうとしたことは、彼が枯淡の學究に非ずして當時代の事に興味と關心を持つてゐることを示し、教育行政家は彼が教育制度を重要視したことを、又牧師とならうとしたことは、靈の救濟が最も貴いものだとしたことを示し、何れも彼れの理想主義的立場を物語り、大學の教授として學究とならうとしたことは、彼が個々の人を說教し教育するのでなしに、又時事問題に一時の論策を語るのでなしに、學と云ふ普遍妥當的の眞理となすべく、體系にまで建設する欲求と能力とを持つことを察知せしめる。かくして彼は徒に書齋にのみ籠る枯淡の哲人ではなかつた、ジャーナリストたらんとしたほどに、當代の問題に風馬牛たりえない實際的情熱があつた。又個々と人の魂の成長に參加しようとする人間的關心があつた。而も彼に特異なことは、學徒として卽ち學の建設を目的として決定し、その學の中に實際的情熱と人間的關心とを織込んで、理想主義的思想體系を構成したことに在る。

一八六八年雜誌「北英評論」(North British Review) に掲げられた論文「人生に關する當代流行の哲學」は、始めてベンサム、ミルの哲學を批判し、之に代はるべき哲學の建設を仰望したもので、彼自らの志向が何處にあるかを示したものとして、グリーンの思想史上に特記すべき勞作である。彼はベンサム、ミルの哲學を打破するの必要を感じ、その本源がロック、ヒュームにあることを考へて、之を丹念な研究の對象とし、一八七四年ヒュームの「人性論」を刊行するや、その批判的序文を卷頭に載せた。論理を辿る緻密さと、全篇を貫く高邁の識見とは、彼が既に大成の域に達したことを思はせるに充分であつた。彼れの名聲を哲學界に確立せしめたのは、此の序文であつた。以上の二篇に就ては次の項で語ることとしよう。

一八七〇年を中心とする十年間は、あらゆる意味でグリーンの油の乘つた時であつた。彼れの研究の進捗した

のは勿論、個人教師として又講師として、後年の理想主義運動の立役者を續々として養成したのは、丁度此の時分であつた。彼は決して雄辯家ではなかつた、その文章が難澁で讀み辛いのと同じやうに、彼れの講義も亦聽き辛かつたに違ひない。從つて彼は多數の學生を牽引する華やかな講義者ではなかつた。然し多數の學生と云ふものは、一時は周圍に集まつても、その結び付きは皮相であり淺薄なものである。之に反して既に成熟のある段階に達してゐて、充分に講義者の個性的特徴を認識し評價しうる學生は、最も適確にグリーンを把握することが出來た。此の場合に師弟の結合は、緊密的であり又永續的であつた。グリーンの影響感化は先づ之等の秀才に及び、次で彼等を通じて一般に普及したのであつた。人は此の一團の學生を稱して「物を全體的に見る集團」(a society for looking at things as a whole) と云つた。「全體的に見る」とは漠然としてはゐるが、又グリーンとその學風とを摑むでゐるとも云へる、此の學風が徐々として浸潤した時に、オックスフォードの教育に新しい生命が吹き込まれたのであつた。當時の彼に就て一友人は次の如くに語つてゐる。

グリーンの强味は、思索と分析と綜合との諸能力が、又それらの能力と性格の强さと確實さとが、常人に見うべからざるほど調和してゐたことに在る。彼は奇想天涯の着想の發見者ではなかつた。その傾向は結論を渾然たる全體に形成することに在る、そこには一つのことも殘りのものと孤立せず無關係ではなかつた。彼れの特異の個性は、適合した哲學の中に表現を求め而してそれを見出した。かくすることによつて個性は更に深められ、生涯の勞作の爲に强められた。その性格の力强さは、思索的の問題に立ち向つた時の徹底さに於て如實に現はれた。その性格は多血質と云ふのではない、寧ろ用心深く稍心配性ともいふべきものである、然しどこか犯し難き一個の風格を具へてゐた。人はその長所を持つと共に長所に必然に伴ふ缺點を持つものであるが、私は彼ほど長所の缺點を持たないものを知らない。彼は思索的であつた、然し決して夢想家ではない、常に事實を蒐集して實際的であつた。彼れの集中的傾向は性格の性急さを伴はない。彼れの抽象的思索に對する情熱は、事實に關する著しき正確さと調和し、又決して日常の義務を遂行するを妨ぐることにならなかつた。寧ろその反對に、彼れの丹念な抽象的研究は、實際問題を扱ふ時に妥當の心構へを爲さしむるかの如くであつた。寧ろそれこそが彼に忍耐心と貫徹心と問題の焦點を把握することと接した時の纖細さを與へたものであつた。

一八七〇年恩師ジョウェットは、ベリオル・カレッヂのマスターとなつた。グリーンも若し長命であつたなら、當然此の名譽の地位に就いたに違ひない。師の任務が重大となるにつれ、彼も師を助けてカレッヂの行政に參加するやうになつた。七一年一月彼は友人の妹シャーロット・サイモンヅと婚約し、間もなく結婚するに至つた。夫人は才色兼備の賢婦人として知られ、グリーンを助けて內助の功があつたのみでなく、外はオックスフォードの教育殊に女子教育の爲に盡瘁し、グリーンの歿後もトインビーの未亡人と共に、オックスフォードの誇りであつた。私は一九二四年に夫人を尋ねて、グリーンの生前のことを伺つたことがあつた、當時夫人は八十を越してゐたけれども、氣品ある美貌と記憶力の絕倫なことに、私は驚かされたのであつた。私は當時の訪問記を「在歐通信」に書いたことがある。惜しいことに一九三〇年九月八十七歳の高齢を以て逝かれた。

一八六八年多年の懸案であつた都市勞働者に選擧權を擴張する法案が、保守黨首領ヂスレーリーの暗中飛躍によつて成立するや、英國社會は一種の興奮に襲はれた。グリーンは固より自由主義者として此の法案に贊成であつた、そしてその一友人が代議士の候補者となつた時、彼は應援演說に參加したが、その演題は「勞働者階級

の狀況、その現在と將來」といふのであつた。ヂスレーリー內閣が仆れて第一次グラッドストーン內閣成るや、文部大臣フォアスターは國民教育法案を提出して遂に成立した、之で英國に義務教育制度が實現したので、之を最も喜んだのはグリーンであつた。彼は禁酒運動に熱心であつた爲、「全國禁酒同盟」の副會長に選ばれ、又オックスフォード市の參事會員に選擧された。多年大學と市とは確執が絶えなかつたが、彼によつて溝渠が埋められ、市側の議員はグリーンの人格に推服して措かなかつた。彼が市會で最も力を注いだのは、市の教育制度の完備であつた。かうして述べて來ると、彼は當然ウェストミンスター議院に列しさうに思へるが、彼れの健康が許さなかつたので、一度も代議士となることを考へたことはなかつた。彼に實際的關心と情熱とが有るに拘はらず、彼は結局學徒としての路を脫しなかつた、而してその豐富な關心と能力とは、彼れの學說の中に織り込まれたが、彼れの生活を分裂せしめ生涯を散漫ならしめなかつたことは、吾々が充分に銘記すべき點であらうと思ふ。

一八七八年彼は「オワイト道德哲學講座の教授」に任命された。フェローとなつてから十八年、夙に與へらるべき此の地位がかくも遲れたのは、その思想が急進的の爲に傳統が許さなかつたのであるといふ。教授として此の講座で講義したのは、主として道德哲學と社會哲學とであつた。永く貧困の故に個人教師をして充分に勉强出來なかつた彼に、漸く安易な生活と豐富な時間とが惠まれたに拘はらず、彼に殘された教授の地位は僅に四年であつた。元來虛弱であつた彼は六八年時分に消化不良神經衰弱不眠症に惱まされ、七九年八月には心臟が弱まり時々眩暈を感ずるやうになつた、此の時分に友人に宛てて次の手紙を書いたことがある。

晩年のグリーン未亡人

私は道德哲學に關する著述の準備として僅かな執筆を爲しつゝある。然し私が眞面目にそれを始めるや否や、私のしたいと思ふことをすることがいかに多くの時間を要し、いかばかり私がそれに耐へる力がないかを悟る。書きものをすることは今や、十年以前と比べると全く違つて來た。その當時は業績の可能性にもつと大きな見通しが眼の前に開けてゐた。そして私は問題解決の關鍵を把握したと思つてゐた、だが今やその鍵は私の思ふやうに開いては呉れない。然し私はこゝでもう一押しをしなければならない。さうでなければ何事をも爲さずして、私は此の世を去らねばならないだらう。

誠に衰へつゝある哲人の悲痛の言である。伊太利へ旅行などして療養に努めたが、大した効果は擧がらなかつた。彼は一冊も著書を作らなかつたが、晩年「倫理學序說」(Prolegomena to Ethics) のみは、出版の意圖を以て講義を訂正し、やがて二三十頁を殘すのみとなつたが、一八八二年三月十五日夜突如として臥床し、一週間の後危險な血毒の徵候が現はれ、廿五日の夜には數時間の餘命しかないことが宣告された。彼も意外に驚いたらしかつたが、直に死後の出版のことや學校の事務に就て遺言すべきことを果した。彼は平生愛誦して措かなかつた羅馬書第八章を讀ませたが、もう耳傾けることは餘程辛いらしかつた。意識不明の間に切りにアイルランド問題やブルガリアの政情に就て譫言を云つたが三月廿六日午前九時彼れの魂は遂に地上を去つた、齡僅に四十六である。

彼れの死を悲しむことに於て、オックスフォード市は大學に劣りはしなかつた。市は多年の市會への功績に酬いる爲に、選擧地たるジェリコー墓地に葬ることとした。市民の一人は曾て云つたことがある「グリーンと一時間を共にした後は、自分は優越な存在の影響の下に在つたと云ふことを常に感じ、人生に關してより高き理想を以て彼れの許を去つた」と。彼は今ジェリコー墓地に恩師ジョウェット盟友ケヤードと枕を並べて眠つてゐる。

かくして彼は外國の大學教授には珍らしい位短命にして仆れた。然しその講義によりその人格により周圍に及ぼした影響は巨大であつた。今二三の人の言葉を引用してみよう。ジョン・モーレー（John Morley）は彼より二年の年少で、後年の自由黨領袖であるが、「回顧錄」(Recollections, 1917. vol. I. pp. 24—25) の中で云ふ。

オックスフォードに於て、千八百六十年から八十年にかけての指導的精神は、トーマス・ヒル・グリーンであつた。彼は思想的能力と影響との何れに於ても顯著な人であつた。彼は先づ論理學者形而上學者としてのミルの優越的勢力に一擊を與へた。然しミルは誤れる哲學は不合理な制度の支持者であると確信したに拘はらず、此の場合批評者たるグリーンの直覺主義の哲學は、グリーンをして崇拜者としてコプデンとブライトとを持つ熱烈なる改革者たらしむることを妨げなかつた。千八百五十八年彼は大學の討論會で、ジョン・ブライト禮讃の動議を提出した。さうして彼れの云ふが如く、その動議は激昂を以て反對された。二日の對論の後彼は僅か二名の少數派に自己を見出した。暗黑の此の狀態に在る大學に猶を置くことを殆ど恥辱とするとさへ云つた。だが光りは空の一角より輝きつゝあつた（譯者いふ——新自由主義の擡頭を意味する）。その現はるゝに至れる徑路は、オックスフォードの卒業生に負ふ所少からざるものがある。而してそれは彼らのすべての內最も赫々たるグリーンの指導に依つてであつた。

アスクィスはグリーンの後輩であり、後の自由黨首領であるが、「ヴィクトリア時代の樣相」(Some Aspects of the Victorian Age, 1918. p. 19.) の中に云ふ。

ある種の淸教徒的の嚴肅さと熱烈さとが、グリーンの生活を支配してゐたやうに、彼れの思想を貫く一筋の金線であつた。彼は決して他人の思想と體系との單なる借用者ではなかつた。實にその思考の方法と表現の姿態との二つながらに於て、彼は殆んど銳角的の個性を持つてゐた。此の點に於て外部に對する宣傳者としての效驗に關しては、より流暢にして平明な盟友エドワード・ケヤードには及ばなかつた。然し人を敎育する權威に於ては——柔軟自在な學園の原料たる學生に制約的及び構成的感化を及ぼすことに關しては——彼はヴィクトリア朝時代に於ける最も力ありしものの一人であつた。

曩に擧げたハンフリー・ウォード夫人は、小說「ロバート・エルスミア」(Robert Elsmere, 1888) の主人公グレーのモデルとしてグリーンを描寫したが、その「一作家の追憶錄」(A Writer's Recollections, 1918. p. 132.) の中で云ふ。

然しベリオルはマスターなるジョウエットよりも更により多くを私に意味した。トーマス・ヒル・グリーン敎授——「ベリオルのグリーン」——は、當時に於て偉大なるカレッヂの精神的解放的の勢力として、ジョウエットに劣らざる代表者であつた。今や彼れの死後經過した時間は明に示した、彼れの哲學的勞作とその影響とは、十九世紀思想の歷史に於て、恒久的な赫々たる地位を保持すると云ふことを。グリーンと夫人とは私共の親密の友達となつた、さうして「ロバート・エルスミア」の中の「グレー」に於て私は彼れの性向の一端を再現しようと試みた——偉大なる思想家にして又偉大なる敎師たりし彼れの性向、その人は亦人間の中で最も單純な最も眞摯なさうして又最も實際的な人であつた——高き敎養と氣高き性格とがオックスフォードに價値ある限り、オックスフォードは決してそれを忘れることが出來ないだらう。

かほどの感化影響を及ぼした人は、その人格と思想とが分離してゐる筈はない、必ずやその人格を思想に浸透させ、その人格は思想の表現であるに違ひない。かくして彼れの生立を辿つた後に、私はグリーンの思想體系を語らねばならない。